

大川平三郎と私

池田新一著

大川平三郎と私

池田新一著



執務中の大川平三郎



大川育英会夏季大会（大川邸にて）

2列目左より著者、岡野（以上2人立っている）1人おいて武藤理事、永田理事、大川理事長、田中理事、柴田理事、山口六郎次。



大川平三郎夫妻の墓と桜影会奉献五重の塔

奉献五重塔 昭和十二年十二月 桜影会

特別会員	原島美三郎	二宮金次郎	根岸愛蔵	前野 章	小高安男
田幡鉄太郎	海保本三	堀杉良一	栗原二郎	松本重太郎	柿沼準一
第一期会員	高橋 正	尾崎知一	柳沢三郎	新井治重	中村俊雄
池田新一	高橋良雄	織茂誉弑	小松常雄	木村徳治	長島泰明
小谷野喜平	黒沢織四郎	折井富作	新井武司	銭場莊四郎	松崎信雄
第二期会員	秋松宗久	渡辺良造	斉藤永一	鈴木行雄	松下金次郎
落合宮太郎	網野長良	金子豊次	坂口俊次	第九期会員	藤田龜太郎
田中 昭	里見守一	田口松次	菊池儀一	第九期会員	福島政治
安原 寛	宮田正雄	角田徳造	木村逸平	馬場大治	後藤正雄
森 俊男	関根恒次郎	中根金作	関根宗三	初野伝介	白石謙吾
木崎喜平	第五期会員	中島民衛	第八期会員	細田興一	新藤義雄
新井徳次	五十嵐健次	松本利雄	池谷友一	川鍋友三郎	瀬崎貴三
第三期会員	大野留次郎	江黒金一	飯野 貞	武正 栄	第十一期会員
磯部静男	野崎源三郎	新井横治	石井欽二	塚越不二男	飯村博正
浜田 眺	保野福太郎	佐藤誠一	石川喜久保	長島正夫	大越英雄
岡本稻蔵	藤井昌雄	島 清信	石井聞平	倉持清一	吉田 享
奈良新次郎	福田祐作	第七期会員	戸口正明	山路 満	田島季吉
真仁田乙馬	小森一太郎	石川安造	大島 武	町田栄二	新井辰男
古谷喜代次	斉藤安之助	石川正夫	大川四郎	新井英雄	酒卷恒雄
斉藤広太郎	水村正一	飯塚 修	田中淳喜	旭 正明	木村福太郎
坂巻勝郎	神保敏夫	富岡八十雄	滝沢武夫	斉藤尚志	三宅信太郎
堀口茂重	鈴木保五郎	大熊光雄	染谷正二	湯浅芳一	島崎喜三郎
第四期会員	鈴木進一	岡田安郎	成沢福松	茂木 正	元島政晴
飯島桂次	第六期会員	亀田卯作	野口東一	第十期会員	計
石井卯八郎	磯田清蔵	吉田真一	久保真鹵	石川喜夫	壹百四拾名
長谷川光雄	原口倭一	高井秩父	安田栄治郎	飯島 良	



湯河原にて 左より秘書 田幡鉄太郎、大川夫人、著者、大川平三郎。



伊香保スキー場にて 右より2人目、著者、2人おいて大川鉄雄夫婦。



大川道場跡

所在地 坂戸市大字横沼

創豪大川平兵衛英勝は、享和元年（一八〇一年）現熊谷市上之の道迎家に生れたが、幼少の頃小淵家の養子となり栄治郎と称した。少年の頃から剣を好み、熊谷市前田住の神道英念流の達人秋山要助の門に入り、文政五年（一八二二年）には二十歳で免許皆伝を得ている。

その後、横沼村（現坂戸市）の大川与左衛門の養子となり、大川平兵衛英勝と改名、邸内に道場を設け多数の門弟を育てた。

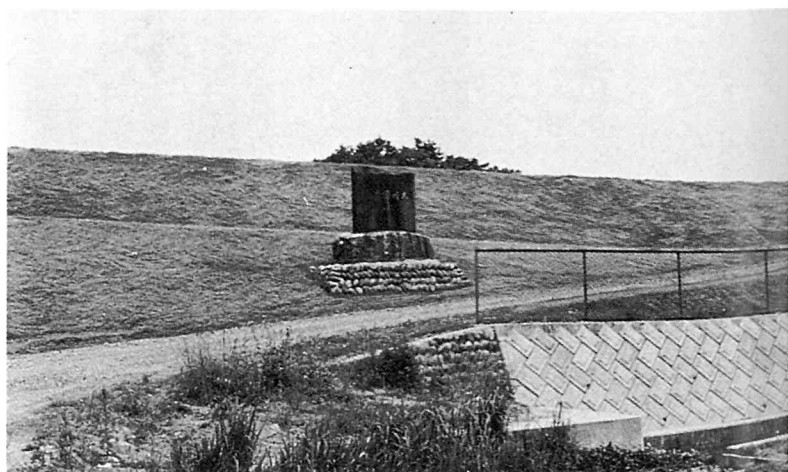
文久二年（一八六二年）川越藩主松平大和守直克に金用されて、剣術師範となり、士分として藩士の馬術に供奉したという。

門弟三千といわれた道場も最近まで残っていたが、過ぐる伊勢湾台風で倒壊し、道場前の老松と越辺川に架かる道場の波しの名のみが、むかしをしのはせている。

昭和五十六年三月

埼玉県

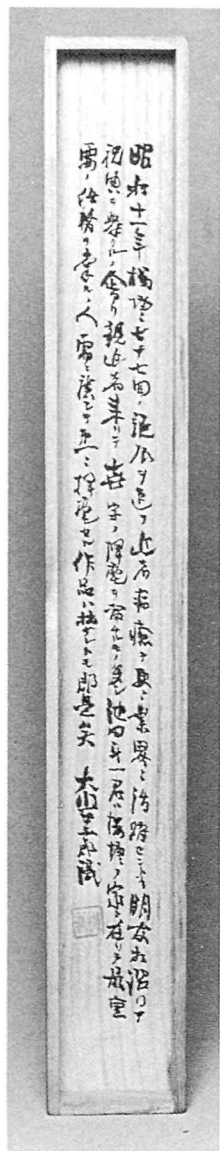
大川道場跡。



大川堤と遺跡碑 碑の裏に下記のように書かれている。

是より以南1150米の堤は極めて低く所謂霞堤で歳々洪水による被害はまことに莫大であった大川翁は深くこれを憂い大正14年県の許可得自力をもって新堤を築くその福祉は甚だ大きく村民この美事に痛く感激して大川堤と命名する今や河川の改修せらるゝに伴い廃堤となる茲に碑を建て、翁の偉業を偲び永くこれを頌せんとする。

昭和36年3月 三芳野地区河川改修期盛同盟会 岩上香堂謹書



大川平三郎より著者が頂戴した掛軸と箱書 昭和11年桜塘77回ノ誕辰ヲ迎フ近者病癒テ更ニ業界ニ活躍セントス朋友相諮リテ祝典ヲ挙グルノ企アリ、親近者来リテ昆字ノ揮毫ヲ需ムルモノ多シ、池田新一君ハ桜塘ノ家ニ在リテ最重要ノ任務ヲ掌ルノ人需ニ応シテ第一ニ揮毫セル作品ハ拙ナレトモ即是矣 大川平三郎識



明治8年ヨリ同32年ニ至ル24年間ハ大川兄弟
 ガ奮闘努力ノ期間ナリ回願スレバ其始兄弟受
 ルノ俸給僅、兄ハ5円弟ハ3円50銭ナリキ
 田ガ手製ノ襦袢ニ3尺帛ヲ締メ草履下駄（靴
 ヲ購フ資カラ欠ク）ニテ午前6時前ヨリ夜10
 時後迄工場内ニ活動シ聊モ倦怠疲労ノ状ヲ示
 サズ蓋出世榮達唯一ノ途ハ他人ノ追隨ヲ容サ
 サル誠意ト努力ヲ提シ長上ヲ敬服セシメ同僚
 シテ批判ノ余地無カラシムルニ在ルヲ悟レ
 ルカ為メナリ兄弟ノ今日ノ事ハ偶然ニアラズ
 其源ハ此大覺悟ニアリ





大川平三郎は湯河原の
静養先でよく陶器を造
っていた。

目 次

はじめに……………7

目 第一章 渋沢栄一と大川平三郎……………13

両者の分担と連帯……………14

大川平三郎の宗教的発想と渋沢栄一の宗教観……………25

渋沢栄一、慶喜の家臣となる……………35

大川平三郎の和魂洋才……………46

大川平三郎の天皇観……………53

渋沢・大川そして私の仏縁……………55

第二章 大川平三郎の人づくり……………65

大川・矢作・本多三者との出会い……………66

樺太工業に入社……………75

樺太視察に随行……………85

第三章 大恐慌の中の大川合名……………97

第四章

時代の背景……………	98
1 金融恐慌……………	
2 浜口緊縮内閣と金解禁の失敗……………	
3 金解禁反対論の大川平三郎と井上・團三者会談……………	
4 浜口内閣から犬養内閣へ……………	
5 テロリストの時代……………	
銀行の応接間で読経……………	117
銀行家大川の責任感……………	122
銀行へお礼まいり……………	126
隠田の神様へお礼まいり……………	131
三社合併問題……………	134
私の被命事業……………	143
伊香保ケーブル……………	144
熊本電気軌道……………	150
百十四銀行の融資……………	152

東京倉庫運輸	154
台湾油脂工業	161
日本劇場を建てる	164
1 帝劇はもう古い	
2 日劇の再建	
3 契約成立	
4 劇場興行まで任される	
5 女将からヒントを得る	
6 めでたく開場	
7 名作『街の灯』	
8 小林一三に肩代わり	
第五章	
大川平三郎の私生活	199
衣食住と趣味	200
女性観	208
宴会の指導	214

第六章

大いなる親心	217
育英給費の返済	218
社長の「出世させ物語」	222
雑誌『キング』に登場	225
私の結婚の親代わり	231
酒悦の顧問となる	236

第七章

わが胸に大川平三郎は生きる	241
社長の家憲づくり	242
後継者は養子に	249
社長の健康	254
社長の大思いと臨終の態度	256
最高の退職記念	261
私の辞任	263
奇しき主従の祈り	266

第八章

大川平三郎の今日的意義……………	269
明治維新はまだ終わっていない……………	270
祖国を忘れた日本人……………	275
日本文化の源流……………	278
維新の文化政策の失敗と廃仏毀釈……………	280
日本の天佑と未達成の使命……………	283
戦勝国の応報と戦後の世界……………	285
宗教時代と世界維新……………	291
法華経如来寿量品……………	295
年譜……………	304

はじめに

このたび、文筆には全く素人の私が、已むを得ず大川平三郎晩年の伝記を書かねばならないことになり、悲壮な気持ちに追い込まれた。

これはひとつには、桜影会会員、つまり大川平三郎の創設した育英会出身者から勧められたことによる。

今年は大川平三郎没後四十七年目に当たる。育英事業(現大平奨学会)も戦後桜影会会員有志の協力により再開十五年目を迎え、小規模ながら、その伝統である大川精神の維持に努めてきた。大川平三郎に直接触れた会員は概ね熟年に達し、また既に鬼籍に入った同志も少なくなない。そこでこの辺で奨学会の将来のため、また広くは後代のためにも、改めて大川精神を書き残す必要があるのではないかということになった。

「大川平三郎晩年の十二年間、直接薫陶を受けた唯一人の育英会出身者として、是非あなたの奮起を切望する」

という声が起こり、その費用の寄附まで申し出る会員も現れた。

これは確かに私の責任ではあるが、事余りにも重大である。「子を知る親に如かず」とはい

うが「親を見ることに子に如かず」とはいわず、殊に偉大な親においては尚更である。

しかも年齢も既に大川平三郎の没年を越え体力的にも全く自信がない。正に進退ここに極まった次第であった。

ところがちょうどこの時、朝日新聞で、渋沢秀雄氏が『明治を耕した話』と題して、父上の『栄一伝』を四回書き直して、第五回目を世に贈るといふ広告を見た。

世界をリードしてきた西欧文明がここで行き詰り、いまや、大きな転換期にきている。そこで明治を耕した渋沢栄一の和魂洋才、道徳経済合一の主張が、まさに今日への警鐘であり、今後、東西文明の正しい融合の規範として、二十一世紀への新しい座標となるのではないかという意味合いのようであった。

殊に私より相当ご高齢のはずの渋沢秀雄氏が、この壮挙、今更ながら氏の識見と孝心に感動し、非力老体に鞭打つても、主恩に報いる最後のご奉公をしなければならぬと、決意させられた次第である。

ところが大川平三郎には、既に竹越与三郎氏の名筆になる公伝ともいうべき一大伝記があり、また巷間、日本製紙業界の両雄として藤原銀次郎氏と対立させた、ジャーナリストの興味本位の記録も少なくない。さらに後進指導の書として『余の体験せる出世学』の如き自叙伝もある。従って、私の試みは今更蛇足かも知れない。また僅か十二年の間で、偉大な大川平三郎の人格

を語ろうとは、おこの沙汰、むしろ大川平三郎を傷つけるのではないかとの危惧もあった。

しかし反面この晩年の十二年間こそ、功成り名遂げた大川平三郎の一代の総括であり、結実である。一方、勅選議員として国政に参画し、また次代の人づくりに執念を燃やした時期でもあった。

しかも昭和の初期、銀行パニックに次ぐ、世界恐慌の襲来、さらに政府の極端なデフレ政策と金解禁等々、維新以来六十年の「富国」の成果が、一朝にして崩壊しようとする日本経済存亡の国難時であった。

この時に示された大川平三郎の発想や姿勢こそ、彼をめぐる当時の日本の裏面史と共に、その真の人物を物語るものであり、むしろこの晩年に焦点を当てることによって、大川平三郎の真価と今日的意義を再発見することが出来るのではないかと考えた。

たまたま読んだ雑誌『青淵』六月号の「青淵先生の言葉」によって、私の愚見が裏打ちされ、勇気付けられたことを感謝して、左に掲げる。

「人の生涯をして価値あらしむるは、一にかかってその晩年にある。古人の句に、『天意夕陽を重んじ、人間晩年を貴ぶ』と、すこぶる我が意を得たものである。人の一生に疎かにして良いという時はない。一分一秒といえども、貴重な時間であるに相違ないが、その中でも余は、晩年が最も大切であると思う。若い時に欠点のあった人でも、晩年が美しければその

人の価値は上るものである」

しかし、最後にこの八十歳の老骨にむち打ち、決意をさせたのは、恩師本多日生猷下の教訓と法華経の教えであった。

恩師と大川平三郎の写真の前で端座合掌した時、何時か歳を忘れて二十代の昔に帰った。あの関東大震災の直後、育英会に救われて、学業を継続し、そのお蔭で、一橋大で仏教研究会に入会、そこで当時、日本仏教界の第一人者の本多日生猷下に巡り会い、

「よし、大川君の人づくりに協力してあげよう」

と約束されながら、遂に果されないまま昭和五年遷化されたこと。大学出の私が強いられることなく、書生のように給仕奉公が出来た喜び。また主従共に仏神に祈って、国難を突破した時の大川平三郎の面影などが、走馬灯のように瞭に浮かんだ。

「法華経を我が得しことは樵、菜つみ、水汲み仕えてぞ得し」の仏語。また「宮仕えを法華経と思召せ」の聖訓を思い浮かべた。

大川平三郎は、今ここに生きておられる。

私の給仕はまだ終わっていない。そして、いまこの混沌の時代に、大川平三郎の憂国の至情を世に伝えることは、主恩に報いる「主従は三世」の宿縁、約束事であると気付いた。

もはや非力も老齢も忘れ、仏祖三宝に祈りつつ、大川平三郎と共に邁進するのみと決意した

はじめに

次第である。

なお、この著作のため、多くの方々の著書を参考にさせていただいたことを深謝する。また、一般の読者の立場を考えて、本文中の敬称は略させていただいた。

第一章 渋沢栄一と大川平三郎

両者の分担と連帯

渋沢秀雄著『明治を耕した話』の中で、大川平三郎がどのように位置付けられていたか、私は知らないのであるが、今日まで、青瀨・渋沢栄一の印象があまりにも強烈であったために、大川平三郎はとかくそのかげにかくれて、むしろ過小評価された傾向があったのではなからうか。私にはそう思われる。

大川平三郎にとっては、渋沢栄一は二十歳年上の義理の伯父、つまり渋沢夫人は、大川平三郎の母の妹であったが、さらに後年は「義父」でもあった。これは大川平三郎が渋沢栄一の四女・照子と結婚したからである。

そして、現実には勤務する会社の社長である。しかも思想上からいえば、尾高藍香の流れを汲む儒教の大先輩だ。さらにNHKのテレビ大河ドラマ「獅子の時代」にも登場するような維新の志士であり、そればかりか、明治の日本経済近代化推進の第一人者として、天下の有名人であった。したがって大川平三郎にとっては、どうしても頭の上がない存在だったことは事実であろう。

しかし、明治時代の日本経済をよく考察するとき、両者の間を単なる縁故者や主従関係との

み見ることには、いささか無理がある。むしろ両者は名コンビとして、日本の近代化、すなわち西欧資本主義の導入から工業化への躍進時代を分担した、有力な連帯耕作者であったと私は考えたいのである。

その証拠に、大川平三郎は生涯、渋沢栄一の高恩を感謝しながらも、決してその七光のもとに育てられたり、それに甘えたりはしなかった。勿論、渋沢栄一自身、親子といえども公私の別に厳しかったようである。また大川平三郎もその自叙伝によれば次のようである。

夢多き十六歳の時、志した学業を捨てて職工を志願したのも、実は大川平三郎の母堂が妹の渋沢夫人へ度重なる借金をしたため、夫人から大川平三郎の父君に対して屈辱的な言葉があり、それが動機であったという、複雑なエピソードもある。

弱冠二十歳にして渡米し、一年余の在米中「母への土産」にしようと千円、現在の一千万円相当の金をためた。その金によって渋沢夫人からの借財を完済させ、家計の一助とされたという。

また「産業は一家の主人」「金融は主婦」と位置づけ、渋沢栄一によって開拓された銀行業、すなわち、わが国最初の近代的金融機関である第一国立銀行に対しても、生涯頭を下げなかった。産業人としての、大川平三郎の反骨精神である。

だが、それにもまして、甘えの余地が無くなったのは、両者の背景となった時代の激変であ

ろう。今や旧時代の維新の先輩が、新時代の「武器」を手にした青年に強く依存する時代となつた。つまり新しい西欧の学問や教養が武器となつたのである。

大川平三郎の成人期に当たる明治の初期を想像すると、討幕攘夷の血腥さは既に去つて、丁番から文明開化のハイカラ時代に急変し、維新の功労者はむしろ過去の人として英雄視され、動乱時代を知らない明治派は、ちょうど終戦後における戦後派の如く、むしろ軟弱な文化人と思はされがちであつたろう。

しかし、現実には決して順風満帆の時代ではない。いわゆる強いられた開国、そしてその近代化は、実は日本の植民地化防衛の形を変えた尊皇攘夷であつた。一見静かな文明開化であるが、西欧知識の吸収は国家的緊急事であり、富国強兵は正にその旗印だつた。

この国是のもとに、事業は先ず国家がこれを採用して、のちに民間へ委譲する国策であつた。しかし維新の先輩には西欧の知識が乏しく、もっぱら高給を出して外人を雇い、これに頼るのが一般であつたようだ。やはり後進国の弱さであろう。

いまここに、大川平三郎の人間形成の跡を偲ぶとき、そこに激しい時代的背景と、これに対応する彼の救国的情熱のほとばしりを感じさせる。

明治八年、自由民権運動はいよいよ全国的となり、国民が公然と政治を論ずる風潮が高まってきた。

時の政府は、これに対抗して新聞条例その他を制定して公布した。これは言論統制のためであった。他人の名誉を毀損する、いつてみればプライバシーを侵害するものは、刑罰を受けるというものだった。だがその実際は、他人とは一般の人のことではなく、皇族と役人の意味であった。

同年の七月、大川平三郎は、前記のように時代的激変によって窮乏した家運を一身に背負う母の困苦を見るに忍びず、名門の大学南校(後の東京大学)を中退し、職工に志願した。これがわずか十六歳の少年の決心だった。その職場とは、渋沢栄一創立の、後の王子製紙となる抄紙会社の工場である。

しかし、ここで職場を共にした外人技師の高給と、それに伴わない技倆の未熟さに失望し、入社後わずか四年、一職工の身分をかえりみず、会社更生策として「社員派米」を急務の事として上層部に建白した。これが明治十二年弱冠二十歳の決意であった。

明治十二年といえば、新橋・横浜間の汽車の運転が、日本人によってやっと行われた年であり、またコレラが全国的に蔓延した年でもある。全国のコレラ患者総数十六万八千余人、そのうち死者は十万一千余人に達した。コレラに対する人々の恐怖は大変なものだった。

「あそこの家もコロリが出た」

「その家もコロリだ」——コロリと死ぬので、コレラをこう呼んで、あわて騒いだ。隔離

病院に入れられると、

「生き肝をとられるぞ」

「生血を絞られるぞ」

などと巷間に取沙汰される大騒動。まだ日本人は大変無知な国民でしかなかった。

それはさておき、大川青年のこの建白は、結局本人自身が選ばれて渡米することになり、しかも単身であった。これは言葉では簡単だが、よく考えてみると大変なことであった。いかに優秀とはいえまだ二十歳の青年、それが文字通り万里の波濤を越えてまだ見ぬ異国へ、しかも自ら言い出しっべとはいえ、会社浮沈に係わる重大使命を背負わされての単身渡米とは、いかにも不可解なことである。会社更生の建白者として、会社の負担節減のため自ら他の同行を断ったからか、あるいは会社幹部の身分的・年齢的な事への軽視と嫉妬心からの処置であったのか。自伝に依れば、この会社の初の派米に、出入商の浅野繪一郎を除いては一人の見送りもなかったという。だが、こうした周囲の迷惑を察知して、大川青年は在米中その解消に努めたという。この派米の決定は、おそらく渋沢社長個人の冒險的勇断によるところが多かったであろう。それは自らの若き日の渡欧の体験と大川青年への大いなる信頼と期待があったからであろう。いわゆるわが子を谷底にけ落とす親獅子の思い——であつたに違いない。

その時、本人は既に自信満々、在米中の生活設計すら描いていたようである。この職工生活

の四年間に、外人技師との接触の機会を逃さず、その技術を学ぶとともに、語学をも修得し、すでに外国人や語学に対する劣等感や、抵抗感を払拭していた。いわば彼にとって渡米はすでにこの工場内で開始されており、実際の渡米はその延長にすぎなかったともいえる。

この出発点は、大川平三郎の人間形成と、その後の運命を決定づけたともいえる。晩年のことであるが、七十歳の老齢にもかかわらず、旅行中も原書のエドガー・アラン・ポーの探偵小説を愛読し、語学力を保つ努力を忘れぬ人であった。

大川青年は、この一年有余の在米生活中に、単に製紙技術の修得にとどまらず、建国百年、フロンティア・スピリットの最も旺盛な米国経済にも触れていた。そして、その国際性と企業経営全般の近代化を習得して、新時代の企業家としての素地を作ったのである。

こうした周到な発想や勇敢な行動は、決して単なる家勢や、出世欲から出たものとは思われない。もとより本人の天分ではあるが、尊敬する渋沢栄一の「和魂洋才」つまり道義経済思想の影響と、時代的背景に対応する経済戦に「事業は国のもの、国防の砦」との愛社憂国の精神の燃焼であったと思われる。

ちなみに、渋沢社長は二十歳の大川青年派米に当たって、その語学力を試すべくひそかに三井物産の益田孝のもとに、依頼状を持たせて訪問させた。

益田孝という人は、有名な財界人である。佐渡奉行に属する「地役人」という土着の侍の長

男に生まれ、十六歳の時に幕府の使節について渡仏し、フランスで軍隊教育を受けて、帰国後は幕府軍の指導教官となったが、明治維新で失職した。その後、横浜の貿易商の店員となり、やがて独立。そのうち三井財閥の国産方横浜出張所の人々と知り合い、その関係で井上馨に認められ、井上が大蔵卿(大臣)になると、紙幣権頭(造幣局長)に抜擢され、隆々たる生涯を送った。

益田孝が、大川平三郎の語学力をすぐ認めて、合格の意味の返事を、それとは知らぬご本人の大川平三郎に持たせたというエピソードは、大変ユーモラスである。当時すでに第一級の国際人であった筈の渋沢栄一にして、なお自ら試験をする語学力に乏しくて、益田孝に頼んだのであろうか。

また最近伝えられるところでは、渋沢栄一は生涯外国の書物は読まなかったという。これは、当時の維新の立役者としては一般的なことであり、それだけにこれからの明治を担う青年への期待は大きく、また同時に、志ある青年の国家的責任感と、意気込みもまた凄まじかったように思われる。現代の青年とは、かなり資質も違っていた。

大川青年は、帰朝後わずか二十二歳にして、職工から一躍して技師長兼副支配人となり、更に二十五歳で再度欧米派遣、ついに三十四歳にして早くも「大王子」の専務取締役昇進し、技術はもとより経営の全般を委任された。これはまさに実質的社長代行である。近代経営の担

い手として、大川青年にかける渋沢社長の期待がいかに大きかったかを物語るものである。

しかもこの間、単に製紙技術、企業経営の近代化にとどまらず、当時滔々として進入して行く西欧文化の全般、物理・化学から経済学・社会学・哲学・宗教などにわたり、自らの語学力を駆使して、原書により体系的・総合的にその本質をさぐり、その採用の姿勢を近代経営者として、明らかにしていた。

そして、その結論として、西欧文化の宗教的欠陥を指摘し、日本的宗教観をもって画竜点睛、活性化して日本に採用したのである。これこそ将来の東西文化融合の基本的姿勢であり、その魁きざねであったというべきである。この着想は恐るべき炯眼けいげんであり、そこに総合的学際人、また近代的国際人として、渋沢栄一とはまた一味違った、新しい時代の人柄を見るのである。

これもまた、国政の要路の一人であった渋沢栄一にとっては、得難い国家的人材であり、もっとも信頼できるアドバイザーであったに相違ないと私は思う。

明治維新以来、渋沢栄一の恩顧を受け、成功した事業家は少なくないが、その中で大川平三郎は、むしろ一種特異の存在であったと思われる。それは、この高邁な識見によるためである。つまり、大川平三郎は、決して一業種の専門家でも、また単なる資本家的事業家、オーナーでもなかったことだ。

その証拠に大川平三郎の晩年は、その関係会社は七十数社に及んだが、そのいずれも異業種

で、しかも資本的占有はみじんも無く、多くは他人からの懇請により、その経営指導を引き受けたものというから驚くのである。しかも、一度受託するや、あたかもオーナーの如く、その企業を愛し、懸命な努力を惜しまなかった。今日のいわゆるサラリーマン経営者ではない。

これも「事業は国のもの、国防の砦」との国家的信念から出たものであったのは当然である。なかなか普通人には出来ないことであろう。

このことは「浅野セメント」の払い下げにまつわる渋沢・浅野・大川三者の経緯がよく物語っている。次のような話がある。

浅野は年齢的には、おそらく二十歳以上の先輩格だが、大川平三郎の職工時代からその人物に着目していて、晴れの渡米には唯一人の歓送者であった。

大川青年の帰朝を待ちかねたように、セメント工場払い下げを政府に申請する。しかもその払い下げの仲介者の渋沢社長に、いま王子製紙更生のトップリーダーである大川青年の参加を強く懇請した。さらに払い下げ価格の四万五千円のうち、三万円を浅野総一郎、残りの一万五千円を大川平三郎の出資分とされていた。

だが、まだ青年の大川に金のある筈がない。

そこで渋沢社長が大川青年に代わって、その融資を引き受け、大川に向かって意味深長な言葉を伝えた。

「成功の暁には一族を守れ」

この時、大川青年が融資を依頼した様子は全くない。これは、おそらく渋沢・浅野両者の合作であろう。すでに四十代のこの両者が、帰朝早々の、まだ二十代の大川青年に賭ける期待は不思議とさえ思われるほど大きかった。

これに応えてか大川青年は定時に王子製紙勤務を終えるや、直ちに馬を飛ばして、セメント工場へ行くのが日課であったという。

また、大川平三郎が兄と弟に、工業面における「衣の紡績業」、食の肥料業をそれぞれ分担させたのも、時代的要請に応えた、愛国的発想による配分であったと思われる。

渋沢・大川両者の生涯の事業面を大観すると、一方は資本主義経済の血脈である「金融面」、他方その胃袋である「生産面」つまり全工業面をそれぞれ分担していたようである。これもむしろ必然的であり、ここにも明治維新の、連帯耕作者としての証明を見るのである。この点は更に研究の余地がある。

これを要約すると、両者は日本の植民地化防衛のための「富国」、即ち経済的近代化の精神を、まず和魂洋才と位置づけ、金融と生産の両面を分担し、さらに維新によって神道一本に解体され弱体化された、神・儒・仏三教融合の日本文化の復活のために、和魂の補強として、その両翼である儒教と仏教、すなわち道徳と宗教を、夫々分担、提唱する結果ともなった。

このことを私は大変面白く感じるのである。激動の時流の中にいて、あるいは両者とも、無意識であったのであろうか。

この儒仏の発想は、実は一面において、開国百年來未だ修復されていない、維新の文化政策の失敗による欠陥を補うための、また一面において東洋思想の西欧文化への対応と、同時に西欧先進国をして、アジア、即ちその代表国である日本を理解させるための、基本的条件であったのである。

こう見れば、両者のこの「分担と連帯」は、むしろ天与の国家的使命であったようだ。

大川平三郎の宗教的発想と渋沢栄一の宗教観

ここで不思議に思われるのは、この青年大川が、道徳主義一辺倒の渋沢栄一のもとにあって、どうして前述のような宗教的発想と信念を持っていたのであろうか、ということである。

江戸時代、儒教は大いに奨励され、藩校以外にも、村の碩学せきがくが塾を開いて農村の子弟を指導していた。維新の志士を生んだ松下村塾はその好例である。

松下村塾は、幕末から明治中期まで、山口県の萩市字松本にあった私塾で、天保十二年に玉木文之進が創立したものである。その後、安政三年に、吉田松陰が儒学・兵学をもとに、尊皇・愛国の精神を説いて、その門からは、高杉晋作・伊藤博文・品川弥二郎・山県有朋らが輩出し、幕末から維新へと国事に奔走したことは知られている。

当時、渋沢家は農業を本業としていたが、畑仕事だけでは金が残らない。そこで藍を栽培して、藍玉製造に努力したという。

当主の市郎右衛門は几帳面な、骨身を惜しまない勤勉家で、村や人のためによく尽くした。人望もあり、金もあつたため、領主安部家の御用達として苗字帯刀を許されていたと聞く。

渋沢栄一は、七歳から従兄の藍香・尾高新五郎の塾である尾高村塾に通い、四書五経を学ん

だ。終生、道德主義をもって一貫したのもこれに因る。

その渋沢栄一の部下であり、また塾頭の尾高藍香は、母方の叔父に当たる筈だから、大川平三郎は当然、この両先輩に随喜追従するのは自然であったであろう。

当時、仏教は廃仏毀釈による最低評価の時代で、葬儀と先祖崇拜以外に仏縁はなかった筈だ。従ってこの宗教的発想は、あるいは大川平三郎本人の天分であり、また環境の相違、天与の運命であったかと思われる。

運命の人といえ、渋沢栄一はその典型であった。半商半農、殿様に特別奉仕するほどの生活豊かな名主の長男で、家業を継ぐのが家の安泰であり、親孝行でもあったであろうに、そうしなかったのはどうも私には理解できない。

父が病気の時のこと、父の代理で代官所に行き、土下座して頭を下げていると、執事から、「このたび当家のお姫さまが、お興入れ遊ばすことになった。ついてはその方どもに、御用金を申しつける。ありがたくお受けするように」

といわれたが、即座にお受けせず、帰って父に相談してからご返事しますと答えたので、大変叱られたというエピソードがある。

こうした不快感から、尾高藍香と行動を共にするようになり、家業も妻子も捨てて、維新の志士の仲間入りをするようになったという。

家業よりも、また、君、君たらずとも、臣、臣たれの道義よりも、むしろ治国平天下の教えと、尊皇倒幕の時代的風潮をもろに受け入れた尾高村塾の教育によって洗脳され、激発したものであろう。

本来、倒幕の推進者は下級の武士階級で、農村子弟の出る幕はなかった筈である。にもかかわらず、こうした行動に出たということは、多感な青年の一種の甘えであり、一過性の熱病とも思われたであらう。それ以外には考えられない。

しかし尊皇倒幕は既に成り、明治の新時代となっても、なお「道徳一本槍」をもって、一生を貫き通したことは、一見おおらかな一本気の姿勢からと思われるが、実は明治の文明開化の時流に、とかく日本の伝統文化が忘れられようとする世相——その源は維新の失政——を直感した、渋沢栄一のすばらしい天分であったであらう。

一方、大川家はどうかであったか。代々剣道指南の、いわば士分に似た家風である。維新の改革をまともに受け、経済第一主義の明治の世代に、文字通りの極貧に陥ったのであった。この点では、渋沢家とは対照的である。

母を助け、家を支えるものは、テンエイジャーの三人の兄弟だけであった。しかし、時代はすでに維新の血腥さは消えて、文明開化の香りが漂い始めた頃である。三人の少年は、わが家の赤貧も知らず、行灯あんどんのわずかな灯りの下で、懸命に働く母の手に支えられて、それぞれ新し

い希望の夢に胸をふくらませながら、育っていた時であろう。

しかし、この大川家には、渋沢家と少し違って、士魂があったのではなからうか。常に死と直面する武道指南の家に育ち、殊に祖父は剣禅一味の武道の達人、しかも他人の窮乏を見ては、己を忘れてそれを救おうという慈善家であり、宗教心の持主であった。

また終生、大川平三郎の臉から離れなかった、あの貧窮のなかに一家をささえる母の姿に、崇高な「仏心」が芽生えたのであろう。

青年大川が、西欧諸学における宗教的欠陥を見抜き、日本伝統の仏教的宗教観をもって、これを日本化した着想は、実にこの母の宗教的慈愛と、祖父の慈善家の隔世遺伝とによって、培われたものではあるまいか。

ちなみに維新の先達の訓話には、とかく宗教性が乏しいといわれるが、西欧文化は単に儒教的道德観だけでは批判しきれないものがある。

たとえば、渋沢栄一の道德經濟合一論の中に、富国論の著者アダム・スミスが道德教育を重視したことを挙げて、共感しているが、渋沢栄一の道德観とスミスのそれとは根本的に異なっていて、殊に人間観に至っては、儒教は「天道明德」即ち人に明德を認め、一方、キリスト教は人間の「原罪論」に立っている。これは宗教的相違である。

たまたま、手許にある雑誌『青澗』の中で「渋沢栄一の宗教観」と題する、無名の筆者によ

る一文を読んだので、ここに紹介する。

結論からいえば、渋沢栄一は特定の宗門の信徒ではなかった。しかし神社・寺院・教会などの活動には積極的に援助した。それは、社会教化・福祉につながるものと理解しての行爲であった。そこには神より授かる奇蹟、仏より受ける加護など、微塵も期待していなかった。聖書も経文も經典も、皆宗祖の思想と考えていたようである。(傍点は原文)

明治四十五年四月十一日、飛鳥山の自邸に、成瀬仁蔵・森村市左衛門・井上哲次郎・中島力造・浮田和民・姉崎正治ほか、日米の著名人を招待して、

「現今、日本においては、諸種の宗教、並びに道徳主義雜然として、人心の帰着に迷うこと多し、吾人は如此状態に甘んずべきか。思想界の指導者は之に對して、如何に考えらるか、また東西兩洋文明の關係も、單に國際問題にあらずして、此の辺に關係なきか、本会合の趣旨はこの問題の研究にある」

といつて、特に仏教とキリスト教の一致の帰着を得る道を探るため、会の名を「帰一協會」と名づけ、没するまで研究をつづけられたのは、その証左であらう。

以上が、その文章の抜書きである。

前半は直接、渋沢栄一の言葉ではない。果してこれが、彼の宗教観であるかどうかは疑わしい。

なぜならば、日本仏教は当時、形骸化されたとはいえ先祖からの家の宗教があり、宗教意識は日本の伝統文化として潜在していた筈である。錦江湾に月照上人と入水を企てた西郷南洲とも会い、自らも幾たびか死線を越え、同志の死にも直面し、殊に倒幕から佐幕へと変わっていった運命の揺籃のうちに、まさに熊谷蓮生坊の諦観も生まれたに相違あるまい。

倒幕から佐幕へという、まるで変節したようなので、少しその経緯に触れてみよう。

渋沢栄一は、子供の時から尾高藍香宅へ通って学問を教わった。尾高藍香は藤田東湖や会沢正志の論旨に心酔し、開国を許した幕府は国賊、鎖国を主張する水戸派の人士は忠臣、と考えていた。

渋沢栄一は、この藍香から尊皇攘夷の教えを受けた。やがて、藍香、その弟の長七郎、渋沢栄一の従兄の喜作など、その愛国の情熱は尊皇攘夷から倒幕へと傾いていった。彼らは幕府を倒す具体案を練った。

たまたま長七郎は京都に行っていたので、彼を除いて謀議は進められていった。同志も六十人に達していた。手頃な城を占領して、そこから尊皇攘夷の大義名分を天下に呼号することとなり、長七郎の帰るのを待って、挙兵することが決まった。

渋沢栄一は、父親から一身の自由を認めてもらわなければならず、父に話した。

「幕政はゆきづまって、やがて天下は乱れるでしょう。農民だからといって、安閑としてはいられません。立ち上がらねば……」

話し終わらぬうちに、父はさえぎった。

「それは違う。分をわきまえぬ思い上がりだ。百姓は農業に励むのが一番だ」

はじめから二人の意見は食い違っていたが、一晩かかって、かたくなな父の心を開き、了解をとることが出来た。父は了解というより、むしろあきらめたのだろう。

翌日、渋沢栄一と喜作は江戸へ出た。紹介者により一橋家の平岡円四郎を訪問した。

その頃、京都では、倒幕の足並をそろえてきた薩長両藩の間にいざこざが生じ、薩摩を主体とする、公武合体派が勢力を得た。

長州藩は、宮門警護の役を被免された。長州藩士は、これを怒って三条中納言以下七人の公卿を擁して戦ったが敗れた。この挙と呼応して立った十津川浪士もまた敗れ去った。

この善後策のため、徳川慶喜は京都へ行くことになった。平岡は出発前に渋沢栄一らに、

「江戸に何時までいても、何にもならない。いっしょに京都へ行こう」

とすすめたが、二人には倒幕の陰謀があるので、行くことはできない。

「いずれあとから行きます」

といつて、一橋家の重臣をごまかして、郷里へ帰った。

こうして、やがて長七郎も帰って来たので、一味の主だったものが六人、藍香の家の二階に集まった。藍香は拳兵の順序を、熱心に説明しはじめた。

しかし、それにすぐ反対したのは、京都から帰ったばかりの長七郎であった。

「不賛成だ。拳兵はまるで無茶だ。兄さんも渋沢君たちも我のみ知って彼を知らぬ。とても、この人数で城の占領など思いもよらない」

他の者は、長七郎の反対を、誰も予想していなかった。

「裏切るのか、長七郎……」

「変心したか、長七郎……」

たちまち皆は殺気だったが、藍香が制し、長七郎の話をなおも聞くことにした。

彼は熱をおびて語った。

「十津川浪士は百人あまりで奮戦したが、地元五条の代官を斬っただけで敗走した。まして七十人足らずで、城を取れるわけがない」

そういう論旨だった。結局は白熱した議論ののち、

「天下の大勢を、もう少し見てみよう」

という話合いができて解散した。

一味は、秘密裏に集めた武器を始末し、渋沢栄一と喜作の両青年は京都の様子を見に行くことを決め、旅立った。

二人は、再び平岡田四郎を訪ねた。そこで在京の志士たちと会う機会もあった。

京都は小康を得ていた。さまざまの志士の語るのを聞いて、長七郎の反対したことが、よく理解できたのである。

ある日、二人で郷里の長七郎へ、京都へ来て共に倒幕運動に参加しないか、といった思いをこめて手紙を出した。その手紙と入れ違いに、長七郎から手紙が来た。それは思いがけない知らせであった。

長七郎と中村三平・真田範之助の三人で江戸へ向う途中、長七郎が、飛脚ふうの男を、すれちがいがさま一刀のもとに斬り捨てたというのだ。

長七郎には、その男の顔が狐に見えたためらしい。あとのことだが、彼はその頃から少し頭がおかしくなっていたことが分かった。しかし、白昼の街道で人を斬ったのだから、たちまち捕われて、江戸小伝馬町の牢に三人とも入れられてしまった。長七郎は以前に、渋沢栄一と喜作から来た手紙を持っていた。それには倒幕のことが詳しく書いてあった。

そこで、二人の身も危険と察知した長七郎は、袖の下を使って、手紙を京都へ寄せてきたというわけである。牢内の長七郎は、もう正気にもどっていたという。渋沢栄一と喜作は、長七

郎を救うことはおろか、自分たちの身も危険になり、毎日苦慮していた。

渋沢栄一、慶喜の家臣となる

その頃である。平岡円四郎から「すぐ来い」という手紙が届いた。二人は早速行つた。

「君たちは人を殺したことがあるか、また金を盗んだことはないか」

いきなり平岡が聞いた。何のことか分からぬままに答えていた。

「決して、そんなことはしていません」

「確かにないな、それでは幕府に対して、何かたくらんだことはないか」

二人は「城の乗っとり」のことは隠して、何もないと答えたが、しつこく質問を受けた。

「しかし、君らはそういうが、何かあるだろう。実は幕府から一橋家へ問い合わせがきているぞ。君たちは一橋の家臣かどうか。家臣でないなら調べる必要があるから、引き渡せといつてきているのだ。本当のことを話さない」

話を聞きおわると、二人は顔を見合わせていた。

「この人には、全部話してしまおう」——互に顔でうなずきあって、包み隠さず現在までの計画を、全部しゃべってしまった。

「それでよく分かった。君たちを幕府へ渡せば、牢に入れられる。牢に入れられれば、まず死

ぬだろう。死ねば志もむなしくなる。ひとつだけ助かる道は、一橋家の家臣になることだ」

なるほど「渡りに舟」のうまい話だが、倒幕の志はどうなるだろう。ここで、幕臣になるのは命惜しさの変節ではないか。そこで一旦宿へ戻り、相談することにして、その場は引き下がった。二人は運命の岐路に立っていた。

渋沢栄一はこう考えた。このまま、ここにいたら生活に困る。といって今さら郷里にも帰れない。思いきって一橋に仕えて、一橋家臣の立場から長七郎の救出を考え、その上、内部からの倒幕運動も考えられないことはないのではないか。

喜作の方は、はじめは何としてでも長七郎を助けだす、と息まっていたが、現実問題としてそれが無理と思ったか、次第に折れてきた。二人の青年は再び平岡を訪ねた。

「私たちは農民の生まれですが、天下の志士のつもりです。入牢がいやさに仕官する気はありません。名君の噂の高い慶喜公が、私どもを有為の人材とみて、召しかかえて下さるなら仕官致します。まず慶喜公に私どもの意見書をご覧いただき、その上で召しかかえという順序でお願いします」

「それは面白い。出すがよかろう」

平岡は笑いながらいった。二人は用意してきた意見書を差し出しながらいった。

「もうひとつ、お願いがあります。慶喜公の前で、私どもの意見を述べさせて下さい」

「それは困る。そんな前例はない」

さすがの平岡も驚きながら、手をふって咄嗟に断わった。いくら落目になっても大名は大名である。まして、まだ時代は封建時代である。「お目見え以下」のものは、殿様の顔を見ることさえ許されないのだ。平岡が困ったのは当然である。

「前例のない点では、百姓をお召しかかえになるのも同じでしょう」

「そんな理屈をいっても駄目だ」

「それが駄目なら、牢へ入ります。仕官は断わります」

これでは、どっちが採用するのかわからない。さすがに渋沢栄一である。

「天下の権、平岡にあり」とまでいわれていた重臣の平岡も、すっかり考えこんでしまった。若い百姓青年にへこまされたわけである。

二、三日過ぎると、平岡が二人を呼びだし名案をさずけた。

「慶喜公が騎馬でお出かけになる日も近いので、その時お前らは、馬の前を走って、公のお目にとまるようにしろ」

二人は、すっかり張り切った。

その当日、京都郊外に待機して、今や遅しと手ぐすねをひいている。やがて慶喜公は、馬上豊かにすすんで来た。

それっぽばかり、二人は駆けだした。下加茂から山鼻まで、十町(約一一〇〇メートル)ばかりを一気に走ったのである。

「前を走っている者共、あれは何者じゃ」

慶喜公は叫んだ。近習の侍も何がなんだか分からぬまま、危害はない者と見たか、

「新規お召しかかえの者共にございます」

うまい具合につじつまを合わせていった。

それから一兩日して、二人は慶喜公に内お目見えを許された。若き日の渋沢栄一は、ここぞとばかり意見を開陳したのである。当時としては嘘のような話だが、実話なのである。

「君公は水戸烈公の御子で、徳川ご一族の一橋家のご当主。貴い御身におわすのみならず、京都守護総督の要職に就いてもおられます。さすればご深慮も充分におありのことと拝察いたします。こんにちでは、すでに徳川幕府は滅亡の危機にさらされている状態とも存じあげますが、御当家は幕府から離れて、独自の道を進んでこそ、終局において、宗家を助けることが出来ると愚考致します。

それには、広く天下の志士を集めることが第一です。世の中には天下を治めんとする者も、天下を乱さんとする者もおりますが、天下を乱すほどの力量のある人物をご当家に集めますれば、他に乱を起こす者はなくなり、天下は自ずから治まるに相違ありません。

もし、御当家にかかる有能な人物が集まれば、姑息の旧態を改革され、諸事進歩的になつてまいります。そのために、幕府が危惧の念を抱き、一橋討伐の論が、起ころやもしれません。また、望むと望まぬとにかかわらず、日本国の大事には、何事も替えられません。そうなれば、幕府を倒すことが、君公の中興を意味するものと、わたくしは信じます」

一心こめての言上である。渋沢栄一のこの熱弁を、慶喜はただふんふんと聞くだけで、質問もしなければ、意見も述べなかつたという。殿様とはそういうものであつたのだから。

張り合ひはなかつたが、その結果二人は、一橋家の家臣となることができたのである。

やがて、平岡の命令で西郷隆盛に会いに行つた。もう、百姓ではなく侍であつた。

政治問題を論じ、豚鍋をご馳走になつてきたりした。そうこうするうち、元治から慶応へと二年あまりの歳月が流れた。慶喜は一橋家から將軍職に就いていた。

慶応二年十一月。渋沢栄一は思いもよらぬ任務を命ぜられた。

フランスのナポレオン三世が、翌年パリで万国博覧会を開くにあたり、世界各国の帝王を式典に招待するというので、將軍の弟の昭武がパリへ行くことに決定した。昭武はまだ十四歳の少年である。留学もかねてということであつた。渋沢栄一が二十八歳の時である。

随員はなるべく少なくというので、七人にしぼつたが、庶務会計の係りがいないので困つているときに、慶喜將軍がこう命じた。

「その役は渋沢こそ適任だ。将来本人のためにもなろうから、ぜひ彼を随行させよ」

至上命令である。それで決定し、だれも異論などはない。

渋沢栄一も、責任重大なれど、むろん拜命した。このフランス行きが、後年の渋沢栄一の人生にどれほど役立ったかは、いうまでもないことだろう。

こうして攘夷論者から、開国論の指導者へと、数奇な運命をたどったのである。ここに死生観ないし宗教観が、若い渋沢栄一の心に培われないはずはない。

先の渋沢栄一の宗教観の後半、婦一協会設立の趣旨から見れば、これは単に社会教化、福祉ないし国際問題のためだけではなかった。人心すなわち思想文化の問題として、既成仏教の宗派的乱立雑居にあきたらず、その統一と共に、東西宗教の婦一を期待し、人類平和（和魂）の実現に一生をかけたのではなかったか。

渋沢栄一の生涯をかけた道徳運動を見るに、それは決して中国の儒教ではなく、既に聖徳太子によって選別採用された日本儒教であり、万善回帰の法華経によって融合された神・儒・仏三教の中の儒教であったと思われる。

「吾、生を知らず、いづくんぞ死を知らんや」

「吾、聖人に非ず、印度に浮図（仏）という者あり。これ真の聖人なり」

「礼楽（儒教）先に馳せて、真道（仏教）後に開く」

これはすべて、儒教を仏教の「初門」とした孔子の言葉である。また古来仏道と離れた儒教は、

「色彩に膠なきが如し」

といわれ、その実践力は宗教的信念にあるとされている。一栄沢のそれは正に実践の儒教であり、その生涯の一貫性は、一栄沢の内に潜む、日本伝統の宗教的文化性に裏付けられた自ずからなる躍動であったと思う。

その大きな宿縁の一つは、前述の徳川慶喜との出会いとその影響であろう。慶喜の大政奉還は、薩・長・土・肥の強圧によるものでなく、彼自身の信念であった。それはまた、水戸の勤皇精神であり、その源は遠く家康の内室、徳川御三家の生母「お万の方」養珠院の法華経信仰に発するといわれている。

徳川三百年を支えた「副將軍水戸家」の勤皇精神は、まさに伝統的の日本文化の精髓である。また退勢のうちによく節を乱すことなく、これを実践した慶喜の進退は、正にその精華であり、一栄沢一の生きた模範であったに相違ない。

以上、一栄沢と大川平三郎の宿命的な「分担と連帯」の出発点を見てきたが、最後にその終着駅と思われるエピソッドをあげて結びとする。

それは、生涯もっとも忠実な道義経済の実践者であった両者が、自ら育てた資本主義の中か

ら、道義を忘れた「財閥」を生み落とし、その鬼子に共に己の足をかまれた物語である。

渋沢社長と大川専務の名コンビで、日本一の優良会社に育てあげた王子製紙が、木材でパルプを作り、新聞の巻取紙を製造する計画を新たに起こし、二百万円の増資をして、四百万円の資本とするについて、社長の渋沢栄一は三井の重鎮中上川に相談した。

「あなたの増資計画には賛成致します。だが、それには専務を一人三井から出させていたいただきたい。差し当たっては、藤山雷太を出向させたいと思います」

ところがその藤山に何か意図するところがあつたようで、大川・藤山両専務は、性格や人生観や経営方針などで、ことごとに対立したのである。

ある日藤山が社長室に入って来た。

「大変に申し上げにくいお話ですが、はっきり申し上げます。社長、あなたは会社をやめて下さいませんでしょうか」

と話しにくいといいながら、きわめて単刀直入に話を切り出した。さすがの渋沢社長も驚いて、聞き返した。

「それは君の個人的な意見か、それとも三井の意思か、どうなんだ」

「私は、三井を代表して来ているのですから、私の考えは三井の考えと同様です」

その頃、渋沢社長はこの王子製紙の成長を何よりの楽しみにしていた。通勤に便利のため、

飛鳥山に別邸を建てたりもした。明治二十三年以後は、ずっとそこで過ごしていたほどで、また大川専務に大切にしていた娘を嫁にやったのも、王子製紙に対する愛情のためでもあったらう。

工場の煙突から、煙の上がるのを朝夕楽しみにして眺めており、終生離れたくないとまで思っていたのである。驚くのも無理はなかった。

渋沢社長は、しばらく考えてからいった。

「君の話はよく分かった」と、即座に辞表を書いて手渡した。

明治三十一年八月のことである。渋沢栄一は社長を辞任し、大川平三郎は平取締役、技師長に格下げされ、王子製紙の実権は藤山が握ることになった。この時、この三井の強引な仕打ちに憤慨した経営陣は、大川専務を擁して湯河原に結集、労働組合ならぬ、また賃上げ闘争でもない、道義的糾弾のためのストを決行した。

結局渋沢社長の辞意は固く、大川平三郎は同志と共に、渋沢社長に殉じて退職した。時に三十九歳、これが日本最初のストライキと称された。

後年「大日本製糖」に大疑獄事件が起こり、渋沢栄一はその善後策のために奔走した。株主総会は大荒れに荒れて、相談役の渋沢栄一に食ってかかる株主もいた。しかし渋沢栄一は熱意をこめて、今までの真相や、今後の方針を整然と述べた。

荒れていた会場も静まり、満場一致で渋沢栄一に新重役の指名を一任した。

その時、渋沢栄一は取締役になんと藤山雷太をあげ、ほかに二人と、監査役に指田義雄ほか一人を推薦し、その通り承認されて総会は終わった。

この顛末を、のちに池田成彬は次のように語っている。

「藤山雷太も、これという仕事のない時に、大日本製糖の整理問題が起こって、渋沢に拾われた。渋沢という人は偉いね。かつては、あなたは辞職して下さいとって迫った藤山を救ったのだから、やはり普通の人にはできないことをする人ですよ」

藤山雷太が渋沢栄一の期待にこたえて、日糖の整理を軌道に乗せたのは立派であった。

また、話は変わるが、昭和の大不況に実現した日本三大製紙合併の際、新会社の初代社長として、井上大蔵大臣と團三井合名理事長との話し合いで、大川平三郎が決定していた。だが、井上、團両者の横死を好機にそれをしりぞけた三井財閥は、その大番頭である王子製紙社長の藤原銀次郎を新任させた。

これに対して「後進に道を譲り花をもたせる」と語って清く身を引いた大川平三郎。

なんと不思議な渋沢・大川両者の運命であろう。皮肉な一致というほかないであろう。

これは世俗的には、一見非運のように見える。だが両者とも、その宗教的、道徳的理想主義により、それを逆に「克己の法悦」に換えてしまった。これは、あるいはともに郷土関係の風

土と気質であったかも知れない。

かつて、両者とも自ら「財閥」たらんとすれば、それは可能であった。

しかし、自己の道義性が、不義の財形を許さなかったのだと述懐した。やがて日本の敗戦、そして財閥の解体は、道義の勝利と、因果応報とを如実に示したのではあるまいか。

なお追記しておくが、洪沢栄一は、徳川將軍の弟で、民部公子と称された昭武の供として慶応三年一月に日本を出発、二月にマルセーユに着き、三月に民部公子に従って、ナポレオン三世に謁見、八月にパリを出発して、そのあと、スイス、オランダ、ベルギー、イタリヤ、イギリスを歴訪した。——その頃、日本では慶喜の大政奉還、明治維新と上を下への大騒動である。「すぐ帰国しなければなりませんまい」

従者の相談の結果を民部公子に言上して、慶応四年九月、マルセーユを出発し、(明治元年)十一月に横浜へ到着した。長期留学どころではなくなった。徳川慶喜の身がどうなるか分からないからだ。

——やがて、洪沢栄一は明治二年、新政府出仕。租税正として、財界指導者の一步を踏み出してゆくのである。

大川平三郎の和魂洋才

大川平三郎は、毎年一回、樺太に旅行した。

泊居を根拠地にして、方々の工場を巡察するのが例になっていた。

私はその樺太旅行に二回随行して、大川社長の身の回りの世話をし、往復の船の中や、宿舎などで、社長の口から親しく色々な話を聞いた。

その話には、大川平三郎の人格の形成を知る上で、大変重要なことが含まれているので、記憶をたどりながら、順序だてて語ってみたいと思う。

以下は大川平三郎の話の断片である――

自分は、渋沢先生の肝煎りで、十六歳のときに先生が社長であった王子製紙の図引工となったが、外国の技師を雇って、紙を漉く仕事をしているのを見て、製紙の仕事は紙を漉くことが一番大切であると考え、図引工から抄紙工に職場替えをしてもらった。

それが明治八年のことだから、欧米流の機械装置については、日本は殆ど未開国であった。

そこへもってきて、巨大で複雑な機械を据えつけて、僅か二人の外人で運転しようとするのは、はじめから無理な計画であった。

外人は英国の機械技師と、米国の抄紙技師の二人しかいなかった。二人とも、立派な大学出の機械専門の人であったが、機械技師の方は、機械は専門であっても「製紙」についての知識はなかった。

「抄紙技師」君も、実際は原料製造の専門家で、抄紙の技術は素人と同じ未経験者だったので、二人で機械を運転しても、故障ばかり起こしていた。

そんな状態が長い間つづき、どうしても紙が機械からうまく出てこない。ようやく少し出たと思うと、すぐに切れてしまう。今日よくても、明日は駄目という具合だ。どうしても完全な製品が出来ない。

他に高給取りの日本人技師もいることはいるが、理論だけで、工場に出て来て自分たちを指揮していっしょに働くだけの、業務に通じたものがいなかった。

ある日、自分は渋沢社長に呼ばれた。

「いったい、故障ばかりで、何かうまい方法はないのか」

突然、そう相談をもちかけられた。

渋沢社長には十三歳の時から、お世話になっているので、なんとしても自分が、この紙の問題を解決しなくてはならないと考えた。

そこでこの問題は、他人にまかせておけないと考えた。自ら朝は五時に出勤して、夜は九時、

十時まで機械の側に立って、全力をつくして機械の運転を研究した。

数週間後、ついに、自分が機械を動かせばちゃんとした紙が出てくるまでになった。

そのころは、機械による大量生産といっても、一日中同じ製品を作るのではなく、新聞の紙も漉けば、雑誌の紙も漉くし、単行本の紙も漉くという具合で、紙の種類によって機械の車輪の回転を調節しなければならぬ。そこでその方法を表にして手帳につけた。それにしたがって、機械を操作できるからである。

機械を動かすには、当然だが石炭をたき、蒸気を起こして、十馬力とか二十馬力とかいっていたが、外人の命令で火力や蒸気をコントロールするだけで、原理というものが分からない。原理を知るには、物理・化学を勉強しなくてはならぬと考えた。水道橋の古本屋を探して歩いた。そこでギゾーの物理学書という本をみつけた。しかし、それは原書で、しかも専門書だから、とても難解だった。

昔の洋学者の伊東玄朴や桂川周甫が、外国の本を読むとき、辞書すらなかったので先ず自分で辞書を作り、それから本を読んだということを思い出した。現在は辞書があるからどれほど楽かと考えながら、辞書と首っ引きで読んでいった。

すると、大気の圧力の説明に出会って、一頁を読むごとに自分の知識が増えていった。

更につきつめたいと、今度は、クワッケンボスの物理学を友人の山崎・上村などに教わりな

から読んだのである。

この頃は、知識欲も旺盛で、友人を社宅に呼んで読書の研究もやった。研究を続けると、今度は物理学は「何のためにあるのか」と考えるようになった。

この疑問を解決する学問は、経済学ではないかと思つて、また水道橋の古本屋へ行って、経済学の本を漁つた。

アダム・スミスも、ジョン・ステュアート・ミルも、カール・マルクスも、一応読んでみた。なかでも、評判のよかつたのは、アダム・スミスの『ウェルス・オブ・ネーション』という本だつた。

この本を熟読すると、物理・化学によつて、作られた物質は、やはり人のため国民のために作られ、国の繁栄をもたらすものだということが、やつと分かつた。

さらに経済を發展させる人間の動機は、何かというと、それは人間の物質的欲望だという。人間にはそういう欲望がある。欲望をおさえるのではなく、欲望を自由に發揮させるのだ。そうなれば、競争が起こるが、その競争は、需要供給の市場というものがあつて、自然に調和されていく。それを説明するのが経済学である。

そこまで分かつて、自分は、さらに考えた。

一体、人間の生活を支える本当の源とは何か。西欧のいう物質に対する欲望だけが根元だろ

うか。

人間も動物の仲間には違いないから、もちろん動物的本能もあるだろうが、万物の霊長としてもっと尊いものを中心であるはずだ。

いままで自分たちは、とくに日本人としては、自分の個人的な欲望を中心と見るような考え方は、あまり教わらなかった。

国のためとか、家のためとか、親のためといったところに生き甲斐を感じてきた筈だ。そこで、どうしても、欲望というものを研究する必要が出てきた。

それを知るのには哲学ではないか。西洋の哲学は、それをどういうふうに教えているかと、次は哲学の勉強に入った。

哲学の中で、いちばん印象に残っているのはスペンサーの、むしろ「社会哲学」というか、一種の文明論だった。

しかし西洋の哲学も、次第に追究していくと、結局、人間ないし社会には、ひとつの真理というものがあって、いっさいが、その真理に基づいて、それに支配されていくというのが、結論のようである。

たしかに真理というものがあることは、考えられるけれども、どうも、そこには人間の道義とか、感情というものが、ひとつも働いてこないのである。

人間が働いたり、物を作ったりするのは、単につめたい真理のためだけではなく、そこには前後左右、互いに、愛情とか信頼とか奉仕とか報恩とか、そんな義理と人情が、働いている筈だと思つた。

そこでまた、西洋哲学というものに対して、ひとつの疑問にぶつかってしまった。それで、ふと気がついたのは、宗教の存在だった。

こちらへんに、宗教の役目があるはずだ。そういえば西洋では、哲学と宗教が別々に発達していた。

そこで初めて、宗教というものに取り組んだ。いろいろ研究してみたが、これはなかなか奥が深く、これを究めようとすると、どうしても一生かかってしまう。

自分は宗教家になるのでもなければ、布教師になるのでもない。

事業家として、日本の国是に基づいて、日本の産業をどう発展させ、そして、欧米に追いつくかということを実行してきているので、宗教に一生をかけるわけにはいかなかった。

ここで結論として、「宇宙に神あり」との信念を得た。そして、さらに国家社会に、家に、また人の心に神があり、こういう温かい神の存在が裏付けになって、そこに真理が働き、経済が動き、さらに物を生みだす力となってくると考えた。

いい換えれば、いままでの自分の学問はばらばらではなく、もともと、この神の啓示が入っ

ていたのだ。

かくて神の心がまた、人間自身の本当の心であり、また、この神に向かう信心が人間の道義の元であるとも考えた。

こういうように考えることによって、今まで、自分がやった物理・化学・経済学、それから哲学・宗教というものが、実はひとつの有機的な体系を形成して、人間の人格を作っていくものだと知ったわけだ。

——以上が大川社長の話である。

自分に必要な洋学を学び、それを鵜呑みにせず、体系化しわが血肉とする。これこそ、真の“和魂洋才”であったと思う。

大川平三郎が今日的な大学教育をあまり評価しなかったのは、単に自らが大学教育を受けなかったからではない。

大川平三郎こそ真の学問をした人というべきである。法華経法師功德品に、

「俗間の経書(教育)治世の語言(政治)資生の業(産業)等を説か人も皆正法に順ぜん」とある。

正に和魂即ち法華経の法師と帰を一にする菩薩である。

大川平三郎の座右銘に“一点信心万変不窮”というのがある。

正に、この心境を語ったものである。

大川平三郎の天皇観

それから、もう一つ思い出すことは、昭和天皇が、摂政宮であられた大正末期のことだ。

多分大川社長が、勅選議員になった直後のことかと思うが、摂政宮が、樺太にご臨幸になられ、親しく製紙業について視察をなさるということになった。

そのため、大川社長が、その御前講演をしたのであるが、講演を終わって帰ってきたあと、その時の模様と感想を話してくれた。

「御前で見ることの出来るものは、テキストと時計だけだよ。ふだんは、わしは懐中時計だが、見やすいように腕時計をして行ったよ。

自分はもう七十歳に近い老人であり、その前にお座りになっている皇太子は、まだ二十代の青年である。で、なんとか玉顔を拝そうと思つて、頭を上げようとするんだけど、なにかしらん頭の上に、こう重たいものが乗っているような感じで、どうしても玉顔を、まともに見ることが出来ないんだ」

ということであつたが、再び語りつづけた。

「一体これは、どうしたことだろうと考えてみたが、これはどうも摂政宮にはご自身の欲が

ない。ただ欲といえは国民の幸福、国の安泰ということだけしかない。そしてほかの欲がないから、結局世の中に恐れるものがないんだ。恐れるものがないから、そこに自ずから威厳というか、人格の力が湧いてくる。無欲から大慈悲に徹せられたお人柄であられるからだろう。

それが、この七十歳に近い老人が年甲斐もなく、二十代の皇太子に圧倒されて、その玉顔を拜することが出来なかつたゆえんだと思う。そういう、欲がなく恐れがなく大慈悲に徹せられた姿を、実は我々人間界において、神といい、仏といったのだ。だから我々が天皇を神という意味は、なにも特別な人間だというのではなく、そういう徳を持っていらっしゃる、そういう人格が神なのだ。そのようなお生まれであると同時に、そういう教育を受け、それになりきっておられる。それを我々は神と称するのだと思う」

面白い天皇観であった。

こうした感応のしかたのあたりに、西洋の学問をする以前から、すでに大川社長に、非常に宗教的・道義的な、そして日本的な体質なり、教養が培われていたことを見出すのである。

そういえば渋沢栄一についても、私はかねがね同じように感じているのである。彼は単なる論語読みでなく、むしろ論語を駆使し実践した人——日本人としての宗教的国体観なり、天皇観にもとづいた儒者、つまり日本的儒者であったと思う。

これは、遠くさかのぼれば聖徳太子の儒教観に根ざしているものであろう。

渋沢・大川そして私の仏縁

渋沢・大川両者の仏縁について考えてみたい。

明治維新は天皇親政により徳川幕府の封建制度を廃して、中央集権的統一国家を樹立した近代日本の一大変革で、厳密に考えれば絶対主義の確立であった。

——この頃、大川社長は最も感受性豊かな八歳の少年期である。

幕末は封建権力が最も動揺を始めたときで、幕府はもとより水戸・薩摩・長州・肥前等々の諸藩も、頻発する飢饉と一揆のまえに、藩政の大改革を行ってこの国難を切り抜けなければならぬ状態になっていた。

日本の内部にこのような動きが起きてきた頃、外からは欧米列強の日本進出の問題が起こった。

幕府は開国の強要を断わることが出来ず、ついに井伊大老が調印した。これが国内の政治的、社会的大混乱の始まりであった。この調印を不服とする諸藩は、幕府中心の政治的姿勢から離反していくようになった。また開国が巻き起こした不安が、下級武士を始めとして一般庶民に政治的不信を抱かせ、次第に反幕的勢力の結集に向かわせた。

一方では、西欧諸国にあつたように、最大の封建君主である幕府は將軍を王位に立て、開国という事態を一般化しようとする動きもあつたが、武力的抵抗を捨てて開国に屈服したため、軟弱外交としての幕政不信が国民一般を朝廷と結びつけ、倒幕に向かわしめたのである。

石高にすると三万石あまりの京都朝廷であり、徳川を知っていても天皇を知らない当時の国民であつたが、万世一系の神話的な祖先を持ち、伝統的な儀式の中心であつたということが、大きな誘引力となつたのである。

朝廷が、幕府將軍にかわつて統一国家の国王となる道が確實となつたのは、慶応二年、坂本竜馬らの活動で薩長連合が出来てからであるといわれる。薩長は当初ニュアンスの差異を持っていたが、幕府がフランスと結びつく気配を示した時、強力な討幕勢力として合体した。そしてバックにはイギリスを頼んだのである。

こうしてイギリス・フランスという国際勢力を背景に激しく争うが、薩長の軍事力はついに幕府を圧倒し、慶応三年の大政奉還、翌年の江戸城開城で維新政府の確立が成つた。

——大川社長はやつと寺子屋あたりで読み書きの最中であつたらう。

さて、維新政府の文化政策のなかで最も世紀的大事件は、「神仏分離令」すなわち「廃仏毀釈」と称した仏教の国家的保護からの追放であつた。

江戸時代における仏教寺院は、それ自体が封建領主であると同時に、幕府の宗教統制の機関

として支配機構に組み込まれていたから、維新政府のもとでは何らかの变革を受けねばならぬ運命にあった。

廃仏毀釈の最も早いものは、慶応四年四月一日、比叡山坂本日吉社の事件である。平田派国学者の社司樹下茂国らが実力をもって神仏分離を行い、神体の仏像・僧像を始め経巻や法器などを壊して焼き捨てた。石清水八幡宮では社僧はすべて還俗、諸坊はすべて撤去され、梵鐘その他の仏具は二束三文で売却された。また、宮崎山八幡宮でも仏像・仏具を焼き払い、信濃諏訪神社では神祇官の役人が出張して仏堂を撤去した。

これは現在から思えば、大変な暴挙という外はあるまい。

聖徳太子以来、千数百年にわたる法華経中心の神儒仏三教融合の思想が日本の伝統文化を支えてきた。ことに仏を「本地」とし、神をその「垂迹」と仰ぐ本地垂迹思想は本来法華思想であるから、「廃仏毀釈」は法華経の追放であり、追放はこの三教融合の破壊・分裂、さらに対立を招き、ひいては国体の弱体化と亡国の因を作ることになるのであった。

とはいえ、当時の為政者にとっては、この処置にも一応の理由はあったのであろう。

維新の雄図は、尊皇のもと討幕と攘夷に自主的日本建設の急務があり、挙国一致を切望する時に、仏教界は多宗派に分裂し、ことに当時此土を忌避して西方浄土を願う厭世宗派の天下であり、しかも僧侶は徳川三百年の僧官制の上にあぐらをかき、休眠をむさぼっていたようであ

る。

これは、天皇の国、神国日本再建に死闘を続けてきた為政者にとっては、我慢出来ない思想であったかも知れない。

さらに国学者の偏見と、天皇制につらなる神道家の反発がこれを正当化し、ついにこのような非常手段となったのではなからうか。

ところで当時の国民は、これをいかに受けとめたのであろうか。

そのころ教育は、一部の国学者・儒者の私塾を除いては、いわゆる「よみ、かき、そろばん」の寺子屋教育であり、文化的には低レベルのものであった。

そこで仏教についても、一部の教養者を除いては、個人的信仰というよりただ先祖からの因習的行事を継承する、「家の宗教」に過ぎなかったと思う。

ここで不思議に思われるのは、明治を耕したほどの指導的人物に、この重大な仏教追放の宗教問題に触れる言葉の少ないことである。

私の寡聞からか、あるいは「具眼の士」がすでに維新前、兇刃に消されたためか、わが渋沢栄一にしても、その指導者格であった尾高藍香にしても、もっぱら儒教精神は高揚したが、政府の仏教政策に対する見解についてはあまり耳にしない。

あるいは、新勢力の為政者によってなされた廃仏毀釈であるために、口にすることがむしろ

タブーであったのかも知れない。

しかし千数百年の歴史をもち、聖徳太子・伝教大師以来日本の国教となり、さらに鎌倉時代に日本仏教として結実されて、すでに国民の血肉となっていた仏教が、政治力によって簡単に追放される筈のものではない。

宗教は本来自然のもので、また民族と共にあって、為政者の恣意によって人間からこれを奪うことの出来ないことは、古今東西すでに実証済みである。かの旧ソ連の強権をもってしても、結局国民の宗教心を否定することが出来なかったのは、その好例である。

「人は馬を水辺にみちびくことはできても、馬に水を強いることは出来ない」

古来日本は、印度の月氏、中国の漢土(星震)に対し日域といわれ、又一向大乘一実(法華経)の国と称された。考えてみれば、渋沢栄一の『論語と十呂盤』や『道徳経済合一論』を見ても、彼の論語はいわゆる「机上の論語」ではなかった。

渋沢栄一は、いわゆる日本的主体性を堅持し、論語を駆使した人物だと思ふ。ことに渋沢家は天台宗と聞くが、これは本来、伝教大師の法華経の戒壇であり、聖徳太子以来の日本仏教の根幹である法華経の法統宗派である。

又討幕から佐幕へと不思議な運命で仕えた京都一橋家は、既に述べた如く、徳川三百年を支えた勤皇の水戸家であり、その源泉は、徳川御三家を生んだ養珠夫人お万の方の法華経信仰の

賜といわれる。

こう見てくると渋沢栄一の不思議な運命も、その発想も、その裏に無意識に働くこの宗教的因縁によるものと考えざるを得ない。

それでは大川平三郎の宗教観はどういうものであったろうか。その詳細については残念ながら詳らかではない。私が念入りに質問しなかったからである。

大川平三郎は常に時代の先端に立ち、日本近代化の先駆者として、また国際的人間形成の資料として、欧米の新しい学問を体系的・総合的に吸収したが、それに溺れることなく、その根底に横たわる矛盾が、人間の情緒、すなわち宗教性の欠如であることを発見した。

これに「宇宙に神あり」の有神論的帰結を与えて、西欧文化を自家薬籠中のものとした。

ところでこの「画竜点睛」の発想は一体どこからきたのだろうか。やはり明治政府の廃仏毀釈を超越した民族の心にやどる法華経と、神儒仏三教融合の上に立つ日本文化の自ずからなる因縁であったと思う。

それでは、これを育んだ直接の影響者はだれであったか。何といっても青春の大志を煥発させた主であり、また師でもあった渋沢栄一が存在である。

そしてまた先に述べた大川平三郎の三つ子の魂にぎざみこまれた、劍聖であり慈善家であった祖父と、慈母の仏心であろう。

祖父・平兵衛は、初め小鮎栄二郎といって剣道家秋山要助の高弟であったが、大川家の養子となり大川平兵衛となった。

平兵衛は実戦型の剣士で、試合相手の懐に飛びこみ、相手の両手の間に手を入れて柄を握るのが得手だったといわれている。

ある日、山中で猪の突進してくるのに出会い、近づくのを待って一刀のもとに切り倒し、平然としていたという。

門弟は三千人といわれるが、入門料のみで月謝をとらなかったので生活は苦しかった。その苦しい家計のやりくりで、大川平三郎の母は足袋から下駄の鼻緒まで作って、夜遅くまで働いた。

この三徳者の存在こそ、大川平三郎の宗教心の源泉であり、齢七十を越えてなお慈母を渴仰恋慕する彼の心境こそ、偉大な宗教心であったと思う。

大川平三郎の学識も経験も、また人づくりの情熱も、実にこの時代的環境と潜在する宗教心の躍動であり、さらに私たちの不思議な主従の縁も、見えない仏縁によって導かれたものであったと考えざるを得ないのである。

蛇足になるが、この「主」の大川社長に巡り会った「従」の私の仏縁について、別章にも書いたがここでも若干書くことを許されたい。

大川育英会に採用され学業を続けたお陰で、大学で本多日生大和尚に巡り会ったことはすでに書いたが、当時関東大震災の後で滔々として浸透してきた左翼思想に対し、道徳経済合一の沢沢精神を建学の理想とする一橋大学では、日本伝統の堅持、わけても三教融合の中核をなす仏教研究の会が学生の間に自主的に盛り上がっていた。

私は次に書く家庭的な仏縁もあって、なんの抵抗もなくこの会に参加した。

私の家は雑新前から、埼玉県浦和在で「ほしかや」という家号で乾燥魚の肥料商を営み、馬二頭を使って広く東京府下の農村まで拡売していたが、曾祖父の時代、一代のうちに二度の火災に遭い、台風にも一度遭い、馬は二頭とも焼け死ぬということがあった。

火災は二度とも原因不明、しかもいずれも西北の方角から出火した。あまりの不思議さに曾祖母が近隣で有名な行者を訪ねてわけを話すと、行者は一心不乱に祈り始めたが、やがて神の声があった。

「自分はこの家の地先祖であるが、ここに住む人は移り変われども、自分を祀る者が一人もいない。お前らはいま栄えているゆえ、自分の存在を知らせるためにこの火災を起こした。自分を地祖権現として、屋敷の西北の方角に祀れば、今後一切の災難を防ぎ家運の繁栄を守るであらう」

とのお告げであった。

そこで早速この権現神社を屋敷内に建立した。それ以来、先祖はこの神社を中心に熱心な信仰一家となった。また父は熱心な成田不動尊の信者で、商売を始め生活全般について真言宗の行者を常にアドバイザーとしていた。

私も小学生の頃から祖母に連れられて念仏講などに参加し、般若心経を暗誦してほめられたりした。ある日、父は私を連れてその行者を訪ねた。行者は暫く私を見ていたが、

「この子は、将来なんでも思い通りになる子だから、大切に育てなさいよ」

と、父に告げるのを私は耳にしたが、何のことか意味は分からなかった。しかし、この一言が気になって子供心にも頭から離れなかった。

後年、不思議な縁で法華経に巡り会ったとき、はっとこのことに思い当たった。

仏教によれば次のようである。

「法華経は如来秘密神通の力、一切衆生の所願みなこの経によって満足す」

行者の予言は、法華経をいただく私の運命のことであったということがやっと理解出来た。

このことを考えると、関東大震災で倒壊家屋の下敷きになりながら、身体にかすり傷一つ受けず、九死に一生を得、この震災がとりもつ縁で、さらに良き師、よき主に巡り会い、思いがけない寵遇を受け、世界恐慌の難局を突破することが出来たのも、みなこの法華経の力と主師親三徳の賜であったと思う。——私はいまさらながら仏縁に感謝する次第だ。

渋沢・大川両者の偉大な事業家としての奥に根強く働く精神主義は、日本伝統の仏縁によることを知ったのである。

第二章 大川平三郎の人づくり

大川・矢作・本多三者との出会い

大正十二年九月一日、午前十一時五十八分。天地をつんざく地鳴りとともに、猛烈な上下震動が起こっていた。これがマグニチュード七・九の関東大震災である。

ちょうど、昼どきであった。東京・横浜などでは火を使っていた家が多く、たちまち東京だけで百何十か所から火災が起きた。またこの地震のため水道管が破裂して、消火は思うようにならず、町々は三日間も燃え続け、下町一帯から江東方面を焼きはらった。市民らは、四方から迫る猛火を避けようとした。隅田川にかかった橋に逃げた人々は、みな焼け死んで、死体が隅田川を覆ったといわれている。

この地震で、死者実に九万九千三百三十余人、行方不明四万三千四百七十余人。罹災戸数は、全焼四十四万七千百余戸、全壊十二万八千二百余戸など、その物的損害は五十五億円、現在二千倍として十一兆円に達したと記録されている。

震災の大混乱のなか、九月二日に成立した山本権兵衛内閣は、翌三日、東京府・神奈川県に“戒厳令”を発し、治安維持は軍隊の手にあった。

そんな折、どこからともなく、

「朝鮮人や社会主義者が、暴動をたくらんでいる」

と噂が流れた。そして町内会・在郷軍人会・青年団などが自主的に「自警団」を作り、各自竹槍や鳶口を持って防衛した。

こうした混乱の最中の流言による恐怖は人を狂気にするもので、この時の犠牲者は実に数千人に及んだといわれた。

私の郷里は埼玉県浦和であるが、県南の水田地帯であったため地盤がゆるく、そのため、大きな農家などは全部倒壊してしまった。私は、この時ちょうど学校の休暇中で家の奥座敷で読書中だった。同室に居合せた姉と隣の部屋まで逃げ出したが、家は大波に揺れる小舟のよう、二人が抱き合って支えるのが精一杯で、一步も歩けない。その時轟然と家は倒れ、私達二人はその壊れた家の下敷きになった。

「池田は死んだらしい」

という噂が飛んだくらい惨憺たる状態であった。しかし、実は、床の根太ねだが外れて床下に落ち、その上に屋根が落ち家が潰れたので、かすり傷一つ受けなかった。私達は運よく出来た空間に落ちていたので、無事に這い出すことができたのである。これは全く奇跡的であり、この時も私の加護を強く感じたのもちろんである。

その頃、私の家は織物業をやっていたが、織物や染色の工場を始めとして、建物の全部が潰

減してしまった。

私は東京商大、現在の一橋大学に在学していた。中学卒業の年、女四人の中の一人息子であったから、父は家業を継がせたかったらしい。ちょうど旧制の浦和高校が設立されたときで、沢山の同窓生が入学した。私は感ずるところがあつて、親の意思にさからい、夜逃げ同様に家出して、東京に出て翌年商大に入学した。そんな関係もあり、このわが家の惨状を見、また東京の被害状況を考えるにつけても、これ以上、親のすねをかじるわけにはいくまいと考え、学校を中退する決心を固めたのであつた。

たまたま隣家の鈴木という、役場の収入役をしていた人が、私の決心をどこからか聞いたとみえて、私をつかまえていった。

「池田君、学校を止めるそうだが、それはもつたいない。わしもなんとか考えてみよう」

その頃、私の村では、中学校に入学するものは、何年に一人あるかないかといった状態で、中学を卒業すればそれだけで村の指導者、あるいは旦那様であつた。それほど時代であり、現在の教育状況とはまるで違つていた。ましてや、専門学校や大学へ進むということは、殆ど稀といつても言い過ぎではない。そんな状態だったので、学校を続けるように親切にすすめてくれたのだ。

この話から少しそれるけれども、あとで大川平三郎との関係に、非常に精神的な影響を持つ

別な話に、ちょっと触れてみることにしよう。

隣村の芝村という、現在は川口市内だが、その出身者で、当時、東大教授で法学・農学の二つの博士の肩書を持ち「住友」の顧問をしていた、矢作栄蔵という人がいた。

後日分かったことは、その人の影響か、その村は大変に教育が盛んだった。村には大学出が多く、その大学出身者で、村に「育英会」を作っていた。

その村で、矢作栄蔵の留守を預かっていた、その弟に当たる人が、隣の鈴木収入役と、大層懇意であった。そのため、鈴木収入役は早速その人に会いに行き、矢作栄蔵への紹介状を貰って来てくれた。

「この紹介状を持って、私がいっしょに行くから、矢作博士にお目にかかって、意見をよく聞いてみようじゃないか」

親切な人であった。私はその親切がとても嬉しく、むろんすぐに同意した。

翌日、二人で上京して、矢作栄蔵の家を探した。

今日では、彼の家がどこに在ったか思い出せないが、探し当てた家で案内を乞うと、恰幅のいい頑丈そうな矢作栄蔵が、和服を着た姿で玄関に現れたのを覚えている。

彼は、「上がれ」ともいわないで、玄関で立ち話をした。

彼は私らの話を聞いてくれてから、

「そうか、それは大変だったな。でも命拾いをしてよかった。それで、君は将来、学者になるのかな」

私は、かぶりを振っていった。

「いいえ、学者になる気はありません」

「それでは、役人になるのかね」

「違います。私は会社に勤めて、ビジネスマンになりたいんです」

「そうだろう。君の学校は商科大学だから、そういう方面を志すのが順当だろうな。それだったら、ひとつ忠告するが、苦学だけは止めなさい。鈴木君が、君を僕のところ連れて来たのは、僕のところ、君に苦学をさせようというつもりだろう。」

だが、それは止めなさい。僕はいままで、名門の家庭から頼まれて、何人も子弟を世話したことがあるが、結果はみなよくなかった。第一、勉強も中途半端になるし、体も鍛えられない。だから実社会に出た時、どうしても無理が出る。

君は学者や役人になるんでなければ、苦学は止めて、借金をしなさい。借金は恥ずかしいものではない。金というものは、仕事を成功させたり、立派な人間を作ったりするためのもので、金が有効に働いて、立派に返ってくれば、その金は社会に対し素晴らしい効果を発揮したことになる。

君がビジネスマンになるんなら、学者や役人と違って、将来、金に縁のある仕事をするだろうから、立派に返せるはずだよ。苦学は止めなさい。体を鍛え、学問を磨いて、それから実社会に打って出ることだな」

と、一気に熱をこめて語った。

鈴木収入役が、私の代わりに聞いてくれた。

「それでは先生、どうしたらいいんですか」

「ぼくの郷里に、僕が中心になり、大学を出た連中で育英会を作っている。僕がいま添書を書きながら、そこへ行って金を借りなさい」

と、奥へひっこみ、すぐ添書を書いてきて、私にくれた。

私は、その時分はまだ、借金というものは大変恥ずべきもので、質屋に行く人は、人目にかぬようにして質屋の暖簾をくぐると聞いていた。現在のサラ金などは、まるで違うことであつた。

また借金のために、返済に苦しんだり、恥をかいたりするとも思っていた。だから借金は恐るべきものであると思ひ込んでいた。

ところが、矢作栄蔵に、のっけから、「借金は恥ずべきもんじゃない。事業を起こし、人間を養成するために金を使い、ちゃんと返せばその金は冥利につきる」——と理路整然と教えら

れたのだ。

「なるほどそういうものか——と考えるながら、鈴木収入役といっしょに、村に戻った。

余談になるが、今日のあらゆる企業は、巨額な借金をして、巨大な事業をしている。そうして、借金も財産のうちといわれるようになった。常識になったわけである。

それを考えれば、矢作栄蔵の話は極めて近代的な経済学だったし、玄関で立派な講義をうけたまわったわけである。さらにその借金のため、彼は添書まで書いてくれたのだ。

ちょうどその頃、新聞記事で、大川平三郎が五十万円を寄付して、埼玉県に財団法人・大川育英会をつくり、県下の英才を援助するということを知ったのである。

大川平三郎は埼玉県人で、渋沢栄一の甥。つまり渋沢栄一夫人と、大川平三郎の母が姉妹の関係であった。その渋沢栄一の影響もあったのであろう。

「常に自分の郷里を懐かしみ愛することが、愛国心の出発点だ」といった。

後年、大川平三郎が私に向かって語った言葉である。

彼は実業界で成功してから、何か郷里のために奉仕したいと考えていた。自分の青少年時代のことを思い浮かべて、自分と同じような境遇にある学生を援助することで、県のため国のために役に立つ青年を養成しようとしたのである。自分の魂をそれらの青年に入れてみたい、というのが育英会設立の趣旨であったのである。

そこで、私は鈴木収入役に、新聞で見た大川育英会のことを話して相談した。この育英会は、貸費ではなく、給費であったからである。

彼も、真剣に考えてくれた。

「矢作先生には、折角、添書をもらったのに悪いが、一応、大川育英会に応募してみたらどうだろう。大川先生はいまや天下の大実業家だ。君が今後、実業界に進む上でも、なにかと役に立つことも多いかもしれない。だけど、こちらは給費だから、きつと選考もきびしいと思うな。だめだったら、矢作先生の紹介で、金を借りたらいいじゃないか」

と結論を出してくれた。私も矢作栄蔵に悪いと思ったが、背に腹はかえられない。

浦和にあった「武州銀行」の本店に行つて、大川育英会に申し込みの手続きをとつた。

やがて、選考の日が来た。数十人の応募者が居並んでいた。型通りの試験があり、面接が行われて、数日後に十人の定員にはいることができた。

後で知つたのだが、他の応募者はみんな地方の有力者や、中学校長が推薦者であり、隣家の知人が推薦者というのは、私だけであった。

こうして、学校は止めずにすんだ。

在学中、学校内の仏教研究会に入会し、そこで明治・大正・昭和にかけての名僧と称された、顕本法華宗管長の本多日生上人に巡り会い、やがて師弟の縁が結ばれた。そして、法華経が私

の一生の力強い心の支えとなった。

関東大震災で奇蹟的に、命拾いをした私が、矢作・大川・本多の三者と出会い、日本一の師匠と主人を得て、私の人生は一変した。

「この大震災のお陰で運が開けた」と過言ではなく、私はそう思っている。

まったく、人間の運命というものは不思議なもの。〃天運〃というのは、人事ではとても手の届くものではない。——そのためにも、私は、学問や芸術その他のものとともに、宗教というものを信じたし、現在まで六十数年の間、信じ切って歩んできているのである。

樺太工業に入社

大正十四年の三月。東京放送局はラジオのテスト放送を始めた。

「あーあーあー聞こえますか。J・O・A・Kこちらは東京放送局です」

同年七月からは本放送を開始した。聴取者数は五千四百五十五人であった。

当時の紡績工場や製糸工場の女工たちは、誘拐さながらの方法で農村から募集され、刑務所まがいの寄宿舎に収容されて、きびしい監視のもとに一定数量の生産高を強制されていた。今日でいう、ノルマ制である。一日に十三時間から十六時間、場合によっては二十四時間も働かされた。粗末な食事と徹夜の労働による過労のため、結核でたおれる女工も多かった。

こうした内容をテーマに、細井和喜蔵は『女工哀史』を書き、それが改造社から出版された。次の歌は著者の細井の蒐集によるものである。

籠の鳥より 監獄よりも

寄宿すまいは なおつらい

工場は地獄よ 主任が鬼で

回る運転 火の車

糸は切れ役 わしゃつなぎ役

そばの部長さん ならみ役

定則出来なきや 組長さんの

いやなお顔も 見にやならぬ

わしはいにます あの家さして

いやな煙突 あとに見て

偉そうにするな お前もわしも

同じ会社の 金もらう

まだまだつづく、全部で二十二節の歌だが、これだけでも、大体見当はつく悲哀である。

私が大川育英会に採用された当時の時代背景だ。

大学最後の学年であった。給費額は月二十円、夏冬二か月の休暇を除いて、十か月分合計二百円を頂戴したわけである。当時の女工さんにくらべれば、私は幸福過ぎたのではなからうか。当時、米の値段は一升十銭を越え、大学出の会社員の初任給が大体五十円だった。今日の初任給をざっと十万円とすると、その頃の二千倍ほどに当たり、給費額は月四万円ほど、年額四十万ほどになるわけだ。

大川平三郎は、すでに六十五、六歳で、この育英会に情熱を傾けていた。そのため、ただ単

に給費を支給するだけでなく、年に二、三回位、自宅に、時にはレストランに学生らを呼んで、自身の体験談や人生観を語り、また各界の名士を招きその訓話を聴かせたりした。

年があけて大正最後の十五年三月、公金四百万円にからまる、田中義一大將在職中の不正事件が発覚した。同大將は四月、政友会総裁となっている。

当時の新聞報道は次のようだ。

大阪の松島遊廓移転問題を中心とした政友・憲政のあばき合いは、さらに第二のあばき合いを誘発し、憲政会代議士中野正剛は、三月四日の衆議院本会議において、シベリヤ出兵当時の田中大將に関する、いわゆる公金横領に関する三額元主計の摘発書と、石光中將の建白書を朗読した。議場はもちろん、政界に大センセーションを起こした事件である。

この裏面には、軍閥の抗争、政党・官憲・官僚の陰謀術策が交錯し合って動いてきたものが、ついに時の勢いに激発せられて、表面に現れてきたものと見られるようだった。

私は、いよいよ卒業というとき、大川平三郎のところへ御礼の挨拶に参上した。ところが彼は私に向かつて、こういったのである。

「君は、育英会の第一回の卒業生だから、うちの会社へ来て働きなさい。そして育英会の仕事も手伝いなさい」

こういうことは、私はまったく予期していなかった。というのは、大川育英会には就職につ

いて、なんの条件もついでいかなかったからなのだ。

実は、前記の矢作栄蔵の関係もあり、中学の先輩も多数「住友」に行っていたので、私も住友に行くつもりでいた。

しかし、大恩を受けた大川平三郎の命令なので、一も二もなく、受けるほかはなかった。ここで不思議に思うことは、私がこの育英会の第一回の出身者になったという因縁だ。これが育英会から、「樺太工業」への転機の理由だったとは、あとから思えば、これが彼の人づくりの執念だろう。

その昔、渋沢栄一のもとで、自らが鍛えられた往年の夢を、再現しようとしたのではあるまいか。

そういうわけで、入社したのが「樺太工業」という、大川平三郎の七十数社もある関係会社のうち、一番主力の製紙会社であった。その会社の事務所は、現在の東京駅前の工業クラブの隣で、大川田中事務所という大きなビルであった。私の勤務は秘書課であったが、秘書課とは何をするとところなのか、全く知らなかった。

ところが驚いたことに、毎朝大川社長宅に行って、それから社長の自動車に同乗して出勤することになったのである。

事務所でもやる仕事は、社員の給料の計算であるとか、賞与の計算であるとか、その他、大川

社長の個人関係の仕事などであった。

その当時、大川社長は勅選議員に選ばれており、政治向きの仕事など、何もかもみんな私がやることになった。

そんなことから最初は、会社の同僚からいわれたものだ。

「池田君、君は毎日、社長と自動車に乗ってくるけど楽でいいなあ。羨ましいよ。わし達は毎日、満員電車でそれだけで疲れるよ」

「君たちは、そういうけど、はたで見える程、楽じゃないよ。全く」

私はこういいながら、私自身をふりかえって考えてみた。

なにしろ、私は大事業家のそばに四六時中いるのだから、緊張の連続そのものだ。始めのうち、前の助手席に乗った。そのうちに社長から、

「こっちへ乗りたまえ」

とのお声がかかり。隣に乗るようになってから、窓ぎわに小さくなっていった。

しかし、慣れというものはこわいもので、外から見れば、いかにも堂々とした恰好に見えたようである。

ところで、大川平三郎の生活や、仕事ぶりは大変なものだった。

私は毎朝九時に参上する。すると社長はすでに仕度をしていて、十時には家を出て会社へ出

勤となる。

会社は五時までで、定刻になると、社員全員は帰ってしまふ。

その五時すぎだからが大変だった。関係会社の役員が、みんな色々な相談ごとや、用件をもつて「本丸」であるこの事務所の社長室にやってくるのである。

そこで、個々の重役会みたいなものが始まる。私はじっと別室で待機しているのである。

それを済ましたあと、当時社長をしていた富士製紙の事務所へ出かける。そこでまた同じように役員会が開かれる。こうして、私の仕事は五時から、延々と先へ続くのである。

五時すぎになると、事務所に見える関係会社の皆さんを接待しなければならぬ。また関係会社へ行くときはお伴をして行く。そして役員会なり会社の仕事なりが終わると、こんどは社長は宴会へ行くことになる。

そこで、私は一度別れて、社長が今晚帰る家に行くのだ。というのは、社長は本宅のほかに別宅が二軒あったからだ。

その家で、奥さんや女中さんらと色々雑談をしていると、たいてい十二時に近いころになると表で「ブー、ブー、ブー」という自動車の警笛がなる。

「お帰りです」

という女中の声で、奥さんをはじめ女中たちがみんな玄関に並んで座り、お迎えをする。私も

それに加わった。

やがて社長が、颯爽と玄関に現れる。そのあとから運転手が、ひと抱えもあるような木綿の大風呂敷を持って来る。

私はその包みを受けとって、部屋にお伴する。社長は部屋に入ると、上着も脱がないですぐその包みを開けさせて、書類の点検にとりかかる。

書類は大体、関係各会社からの稟議書や報告書、それに製紙の見本などである。これらをいちいち見て意見書を書き、回答書を書くのである。

さらに驚いたことは、全国の工場から送ってくる紙の見本の中に、砂つぶのようなものがついていることがあると、

「これは、機械のどの部分のところかで、こういうことが生じたんだ」といちいち指摘して工場へ送り返すのである。

これらの仕事すべて終わるのが、大体午前二時すぎになる。その間、奥さんは傍で、編物などをしてるのである。

私は机の側に正座して時たま算盤を入れさせられたり、社長の話相手をさせられたりである。いわば「夜伽^{よが}」のようなものだ。

それでも、最初のうちは座布団を遠慮していたが、奥さんのすすめで座ることにした。

要するに、その日の仕事は、絶対にその日のうちに片づけるという信念だったようだ。

「風呂の用意」

という社長の声がかかる。そこで私は失礼して自宅へ帰るのだが、その日によって、ある時はタクシー、あるときは「テクシー」であった。

ところが夏場になると、外はもう薄明るくなっている。大川社長から、

「戸締りに気をつけろ」

などといわれて、女中がクスクス笑っている。そういうわけで恐らく社長は、四、五時間しか寝なかったのではなからうか。

私も十七時間勤務であった。繰り返すことになるが、社長の本宅の他に別宅が二軒あり、その三軒を毎日、朝出ては、夜、次の家へ行くといった具合にきちんと回る。

したがって私も、朝行つた家から、その晩は次の家が分かり、そこへ行って帰宅を待っているという妙なことが日課である。

よく考えてみると、大川社長は当時すでに七十歳位だった筈であるが、正に精力家でもあったと思われる。努力家、仕事の鬼であったというわけだ。

同時に、日本を担う明治の企業家として、またアメリカ仕込みの、当然の姿勢であったのかも知れない。私には初めての実社会であって、他を知らなかったから、ただ驚くばかりであっ

た。

他を知らないから、社長とはこういう職業であるのかと、なんの疑問もなく溶けこんでしまったのである。もっとも私は学生時分から、多少は宗教的な教養をうけていたから、この三人妻の生活には、最初やや抵抗を感じたことであった。

もちろん学生時代から尊敬している社長であるから、批判的ではなかったが、多少の幻滅も感じたわけである。

だがのちに、社長の女性観を聞いてからは認識をかえて、当時の男女の真剣さに、改めて頭が下がったのであった。

——さて、私が秘書役で、四六時中大川社長の公私の活躍に目を見張っているうちにも、時代は変転していた。

大正十五年一月二十八日、激動する政界のなかで、内閣総理大臣加藤高明が、現職のまま死去。若槻礼次郎組閣。一方、社会面の新聞記事は、国際婦人オリンピックというのがドイツで行われ、日本代表の人見絹枝が五位に入選して「名誉賞を受く」と大きく報じた。人見絹枝はかくして一躍日本人のアイドル的存在となった。また、前年、二十年ぶりに復活した野球の早慶戦が、東京・戸塚の球場に二万人の観客を集めて大人気でもあった。

大正十五年十二月二十五日、「天皇陛下崩御」として、「悲雲皇土をおおうて哀し」と読売新

聞は報じている。——そして、昭和の時代は明けてゆく。やがて、女性も新しくなり、断髪のモダンガールが銀座などを歩き出すのであって、これには私もびっくりした経験がある。

樺太視察に隨行

私がそのような勤めをして、三年目のことであつた。それまで毎年八月になると、大川社長は、夫人・令嬢に女中をふくむ大家族連れで、樺太に「大名旅行」をするのが例になつていた。家族にはちょうどいい避暑なのであるが、遊ぶ事の嫌いな合理主義の社長は、この機会を利用して自ら工場を視察し、同時にそれぞれ事業地の役所などに挨拶まわりをするという、一石三鳥のスケジュールだつたわけである。

明治四十三年の頃、汽車に乗つていて「樺太は全島ごとく山林だから、ここで事業をおこしたら面白いだろう」と同乗客らが話しているのを大川社長が小耳にはさんだ。

「それだつ」と社長は、いろいろ樺太の事情を調査し田中文太郎という多才の人物を、樺太事情調査の理事に採用して出張させた。

はじめは材木を伐採して内地の工場に送らせ、製紙の材料として試験したり、また運送の便宜や、気候など三年がかりで調べあげた。

やがて、工場を建てる一大決心がついて、社長自ら樺太へ行くと、気温・水利などの調査をした上で、地上は森林、地下は石炭がでる泊居という所に、樺太工業会社の工場を起こした。

——渋沢栄一のほか、財界の阿部・岡崎・小西らの出資をあおいだので、会社は瞬く間に成立した。

大正四年、工場が竣工した。ところが操業早々、前年に始まった第一次世界大戦のために、ヨーロッパとアメリカおよび東洋との海運がとたえ、東洋の必要とする紙はすべて、日本で作らねばならなくなった。樺太工業にとっては、まさに大使命であり一大幸運であった。

こういう異常な状態のために、はじめ三銭でつくったバルブが、社長の巡視中に五銭五厘に売れ、ついには八銭まで上がり、工場に投入した資金は、あっという間に回収することが出来た。その上に国家の工業能力も、大いに発達した。そこで二つ目の工場を真岡に作ることにとなり、大正八年九月に完成させた。

このようにして出来た樺太の工場だったから、大川社長が毎年「大名旅行」に行くのは当たり前前のことだった。

ところが、この年は末娘の婚約も決まり、夫人も忙しくなったので、今年は家族連れを止めて、女中の代りに「男中」を連れて行くという話が、私の耳に入った。

私はだれが行くのかと思って気にしていたら、

「こんどは池田を連れて行く」

というのだ。昭和三年の八月、一か月間私は「男中」として社長のお伴で樺太に行ったのであ

る。青森まで汽車、そして青函連絡船で北海道へ渡った。ここで道庁訪問、富士製紙・北海道電力などの関係各会社視察、北海道北端の稚内から、関係会社樺太汽船の船便で出帆、樺太唯一の不凍港で樺太工業の第二工場の所在地真岡港に上陸、というスケジュールだった。ところが海のない埼玉県生まれの私には船は最も苦手で、殊にあのペンキ臭いトイレの臭にはまいていた。私の顔は蒼白、嘔吐寸前である。

社長は船の中にでんと座り、福神漬でお茶漬を腹一杯食べている。同じ埼玉生まれでも平気である。もっとも、社長は若い時から一か月もかかる船でアメリカを始め外国に何度も行っており、船旅にはすっかり慣れていくわけである。社長はまた時たま甲板に出る。もちろん秘書役の私はお伴をしなければならない。そんな時よく甲板に外人がいた。彼等は鉱山や石油関係の人たちで、社長は得意な英語で彼等と話をしている。話をするのはいいとしても、

「おい、いま俺の話したこと、お前分かるかね。少しは分かったか」

と私を試験するのだ。私は慣れない船の上で、会話を聞くところではない。体を支え、気分の悪いのを我慢するのが精一杯で、ただ冷汗をかいていて、ろくに返事も出来ないありさまだった。

社長の語学は、我々のスクールイングリッシュとは違って、若い時から工場の中で外人技師とともに生活し、二十歳で洋行、二か年近く、日本人のいない工場にもぐって、仕事の勉強と生活をしてきた「生きた語学」だから、私などかなうわけがなかった。

おまけに、こういう長い旅行の時は、外国の小説を一、二冊、必ず読破するという。そうした勤勉な大川社長だったのである。

「江戸川乱歩という探偵小説を書く人がいるが、彼のペンネームは、どこからとったか知っているかい」

と、また私に試験をするのである。江戸川乱歩は、大正の末期に「新青年」に作品を発表して、日本で初めて創作の名に価する探偵小説の出現と騒がれ、次々に短篇を発表しはじめた人、という程度のことしか私は知らなかった。

「ペンネームの由来は知りませんが、変な名前ですな。何かわけがあるんですか」

私は気分の悪いのを、がまんして聞いた。

「それはね、この本の著者、アメリカのエドガー・アラン・ポーをもじって、つけたんだよ。乱歩もきつとポーの作品が好きだったんだろう。おれがことさらに探偵小説を読むのは、単なる趣味じゃないんだよ。この中に出てくる言葉はいわゆる、色々な階級の人間の言葉なんだ。しかも、現在使われているモダンランゲージだよ。

だからこれを読むことによって、わしの英語はいつも新しく、どんな相手とでも話が、うまく出来るんだよ」

日本近代化の鍵としての語学は社長の最大の武器であった。七十歳の老人がなお寸暇を惜し

む読書生活を続けたわけ、そして語学の非凡だった理由が、よく納得でき、ただ頭が下がるのみであった。

こうして、二十四時間のあいだ生活を共にしていると、何ひとつとっても社長に勝てるものがないのが分かった。劣等感やら船酔いやら、いろいろ出される質問に、緊張感も手伝ってとうとう鼻血を出してぶっ倒れてしまった。

そんな醜態を演じたが、それでも樺太の真岡に這い上がることが出来た。真岡工場に着いたときは、今までの船酔もけろっと消え、元気が出てやっと一安心というわけだった。

真岡工場は鉄筋コンクリート造りの堂々としたもの。東京から北に向かって進んでいって、一番の大工場が、この樺太の工場であった。その工場の中にあるクラブが宿舎である。

社長は、菜葉服の工場着に脚絆、地下足袋という、珍妙なスタイルで、ねじ回しを持って工場や事務所を巡回するわけである。その時の秘書役は、工場の幹部が肩代わりしてくれるので、私はどんじりに随行して気軽にいられた。

夕方になると、その町の自治体の人たちを料亭に呼んで、接待の宴会をするわけだが、女中でない「男中」である私は、一緒に行けないので、工場のクラブで待機している。

やがて、宴会が終わり、クラブに帰って来ると「男中」は多忙になる。

「風呂に入るぞ。用意してくれ」

という声がかかると、「男中」の私は、張り切って準備にとりかかる。私はパンツ一枚の裸になって、まず三助をやる。もちろん、私は三助の経験などなく、これが最初であったが、子供の頃よく祖母の背中を流したことがあったので、なんとかやってみた。

その時は、垢擦りというザラザラした布をタオルに巻きつけ、上に向かってこすり上げる方法であった。これなら多分、社長が気に入るだろう。祖母もこの方法で嬉しがっていたからと思つた。

しかし、始めて直ぐ、社長から「ストップ」がかかった。私はがっかりした。

「駄目だ、駄目だよ。どうしてこすり上げるのだ。何事も物理・化学の知識を働かすことが大切なんだ」

その日もまた「風呂場教育」を頂戴した。

「人間の体は、なんでもなく平凡に見えるけれども、顕微鏡でよく見ると、魚のウロコと同じように出来ているんだ。分かるだろう。汗が流れれば、汚れは上から下に流されるようになっていく。それが科学的なんだ。それをお前のように下からこすれば、ウロコの下へ垢を押し込んでしまうんだ。だから上から五寸位の幅に順に下へこするのだ。それが終わってから、石鹼をよく洗い、お湯で流さなければいけない」

「はい、わかりました」

私は教えられたようにやった。次は頭を洗うのだが、普通ならいきなり頭を洗う。だが、大川社長は几張面で、用心深く耳に綿をつめるのを忘れない。だから安心して頭が洗えた。

こうして、私は社長の体の全部を洗うのである。

風呂場から上がってからが、また大変なのである。湯上がりタオルで頭から手足の指の間まで拭き、浴衣を着せる。三尺帯もきちんと締めるのだった。

それから寢室へ行くのであるが、またここで体の拭き方の教育があった。

「ただ、拭けばよいというもんじゃない。あの吸取紙の原理で、軽く叩きながら拭きなさい。何も知らないでは世の中は通れんぞ」

とにかく大変である。始めのうちは私も堅くなったが、しかし裸同士の仲であるから、次第に慣れてきた。

自分の祖父の世話をしているような気分になってきたので、気楽になったのだ。

そうなると、私は気が付いてこういった。

「社長、体をもみましようか」

「うん、ひとつ、やってもらおうかな」

と機嫌上々の具合になるのだ。

しかし、私は按摩も知らない。大川社長に対する親愛の気持ちなのである。見よう見まねで

足をもんでいると、いつの間にか、「グーグー」と大きないびきが始まっていた。

それを見てそっと部屋を出る。廊下をへだてた反対側に私の部屋があった。

ところが、夜中の三時か四時頃、ドアをとんとんと叩く音がしたと思うとぱっと開いた。

「トイレに行く」

社長の声。社長がドアを開けるのが早いか、私が床の上に起き上がるのが早いか、とにかく私はさっと布団の上に立ちあがり、大急ぎでタオルを持つのだ。

こうして、便所の前で待つことになる。社長は用をすませ、手を拭いて部屋へ戻って行く。

「お休みなさいませ」

なんだかこれも、試験されているような気分であった。

何事にも深慮の性格だったから、どうも私には大川社長の心は読めなかった。どうやら間一髪であるけれども、不思議に起こされたことがなかった。

突然、ドアを叩かれると、以心伝心というか自然にぱっと起きてしまうのだ。努めているわけでも、なんでもないのだから、これは不思議であり、自分にも理解できないのである。

秀吉が信長に仕えて、草履を懐であたためた、あの主従の作法にも似ていたのであろうか。

そんなわけでお気に召したか、翌年もまたお伴をした。二回目は大分慣れて、ある時、風呂場でこういう問答をしたものだった。

もちろん社長は、私が仏教を信仰していることを知っている。

なんでも徹底的に勉強して、最後に宗教研究までした人だから、やはりそれが気になったの
ではあるまいか。

「お前の信仰なんかは、まだ本物じゃないよ。まだまだだな」

そんなふうに、私の信仰を批判するのだ。その時だけは私もむきになって、

「いや社長、これだけは王侯、将相といえども譲りません」

と必死に抵抗したのである。というのは、何をやっても社長にかなわないが、ただひとつ宗教
だけは、正式に「お師匠」の本多上人について勉強したし、それだけしか私には自信が持てな
かったからである。

また社長は、宗教研究までは進んだけれど、「宗教を勉強したら、一生かかる」というわけ
で「宇宙には神がある」というところまで到達してそれで止めた、と語ったのを覚えていたか
らである。

社長も、妙に強い私の抵抗を感じ取ったのか、それ以上、別にディスカッションはなかった。
あるいは、これも私の信念を試験し、私の宗教観がどれほど深いものかを、知ろうとしたのか
も知れない。

その良い例がある。八月のある日、社長の知人の貴族院議員らが、樺太視察に来ていた。そ

して、当社の炭鉱の見学に行こうとして、炭鉱電車に乗り、私は案内役の社長の隣に腰をかけたいた。

そこで私は疲労が出たのか、居眠りをして社長の体へ寄りかかったらしい。

社長にぐいと肘で突かれ、はっと気が付いた。社長は目が細いほうなので、横から見ると、開いているのかどうか分からない。私は社長が眠っていると思った油断で、自分も眠ったのだ。よく見ると、葉巻をくわえているではないか。

社長は何もいわず、顔も向けない。ただ並み居る客人に、私の無礼を見せたくないという親心だったようだ。これでは私の信仰もまだ観念的で甘いものだと思われたのかも知れない。

このように、色々さまざま、若い私は試されたり教育されたりした。

大川社長の企業心・親切心・親心、そして日常生活そのものに触れ、それが社長の生きた宗教であったことが段々理解されて、若気の氣負いを恥ずかしく感じたのは、ずっと後年であった。

後輩を教育するのは、もう現在の世相では難事になった。次々に起きる学校の暴力事件がそれを物語っている。——真の教育が出来ない現状は重大であり、このことについて政治も真剣に取り組んでほしいものだと思う。

二回目の樺太随行から帰ると、

「池田を大川合名の主事にする。しっかりたのむぞ」

昭和四年の九月であった。自分はまだ二十六歳ぐらいだったと思う。その当時、私の月給は確か五十円程度だった筈であった。それが一躍九十円になった。当時では高給取りである。

その合名会社は、私より上はすべて同族の理事で、したがって事務関係の方では私が「リーダー」ということになった。

立身出世というわけである。しかし、私の実感はそんな気持ちではなかった。

「ああ、えらいことになったぞ。ひとつここで、心機一転だ」

ただ、緊張感に胸を締めつけられる感じしか覚えていない。

こうして、私の実業人としてのスタートは切られたが、その前途は決して、社長の背中を流しているような「単純作業」ではなかったのである。

——この頃、「済南事件」、つまり中国で張作霖を爆死させた事件が起こり、それを契機に日本の中国侵略の様相が出てくる。また、ラジオで大相撲の実況放送が始まって、庶民は喜んでいた頃でもある。

第三章

大恐慌の中の大川合名

時代的背景

1 金融恐慌

いまし詳しく、当時の時代的背景を思い起こしてみよう。

昭和二年三月、銀行の取り付け騒ぎが始まった。大変なことであった。一大臣の失言からだ。憲政会若槻内閣の片岡直温蔵相が、うっかり口を滑らしたと伝えられる。

「渡辺銀行があぶない」

その発言が、新聞に出てしまった。庶民の不安をかきたてたのはいうまでもなく、銀行が信用出来ないなら……と人々は叫んで銀行へ走った。

「いまのうちに貯金を下ろしてしまおう」

銀行側は休業という事態に立ち至り、人々をしずめるために警官が出勤したりした。

昭和の金融恐慌はこうして始まったが、片岡蔵相の失言は単なるきっかけで、恐慌の直接の原因は、「震災手形」の処理問題にあった。

震災手形というのは、大正十二年の関東大震災のとき、民間銀行の融資した受取手形で決済不能になったものを救うため、日本銀行が再割引した手形のことであった。政府は、日銀に対

してこの手形を担保とする貸出しを命じ、代わりに日銀に、一億円を限度として損失補償を行なった。

この中には、大戦以来の不況で、既に焦げ付きになっていた不良手形も大分含まれていたのである。——話を少しもどしてみよう。

若槻内閣は、昭和二年の一月に「震災手形損失補償公債法案」「震災手形善後処理法案」を衆議院に提出した。片岡藏相は提案理由をこう説明した。

「ご存じの震災手形で、不良手形が回っており、その防止のため大幅に期限を延長して、支払い能力の回復をさせたいと考えるのであります」

つまり、政府・日銀信用によって、不良企業・銀行を大々的に救済する措置だった。

震災手形の実情は、大正十五年十二月末日現在で、未決済手形額は三千四百五十一通、二億六千八十万円。所持銀行は五十一行、特別銀行(日銀・台湾銀行・正金銀行等)五〇パーセント、普通銀行五〇パーセントの所有。特別銀行の大部分は、台湾銀行所有だった。

この法案の上程中に、片岡藏相の失言が新聞に出て、銀行の取り付け騒ぎが起こったのだ。

若槻内閣は、あわてて日銀の貸出しをゆるめ、三億二千二百余万円もの紙幣を、諸銀行に運んだのである。

金融恐慌がさらに拡大して、日本全体をゆさぶるほどの原因となったのは、台湾銀行の破産

である。

台湾銀行は、台湾における発券銀行として、政府の保護と監督を受けていた。台湾の開発ならびに中国・南洋への経済的進出のため、設立された銀行であった。

ところが、第一次大戦中から放漫な貸出しを行って、鈴木商店とのくされ縁が生まれた。鈴木商店は、女社長鈴木ヨネ、それに番頭金子直吉が采配して、大戦中に外国貿易を中心に事業をひろげ、三井物産と張り合っていた。この頃には、子会社あわせて六十余社、資本総額は五億五、六千万円ともいわれていた。鈴木商店はもともと砂糖や樟脳を扱う商店だったので、台湾総督府と関係が深く、台湾銀行からの融資に頼って存続していたようなものだった。

こうして融資を頼りに存続していた状態だから、戦後の恐慌で大打撃をうけた。

台銀は、鈴木商店が破産すると巨額な貸出金が回収不能になる。そこで鈴木商店を破産させないため、ろくな担保も取らず、日銀にすがっては融資を続けていたわけだが、どんどん融資額が増え続け、ついには三億五千万円にもなってしまった。

こうなると、政府も黙っていられなくなった。台銀に対して、「鈴木商店への貸出しをひき締めるよう直ぐ手配せよ」と指令する。そのため、鈴木商店は破産にひんし、台銀はそのあたりをうけて危険と見られたので、三井銀行や市中銀行が台銀へのコールローン（短期融資）を引き上げた。

台銀の破産は、經濟界を混乱に陥らせるばかりではなく、台湾・中国の植民地支配に悪影響を及ぼすおそれが多大であるので、二年四月、同内閣は台銀救済の緊急勅令案を枢密院にはかった。日銀から台銀に非常貸出しを行わせ、その損失については、二億円の国庫補償を認めるという内容であった。

しかし、枢密院はこれを承認せず、本会議で正式に否決した。表向きの理由は、議會を開いて、法律として制定すべきだということにあったが、本当のねらいはそこにはなかった。

ねらいは若槻内閣を倒すことであつた。というのは、政府の協調外交、すなわち外相・幣原喜重郎の名をとつた「幣原外交」に対する不満が、からまっていたからである。

中国の居留民団から軟弱外交と反対をうけ、中国に利権を持つ、紡績資本の三井財閥・政友会・枢密院の目のかたきとされたからである。

台銀救済緊急勅令案が枢密院で否決されると、若槻内閣は即日総辭職した。

四月十八日、台銀はついに休業した。ただし、台湾内の本支店は、治安維持のため台湾総督の命令で營業を続けた。

混乱は全国に及び、二十一日には、十五銀行・近江銀行なども休業した。十五銀行は、皇族や華族の取引先でもある銀行で「華族さまのドル箱」といわれていたが、昨日までの信用もなくなつてしまつた。

こうして全国各地の銀行は、預金払い戻しをもとめる殺気だった人々に取り囲まれたのである。政党内閣の慣行が樹立されて、最初の政変は、このように枢密院の陰謀によって引き起こされ、非立憲的な形をとった。しかも野党がこれに協力したことは、この時期の政党政治の実体を示したものである。

金融恐慌の真只中の四月二十日、田中義一を首相とする政友会内閣が成立。蔵相には元首相で、政財界の長老である高橋是清が就任した。

高橋蔵相は、全国銀行の「二日間いっせい休業」に続いて、三週間を期限とする「支払猶予勅令」を施行した。ただし五百円以下の払い戻しは認めたが、平時における支払猶予勅令は、世界でもほとんど前例のないことで、金融恐慌のはげしさを物語っている。

政府は、日銀に二十億円近くの非常貸出しを行わせて恐慌を食い止めた。ついで五月に臨時議會を開き、前内閣とほぼ同様の台銀救済法案に加えて、他の銀行に対する日銀の特別融資にも、国庫の損失補償を認める法案を通過させた。

損失補償の限度は、前者(台銀救済)が二億円、後者(普通銀行への日銀融資)が五億円であった。こうして国家が前端的に救済に乗り出すことで、金融恐慌はやっと押さえることが出来た。金融恐慌による、全国の休業銀行は三十数行をかぞえた。

この時大川平三郎は武州銀行(後の埼玉銀行)頭取も兼ねていたが、まだ弱体だったこの地方

銀行の防衛に自ら七百万円、現在でみれば、約百四十億の預金を集めて、これを補強したと聞いている。

2 浜口緊縮内閣と金解禁の失敗

私が合名会社を一任された昭和四年は大変な年であった。前の銀行パニックの後を受けて日本の大不況が始まった。それは後年分かったことだが、一つには、世界的大恐慌の影響だったのである。

昭和四年十月二十四日、世界経済の中心であったアメリカに、株の大暴落をきっかけとしてかつてない大恐慌がおそった。銀行は破産し、多くの工場がつぶされ、失業者は千三百万人、半失業者が千百万人も出た。当時のアメリカの労働人口は五千二百万人足らずだから、どんなに深刻だったか、これで分かる。失業者とその家族を入れると、イギリスがフランスの総人口ぐらいのものが失業したことになる。アメリカの恐慌は、忽ち世界中にひろがった。

日本経済は未だ弱かったうえ、これまでのたびたびの恐慌、つまり大正九年の戦後恐慌、同十二年の震災恐慌、昭和二年の金融恐慌で、すっかりいためたためつけられていたから、非常な打撃を受けた。昭和二年四月以来、金融恐慌の沈静に努力して来た政友会の田中義一大将の軍人内閣も、結局その放漫財政と侵略政策に行きづまり総辞職。続いて民政党の浜口雄幸内閣が誕生。

蔵相は、ながく日本銀行総裁を勤めた井上準之助だった。

浜口内閣は「緊縮政策、協調外交」を二大方針とした。民政党は、以前から「金解禁」を旗じるしにしていたので、これを実行する政策を大きな課題にした。

そのねらいは、金解禁をすれば、為替相場が安定し、日本の商品の値段が下がり、輸出で外国と競争が出来る。さらに外国の資本も安心して日本に入ってくるというのであった。

金解禁とは、詳しくは金輸出解禁のことで、金本位制では国内にはいつでも金に兌換できる紙幣が流通して、金または金貨は流通しない。それは国の金保有高を標準として紙幣の発行が許されるからだ。

国際貿易尻の決済は、原則として金(金貨)で支払うことになっているが、当時日本は連続的に赤字貿易であったため、これを金の現送によって決済すると国内の金保有は激減してしまう。すると紙幣の発行が制約され、通貨が激減され、従って物価の下落を起し、国内経済の運営が困難になる。そこで、国はこの赤字決済のための金の支払(輸出)を禁止して、相手国に対する国の債務として計上していく。

これが金輸出禁止令であり、これを撤廃して金の現送によって決済することを、金輸出解禁という。

井上蔵相は金解禁断行の事前工作として、昭和四年度の実行予算の削減に着手した。しかし

その予算は前田中内閣が編成し、帝国議会の協賛を得ている。そのため政友会が黙っているわけがない。九月、政府は貴・衆両院の各会派代表を首相官邸に招いて予算の説明会を開いた。

野党の政友会は井上蔵相に一泡ふかせようとしたが押し切られ、浜口内閣は実行予算の削減方針を貫き通した。節減の対象は、主として地方補助費と官吏の減俸問題であったが、各方面からのものすごい反対にあった。そして官吏の減俸は取りやめになった。

このころ、前記のアメリカ・ウォール街の株価大暴落が伝えられた。これがその後、世界大恐慌に発展するのである。

だがしかし、株価大暴落が起こった時点では、日本国内ではだれ一人として、世界恐慌にまで発展すると観測した者はいなかったのである。

そこで、十一月に金解禁の予告を発表し、翌、昭和五年一月十一日から実施された。

実に大正六年九月、寺内内閣の勝田主計蔵相によって金輸出禁止が断行されてから、十二年七か月目に当たっていた。

その結果は、今日と違って金本位制であったので、まず巨額の金流出が始まり、一月から五月まで、二億二千万円の正貨が流出し、昭和五年末までに、さらに約八千三百万円が国外へ流出した。そして七年一月までに、なんと総額で四億四千五百万円の巨額が流出してしまった。

そして、それに伴う通貨減少と緊縮政策による購買力の減退で品物が売れず、物価は急激に

下がっていった。特に農村の窮乏は激しく、生糸のほか、米を始め農産物の価格がぐんぐん下がった。

米価一石(約百五十キロ)当たりの生産費が二十七円余りなのに、十六円台となり、さらに続々と下がっていった。

「おまえ塩だち、わたしは茶だち、ソウジャンイカ、金の解禁、エーソオヨ断然……」
と「金解禁ぶし」が流行する始末。

当時の不景気の状態を一番端的に示すのは、五十円払い込みの株が、なんとあつという間に十分の一の五円に下がり、当時あつた四分の一(十二円五十銭)払い込みの株が、只の一元になったことである。この株は、株価が上がったときはプレミアムが付いて歓迎され、よく会社の「功勞株」として与えられたものだが、これが下がると、あとの三十七円五十銭は、会社が決めれば株主は払わなければならない、これが大きな負担になるのである。

こうして、企業の財産価値は十分の一になってしまふ。銀行へ担保に入っているものの価値も下がってしまう。当然、銀行は「増し担保」の要求をする。増し担保があれば会社も困らないわけだが、担保はないというわけで、逆に銀行が貸付の内容を問われ、非常に苦境に陥った。そして、企業の倒産も続出し、失業者も街頭にあふれた。

紡績・製糸工場からは、女工が続々と出身の村へ帰された。なかには郷里へ帰るにも汽車

賃がなく、東海道をとぼとぼと歩いて行く娘らがこの頃からめっきりふえ、悲惨な状況になった。

失業者の増加とともに、全国のあちこちで労働争議の激発である。昭和四年から六年にかけて、東京市電・横浜ドック・鐘紡・東洋モスリンなど、歴史的な大争議と共に、筑豊炭田・日本鋼管などの大資本における労働者のストライキ、さらに、群小争議が年々増加した。

やがて中小企業の倒産・休業、そして社長・工場長の夜逃げ、賃金の不払いなど続出する。日本国中大変な騒ぎであった。

富士紡績の四十五メートルの大煙突に登って、要求貫徹を叫ぶ「エントツ男」が出現したのはこの頃で、結果は会社側が折れて解決した。いまでも残された世相史である。

こういう状態が、大川平三郎の関係している七十近い会社全部に及んできた。

大川社長はじめ同族の人々は、それぞれ自分の責任会社を支えるのに精一杯で、結局、私は一人で、この合名を背負って立たねばならなかった。

当時「大川合名」の資産は、大体四千万円から五千万円で、今の金額に直すとすれば、かりに二千倍として、八百億から一千億ぐらいになると思うが、この財産を使って関係各会社の救済に当たったのである。

主力事業の樺太工業は、井上蔵相の肝煎りで「日本興業銀行」が、てこ入れして支えてくれ

た。しかし、そうになると、その発行する社債の一部を、私の大川合名でも引き受けなければならなかった。

そして、この社債と合名の持っている財産を裏付け担保として抱き合わせ、銀行から借金して、樺太工業に入れることであった。

ここで、井上蔵相がなぜ興銀に指示して、大川系事業にてこ入れさせたのかを、当時の歴史の裏話として次に紹介しよう。

3 金解禁反対論の大川平三郎と井上・團三者会談

浜口内閣の金解禁の問題が出たとき、勅選議員であった大川社長は貴族院交友クラブを代表し、政治家として、真正面から井上蔵相の金解禁政策に反対の火の手を挙げた。

半世紀以上にわたり、欧米文化を十分に消化し尽くし、日本近代化育ての親として、今漸く一人前になろうとしている日本産業を目の前にして、ここで金解禁をすれば忽ち巨額の金が流出し、もともと保有量の乏しい日本は忽ち通貨欠乏となる。恰も温室育ちの草花を急に天日に晒したら、水不足のために却ってそれを枯らしてしまうように、日本産業はその本質的欠陥の故ではなく、金融的に、また極端な社会的購買力の減退のために急激に弱体化する恐れがある。

従って、金解禁は日本の産業に充分力がつき、輸出入貿易が均衡する時まで待つべきである。この目的達成こそ国是「富国」であり、日本産業人の近代化の責任である。

このように大川社長は金解禁尚早論を展開して、一步も譲らなかつた。

だが、同内閣もまた大川社長の金解禁尚早論の救国的提案をしりぞけて、金解禁の断行を決定した。

この両雄の対立は、一方が国家的主張であり、もう一方が政党的方針であつて、常人の介入を許さぬものがあつた。

この時、両雄の対立に決着を付けるべく、三井合名理事長の團琢磨がこれを買つて出て、工業クラブで、自ら立会人となつて三者会談をすることになつた。当時、私は社長秘書の一人として、その一部始終を見聞したのである。大川社長が、團理事長に向かつて、

「あなたも財界人としてお分かりと思うが、現在の工業の水準では、まともにもこの不景気をかぶつたら全部参つてしまふ。独り立ちするまでは産業を保護しなくてはならない。世界に向かつて日本の工業品が大幅に輸出出来るようになり、貿易が均衡するようになつたら金解禁をすればよいのだ。いまの貿易赤字の状態で金解禁をしたら、忽ち金の国外流出が始まつて大変なことになる」

井上蔵相も負けてはいないで反撃に出た。

「大川さん、自分も金融については自信がある。それに緊縮政策の金解禁は、民政党としてはどうしてもこの旗印を引っ込めるわけにはいかないんだ。だから君の事業については全面的に責任を持つから、反対の旗を降ろしてくれませんか」

「君の事業」などと個人的な事をいわれ、大川社長は一層不快になったらしい。

「井上さん、それは考え違いだ。僕は何も自分の仕事が大事だから反対してるわけじゃないんだ。そこんとこを勘違いしないで下さい。」

日本の工業で僕の息のかかってないものはない。だから僕には全体が分かるんだ。日本の産業、日本の工業が生きるか死ぬかの問題だからいっているのだ。そこを理解して貰いたい」

激論はいつ果てるとも分からなかった。ところが、これは井上蔵相がどうしても決行しなければならぬ政策であり、民政党の政治的宿命でもあった。

結局二人は食い違いのまま、物別れになってしまふ。黙って二人の議論を聞いていた團理事長がやおら口を開いた。

「ねえ大川君、無論日本全体の産業も大切だが、このままでは民政党の立場もなくなる。私を保証人になって、あなたの仕事には決して迷惑のかからないようにする。不満だろうが一つ民政党の顔を立ててやってくれ」

半ば嘆願的に口説かれ、ついに大川社長も折れたのである。事務所に帰って大川社長は「ば

かなことをして困ったものだ。銀行の取り付け騒ぎをあれだけやっても、まだ足りないのだ。日本経済の見通しは真っ暗だ」としみじみ述懐した。しかし、こうして両雄が妥協したものの結果は大不況。世界的恐慌まで加わり、明治開国以来耕された日本の産業が、その旗手であった大川社長の生涯の業績が、一瞬にして崩壊しようという大難局に直面した。

その渦中であって大川社長は、自らの「金解禁尚早論」の予言的中を誇らず、淡々として困難に処し、また自らの事業の防戦を一手に引き受け、その窮状と戦ったのである。

後にも述べるが、この三者会談の二年後、大川社長一人を残して井上・團の両者は凶弾に倒れるという、運命の不思議さを感じる。

4 浜口内閣から犬養内閣へ

昭和五年十一月十四日、浜口首相が東京駅で狙撃されるといふ事件が起こった。民政党は急遽、外相の幣原喜重郎を首相代理にあて、この難局を切りぬけようとした。

浜口内閣は、行財政の整理・不景気対策・労働組合法案・小作法案・海軍の補充計画など、重要問題をたくさん抱えていた。その中でも昭和六年度予算の審議が、最重要の課題であった。

蔵相の井上準之助が野党の集中砲火を浴びるのは必至であった。翌年の一月、井上が衆議院

本会議で財政演説を行ったとき、政友会きつての財政通の三上忠造が論議を挑んだ。

井上蔵相がデフレ政策の堅持を主張するのに対して、三上忠造はこう反論した。

「政府が公債を発行して、進んで政府事業を起こし、景気に刺激を与え、不況からの脱出をはかるべきだ」

しかし、井上蔵相が、政治生命をかけた緊縮政策としての金解禁を放棄するわけがない。結局、六年度予算は衆議院本会議を通過した。続いて貴族院も通過し、予算案の成立をみた。

この予算案の審議の大詰め頃だった。浜口首相が傷病の身を押し登院し、首相の責任を果たそうとしたことは、一国の首相として立派な行爲だったと、私は今も思っている。浜口という人は、そんな誠実な人間のようなうだった。

浜口はこの無理がたたってか、再入院し、総裁を辞任した。

第二次若槻内閣となる。若槻内閣は、大恐慌による歳入減をきりぬけるための行政・財政を整理することを急務として、その手始めとして、五月には官吏減俸を実施した。

昭和六年九月、イギリスが金本位から離脱する声明を出した。これにならって各国も次々に、金本位を離脱していった。このニュースは日本にも伝わった。ロンドンでは世界金融の中心地であったから、イギリスが金本位を放棄した以上、金本位制の世界的崩壊は必至であった。

日本の金融資本も、井上蔵相を見放しつつあった。財閥系銀行は、いまや金輸出再禁止の腹

を固めつつあった。

政友会は即時、金輸出禁止を断行すべきであると決議した。

民政党内にも次第に亀裂が生じてきた。

政変に向かって事態は急転していたのである。こうして、第二次若槻内閣にとどめを刺したのは、井上の財政政策に反対する、安達謙蔵内相一派の「協力内閣運動」であった。安達内相らは、政友会との連立内閣を作り、この非常事態に対処しようとしたのだ。昭和六年十二月十一日、ついに若槻内閣は閣内不統一により総辞職に追いこまれた。

天皇から、後継首相について御下問を受けて参内した元老西園寺公望は、奏上した。

「後継の総理としては、政友会総裁である犬養毅を愚考致しております」

ここで犬養内閣が誕生、すぐに金解禁再禁止を行なった。

5 テロリストの時代

こうして、日本経済はようやく底入れとなり、大川合名も、幸いに九死に一生を得てこの難関を突破することができた。

しかしこの経済的破綻が近因となって、浜口首相狙撃事件(昭和六年八月死去)を始め、昭和七年一月、井上準之助が小沼正に殺され、同年三月、三井合名理事長の團琢磨が菱沼五郎にピ

ストルで打たれ、ついで同年の五・一五事件によって、大養首相が黒岩少尉・三上中尉に倒され、さらに昭和十一年の二・二六事件の高橋蔵相暗殺など、社会的テロ恐怖時代が出現してくるのである。

井上準之助は、大震災後の第二次山本内閣と浜口内閣、続いて第二次若槻内閣と、三度大蔵大臣を勤め、この間に二度にわたって、日銀総裁に就任していた。

さて、大養内閣が与党(政友会)少数のために議會を解散したのは、昭和七年一月のこと。

二月九日、衆議院議員の選挙戦の真最中に、民政党選挙対策委員長の井上前蔵相は、東京第二区の、民政党公認候補駒井重次の応援演説のため、駒井と同行して会場の本郷区駒込小学校の裏門に車を乗りつけた。下車して裏門を入りかけた時、至近距離から短銃が放たれた。

犯人は、茨城県出身の小沼正だった。小沼は、郷里に帰って農村の疲弊を見て、井上前蔵相の経済政策によると思ひ、殺意を起こしたと語った。

團琢磨は、三井鉱山・北海道炭鉄道・日本製鋼などの取締役を兼ね、益田孝が引退した時、三井合名の理事、ついで理事長となり、支配会社を十社から四十社へ、資本金合計を六倍にするという敏腕をふるった。

昭和七年三月五日、午前十一時ごろ、團はいつものように、三井本館に車を乗りつけ、車から降りた瞬間、ピストルで狙撃された。犯人の菱沼五郎は堂々と自供した。

「国民の貧苦を見て、腐敗した政党を打破する目的でやりました……既成政党的の背後には、かならず大きな財閥の巨頭がついているから、まず財閥の巨頭をねらう計画だったので」

小沼を逮捕した時、警察は背後関係を追及しなかったが、菱沼の追及はきびしかった。

「大洗海岸、立正護国堂に居住する僧侶井上日召先生の指令によって行った」

井上日召（本名井上昭）は「血盟団」を組織していた。小沼正・菱沼五郎も有力メンバーだった。

農村中心主義者で、日本精神に基づく国家改造の信念に燃え始めていた。そこで、彼は政財界へのテロ行為、「一人一殺」をスローガンにして血盟団員を育てていた。

日召は自首し、団員十三人はすべて逮捕された。しかし、彼らと連絡のあった海軍将校らを、当局がそれと知りながら逮捕しなかったことが、五・一五事件の起きる可能性をつくっていた。

七年の五月十五日の白昼だった。四班に分かれた陸海軍将校が首相官邸・警視庁・政友会本部などを襲撃した。犬養首相は射殺され、内大臣牧野伸顕の官邸には、爆弾が投げ込まれた。

政友会本部にも爆弾が二個投げ込まれ、三菱銀行も襲われたが、これは無事だった。別動隊の農民決死隊は、帝都を闇にしようとして、東電の各変電所それに東京・尾久にある鬼怒川水力電気の変電所を襲撃したが、たいした被害ではなかった。帝都暗黒化の事態はまぬがれ

た。

五・一五事件に参加した軍人らは、東京憲兵隊に自首して出たので、憲兵隊は、軍人らを抱えて、警視庁には指一本触れさせなかった。

この裁判は陸・海・民間の三グループに分けて行われたが、刑は割に軽く、首相を殺した三上、首謀者の古賀ですら、禁固十五年であった。

判決理由は、国家革新の熱烈な精神から事を起こしたものと認めた情状論で、国法を犯し、軍紀を乱したのはよくないが、その憂国の至情は理解されるといふものだった。

この軽い判決が、昭和十一年の二・二六事件の遠因ともなると伝えられる。

銀行の応接間で読経

産業界も漸く息を吹き返して、人々の顔も多少明るくなったが、私にとってこの三年間は長かった。

私が大川合名を任された最初の仕事は、なんと「借金」という、むずかしい大仕事であり、二十代の「若造」の私は、そのために毎日飛び回っていた。

かつて、私は秘書課勤務で、社長の鞆持ちだった。それに個人的にも借金の経験は全然なかったから大変であった。

一方、同族の人々は、前記のようにそれぞれ関係会社を支えることで精一杯。肝心の大川社長は、これまた、当時、武州銀行の頭取であるのに、私にこういつていた。

「わしは、銀行には絶対に頭を下げないよ」

そして、銀行に行くことを一切しないのである。その理由として、次のような信念を語っていたのだ。

「企業家というものは、一軒の家でいえば「主人」である。金融業者というのは、これは「女房」である。「主人」が女房に頭を下げるというようになると、その家は発展しない。

国の経済もこれと同じことだ」

明治人間の、強い筋金入りの資質である。

私は文字通り孤軍奮闘しなければならぬ。

そこで、私は先輩や紹介者を求めて、銀行に行くわけである。それにしても、まだ二十数歳の若造で、相手の銀行を説得するような経済知識も、また社会的地位もなかったので、相手の信用を得るのが大変だった。そこで自分の全人格で体当たりするしか手はなかった。そしてただこれだけは確信をもって、はっきりと語った。

「私の社長大川が、孔雀であるか、家鴨であるか、もう一回だけこの卵を抱いてみて下さい。私は大川を信じています。皆様にご迷惑をかけるようなことは決して致しません」

こういう私の申し入れに対して、先輩・知人も、

「君は、それほどまでに大川さんのことを思っているのか。よし……考えてみよう」

こう答えてくれるのだった。そして一生懸命に私のために骨折ってくれた。

このように私にはなんにも「武器」はなかったが、たった一つあったのは、学生時代に縁あって体得出来た法華経の信仰であった。

これを唯一の武器にして、銀行で待たされている間、応接室でお経の本をひろげ、一心不乱にお経をあげた。ただもうひたすら、仏の加護を祈るのみであった。この私を脇から見ると人々

は、「気持ちが悪い」と思われたかもしれない。

安田銀行との最後の取引のときは、もう入れる担保が何もなかった。いま担保に入れてある樺工の社債の利札を担保にして、借金の継続、手形の切り換えを申し入れた。その利札は、あと三か月後でなければ、現金にならない代物である。三か月先の利札を担保にして、融通してもらうのだから、まあ図々しいということだろう。しかも、そんな融資を二度もやってもらった。

こうしているうち、銀行の営業のほうからいわれたものである。

「これが最後ですよ。これ以上は、上層部へ出しても、通りそうもないですよ。そこでものは試し、君からひとつ、竹内常務に直接当たってみてはどうかね」

「私の顔も三度」というものだ。私は無理だとは充分思っていた。竹内常務という人は、後に安田銀行の最高責任者になった人であった。

そこで早速、二階の常務室へ私は出向いた。

竹内常務に会うやいなや、とにかく三拝九拝であった。まさに命がけであった。

「ぜひ、お願い申します」

そのほかのことは、何を話したか、とにかく「お願い」の安売りであった。

こうして、私の申し出た願いは、無事にパスした。

命はつながつたのだが、もしこれが駄目だった場合、大川合名も樺工と心中する運命になると覚悟をしていた。

ちょうどそのころである。前にも述べたが、犬養内閣に替わり、高橋蔵相が金解禁を中止して、国民の気分も一新し、景気も徐々に回復してきた状況であり、まさに危機一髪のところまで救われた。私は法華経のおかげであると信じ切った。

その間、大川社長も命がけであったようだ。後に聞かされたことによれば、毎晩、夜中の二時頃に、多忙な仕事が終わると、必ず仏壇に灯をともし祈願をしていたという。全く私と同様であった。

そして、犬養内閣に替わる直前は大川社長が最後の難局に立たされた時である。さすがの社長も、会社の応接室の長椅子にあおむけに寝て、しばし瞑目して、最後の腹を固めるべく考え込んでいたようである。

こうして危機を乗り越えたあと、安田銀行での笑い話に、私が安田銀行の応接室で大声でお経をあげていた時に、よその客が不思議に思っただけで守衛に聞いたという。

「あの部屋で、なにかお経をあげているようですが、何かご法要でもあるのですか」
すると、守衛もその質問に困ったのか、

「多分、お坊さんが、やっているんでしょう」

と、なんとかうまく逃げ、お茶をにごしたという。

安田銀行の竹内常務も、営業の担当者に、後日こういったものである。

「大川合名の池田という支配人は、面白い男だよ。僕のところ頼みごとで来たけれど、始めから終わりまで、宗教論を聞かせて帰って行ったよ」

笑いながら、そう語ったという。しかし私自身は、何を話したか、ただ「お願いします」と繰り返したことは記憶にあるが、全く夢中になっていたから、何を喋ったのか……。

絶体絶命の叫びだったのは確かである。

銀行家大川の責任感

大川社長は、事業を計画し経営する企業家である。

企業家だから、資本は利用するものという考えであったし、銀行家になるつもりはなかったはずだ。

その社長が、武州銀行の頭取になっていたのには、少し理由があった。武州銀行は、本店が埼玉県・浦和にあった。大正七年、その時の県知事だった岡田忠彦という人の創意で、大川社長に従兄の尾高次郎を中心にして、県下の銀行の頭取や重役が集まって、組織したものだ。そのため尾高次郎が初代の頭取になって、基礎を築いたのであった。

大正九年、尾高次郎が病気で倒れ、後継者に座る人が必要になったが、なかなかいなかった。埼玉県の出身者で、財界の信用もあり、県下の一流の重役の上に立つ人と限定されると、物色するのが困難だった。

重役たちの協議によって、白羽の矢が大川社長に立った。社長は持論として、

「私のような、手広い事業家は、銀行の経営者として不適任である」
と常々語っていたので、その旨を述べて固辞した。しかし銀行側も、

「他に頼る人がいないので、ぜひ、何とか……」

社長はもともと、頑固な人ではない。ついに折れて、武州銀行なら自分の郷里の銀行だからといって、頭取になることを承知した。

一旦、頭取を引き受けたとなると、精力を注いで大きくするというのが、大川社長の真面目であったから、それから十数年間に県下の六十七の銀行を併合し、資本金を八百二十九万円にして、預金は実に五千三百万円を越すまでになった。急成長であった。

昭和四年の恐慌の時である。

大川頭取の自行の預金は、五百万円であった。この額は、大川合名資産の全体のおおよそ、一〇パーセントであった。今の金額になおすと、ざっと二千倍としてみれば、百億円である。大恐慌下、傘下の企業は、正に企業の興亡の岐路に立たされてしまった。

傘下の企業を救済しなければならぬ合名にとつては、この五百万円は、正にのどから手の出るような金であることはいうまでもない。

ギリシャ神話に「タンタロスの飢え」という話がある。

タンタロスはゼウス大神の子孫といわれ、いまのトルコの西北部のフリュギア地方の王であった。タンタロスは、いろいろな悪事を働いたが、なかでもひどいのは、自分の子供を殺して体をばらばらにし、神々の食卓にのせたことであった。神々はすぐ見抜いて食べなかったが、

娘を誘拐されたばかりの女神デーメーテルは、もの思いにふけていたので、ついうっかり一口食べてしまった。

ゼウスは、大いに怒り、タンタロスを冥界に送って、飢渴の刑に処した。彼は小川に膝まで浸かり、大岩の蔭に立たされた。肩先へは、実をつけた果樹がたれているが、取ろうとすると、枝が自然に上がって届かない。足元の水を飲もうとすると、水は引いてなくなってしまう。

この寓話のように、五百万円というお金はありながら、遂に最後まで、社長はこのお金を使うことはなかった。

おそらく、企業は倒れても、社会的に責任のある銀行だけは、傷つけまいという信念だと思われる。なかなか出来ることではない。

もっとも、当時銀行の頭取は無責任であり、ことに武州銀行は、まだ歴史も浅い地方銀行で、大川の関係事業のバックとしては力不足であったのも確かだ。

武州銀行の親銀行と思われていた第一銀行は、渋沢栄一の創立である。渋沢栄一と大川社長の関係から見ても、大川社長の力になると思っていたが、なぜか大川社長は、独立して事業家となった初めから、第一銀行に頭を下げることをしなかったようだ。

また、三井銀行は、富士・樺工と競争している王子製紙のバック銀行で、当然大川系事業の救済には目もくれなかったのである。

企業との癒着のため、連鎖倒産した銀行も少なくなかったため、頭取が銀行を自分の事業のために私用に使ったり、自分の預金を先に引き出したなどということは、単なる噂だけでも大変である。

まして実際に、預金を引き出したりしたら、忽ち預金者が動揺して「取付け騒ぎ」を引き起こすことにもなる。取付けとは、銀行が信用をなくしたときに、預金者が一時に銀行に押しかけて一斉に預金を引き出すことをいう。

だから、銀行頭取としてはよくよく行動を慎まないといけない。大川社長は身をもって、それを実行した。

私が思うのに、大川社長は、第一銀行を始め、多数の銀行を創立した渋沢栄一の「信は万徳の元、信用を柱とする銀行はすべからく『道徳銀行』であるべし」の遺訓を身につけて「企業家頭取」のむずかしいはじめをきちんと持ち、銀行家としての責任を身をもって、全うしたわけだ。

その正義の実践には、私はむしろ悲愴感さえ覚えたのである。

銀行へお礼まいり

「お礼まいり」というと、暴力団の仕返しのことだと思っている人がいる。いつから、そんな事になったのだろうか。

もとより本来の意味は、神仏にかけた願いが成就した時、お礼に参詣することを表すことばであることはいうまでもない。

景気の回復後のある日だった。

社長室に伺うと、未決の書類に目を通しながら、社長は私にこう聞いた。

「池田、今度の騒ぎで君も大分走りまわったが、どこの銀行が一番、お世話になったか」

「はい、それは、なんといいっても安田銀行です。あの銀行の方々が、いちばん親身になつて、考えてくれました」

突然聞かれたが、私は躊躇することなく、安田銀行の名をあげた。安田銀行には、同窓の先輩や友人らも多く、相談しやすいということもあつたが、ずいぶん無理な願いもよく聞いてくれ、相談相手になつてくれた。

竹村吉右衛門という人は、のちに「安田生命」の社長になった人だが、昼めし時になつても、

応接室で、一人で待っている私を見兼ねたのか、たびたび昼食に誘ってくれ、沈みがちな私を、いろいろ力づけてくれたので、とくに私にとっては忘れられない人であった。

そのことも忘れずに、社長に伝えた。すると社長から、不思議な言葉が返ってきた。

「そうか、そうか、それは良かった。じゃあ今日はひとつ、わしが、銀行にお礼まいりに行ってやるう」

「えっ、社長が銀行にお礼まいりですか」

私は、ちょっと驚いたので、おうむ返しにいった。

大恐慌で悪戦苦闘していたときでさえ、社長の信念として、銀行には頭を下げないよ、と断言したのに、台風一過の後とはいえ、これはまたどういう風の吹きまわしかといぶかりながら、社長のお伴で、大手町の一角にそびえる安田銀行まで行って行った。

銀行二階の、奥まったところにある応接室でしばらく待った。さすがは安田の重役用の応接室で、調度など申し分がない。ほどなく竹内筆頭常務が現れた。

私は、応接室の隅にかしこまって、二人の財界人の会見の様子を見ていた。

大川社長は、別にあるがとうともなんともお礼らしいことはいわない。ただ、天下の大勢といえ、少し大袈裟だが、財界の今後の見通しなどを延々と論じている。

竹内常務の方も時々口をはさむが、それは、恐慌時の企業主の苦難をねぎらっているようだ

った。

もっとも、大川社長の貴族院における「金解禁反対論」が見事の中として、大変な「予言者」のようにいわれたことは、だれでも知っていることのためかも知れない。

結局、大川社長は、お礼は一言もいわず意気揚々と辞去した。お礼のために来たことを私は知っているので、変な気持ちのまま、社長のあとに続いて階段を降りた。

一階に降りてくると、社長はびたっと足をとめて、私に向かつて、

「お前が世話になったのは、こっちなんだろ」

と、いって、私が返事をするのも待たずに、営業部の部屋へつかつかと先に入って行った。

広い営業部では、顔見知りになった銀行マンが忙しそうに働いている。いちばん大きな机の前に座っているのが、営業部長だ。

社長のあとについて歩きながら、私は顔見知りの人々に挨拶をした。私たちに気がついた部長は、直立不動の姿勢をとって深々と頭を下げて挨拶する。

社長は足早にカウンターに近づくと、立ったまま私をふりかえって、

「うちのこれが、えらいこと、お世話になったそうだが、大変ありがたかった」

お礼の言葉はたったこれだけで、自分の事業が世話になったのではなく、まるで倅が世話になったのを親がお礼の挨拶をしているようだった。

さすがに「天下の大川」である。私は、心の中で密かにそう思っていた。挨拶が済んで帰りかけると、咄嗟に営業部長が走り出し、玄関のドアをあけ、私たちを通すと、表へとびだし、社長の車のドアをあけて待っている。そうして丁重に見送るのであった。

その時の営業部長は、近藤静郎という人で、今でもよく覚えている。そこから、私達の事務所までは車で五分とかからない。

社長は前を向いたまま、

「おいっ、さすがは安田善次郎だな。社員教育が行き届いているな」

半ば独り言のようにつぶやいた。社に帰るとすぐ、武州銀行の常務を呼べというので、私が電話連絡した。常務は永田甚之助という「第一銀行」から移って来た人だった。

急な呼び出しでびっくりしたらしい永田常務が、神妙な顔で社長室に現れた。

「あっ、永田君、急に呼びだして驚いたかい。僕はいま安田銀行に、池田と一緒にお礼まいりに行ったよ。すると営業部長が自分でね、こまめに動いて、ドアをあけたり、車のところまで送ってきたりしたよ。車のドアまであけて、見送りするんだ。

さすが、安田善次郎の教育は行き届いていると思っただけ。うちの銀行もよく見習って、お客様の接待をしないとね」

社長は、単刀直入に注意した。社長は武州銀行の頭取であったから、永田常務も心中おだや

かでなかったろうが、そんな素振りもみせず、お辞儀して帰って行った。

後日、永田常務に会う機会があり、私を見るとすぐにいった。

「池田君、君はひどいじゃないか。社長から僕に小言をいわせるなんて……」

「いや、常務、私はそんなつもりはありませんよ。何も私は知らなかったんです」

「そうか、それじゃ仕方ないけど、君から電話があったんでね。てっきり君から出た話だと思ってる。実は不快だったんだ」

とんだところで、人のうらみを買うところだったが、分かってもらえて助かった。

苦境のどん底でも、銀行に頭を下げなかった大川社長が、どういう心境の変化か、突然お礼まわりに行くといいだして、私も面くらったが、やはり社長は目のつけどころが違う。

安田銀行で目にとまった営業部長の行動に感激して、すぐ銀行頭取として、自分の銀行の社員の接客態度の改善に役立てて行くという仕事の態度に、私はただただ脱帽するほかはなかった。

隠田の神様へお礼まいり

混乱した不安な時代になると、色々な「天下の神様」や「八卦見」などが現れるものだ。現在も、あまりよい時代ではなくて、テレビなどにも、妙な八卦見さんが現れてくるが、全く同じことが昔もあったわけである。

一応、景気の見通しもたった頃だ。たまたま大川社長から私は命ぜられた。

「お前、ちょっとすまんが、お礼に行ってもらいたい」

だれの所へ行くのかと思っていると、当時「隠田の神様」と称され、また、自称明治天皇のご落胤と噂されていた、飯野吉三郎という行者だった。だれに紹介されたのか分らないが、私の知らないうちに大川社長が接触していたのだ。そして、社長が色々なアドバイスを受けたということだった。

とにかく飯野の予言が当たって救われたのかも知れないと、大川社長は私に、その「神様」にお礼の包みを持って会いに行かせたのである。

確か場所は、赤坂の「星ヶ岡茶寮」だったと思う。行者は、あの山の上に陣取っていた。体格のよい、なかなか、風格のある人物であった。その「神様」にお礼を届けて、大川社長に代

わり、お礼の伝言を申し上げた。

これは余談だが、とにかく用件を済ませ、帰ろうとしていると「ちょっと待て」というのである。

そして、生年月日や出身地のことを聞かれた。すぐ答えると、なにやらぜい竹を手でさばいて、私のことを占っていたらしい。

「君、わしの娘を貰ってくれないか」

と突然、いうのである。そこに同席している美しい女性を「娘だ」と紹介されもした。咄嗟のことで私は驚いた。

そういえば、この娘さんは一、二回大川社長の所へ来たようだった。確かに私には見覚えがあった。

「まことに有難いお話ですが、私はまだ若過ぎますし、それに色々と重大な仕事が多まっておりますので、せっかくでございしますが、少々時間を下さい」と、即答をさけ、私はほうほうのていで帰って来た。

金融恐慌のさなかに、こうした色々不思議な人物が現れたのである。

ものの本によると、この飯野吉三郎は「日本のラスプーチン」といわれ、大正末年まで、政界や宮中に不思議な勢力をふるったものである。大逆事件の奥宮健之が、その「計画」を彼の

ところへ「売り込み」に來た。原敬日記にもその動向が書かれているが、奥宮が死刑となったため、謎に包まれた事件となった。まゆつば物の話だ。

この飯野吉三郎という人物は、後年「明治伏魔殿」などと、その醜行をあばかれた。殊に、歌人で一世を飛靡した社交界の花形、下田歌子とのスキャンダルも噂となったりして、世の中を騒がせた、「エロ事師」でもあったようだ。

「明治天皇のご落胤」とか「全国の信徒五万人」とか自称しただけに、とにかく政財界の人々に食いこむことの天才のような男らしいが、いつの世にもこういうタイプの人間は出現して来るものである。

——とにかく、私は若かったし、どうにも見分けのつかない人間として、飯野吉三郎と妙な出会いをしたものである。

なお、この昭和四年からの大不況で、全国の失業者は三十一万人に達しており、また、後藤新平が四年四月に死去、ついで田中義一が八月に死去、政界の大物が世を去った。また、五年九月には、ロンドンで海軍軍縮の世界会議が開かれるため、若槻礼次郎が財部彪らと出発した。

三 社会合併問題

大川社長の晩年に、最も国家的で、しかも極めて複雑怪奇な出来事があった。

それは製紙業界の大合同、王子・富士・樺工の三大製紙会社の合併問題である。この表面の経緯は、大川社長の伝記『大川平三郎君伝』にも載っているが、私が耳にしたり関与したりした楽屋話を少々書きたいと思う。別章にもしばしば出る問題ではあるが……。

例の世界恐慌と金解禁による大不況の荒波が、各業界に大打撃を与え、その結果金融界はこれまでの小スケールから大合同して、国家的信用機関としての基礎を強固にするよう政府から指導されてきた。

同様に産業界も、今までの乱立競争から、同種の企業は出来るだけ合同・合理化して今後の日本の発展に寄与しようとする気運が強く現れてきた。

この合併問題の直接の原因は、なんといっても金解禁による通貨の激減で、物価の大暴落のための企業の金融的逼迫にあった。財閥は実力のある金融業を自身のバックに持っていたが、大方の事業会社にはそれがなく、事業の内容よりも金融面で大変苦しんだ。

さき書いた理由で、大川系の主力、樺太工業でも、井上蔵相の肝煎りで興業銀行がバック

になり、力を入れてくれた。

当初興業銀行の鈴木島吉総裁が、権工の援助にあまり積極的でなかったので、井上蔵相の鶴の一声で、ひと晩のうちに交替させられたという噂を聞いた。

後年これについて興銀マンに聞いてみると、鈴木総裁は立派な銀行マンで、政治的介入を排して銀行業の姿勢を貫こうとしたのだそうである。

後釜に座ったのが結城豊太郎だった。結城総裁は安田財閥の中心者として日銀から迎えられた人だが、安田財閥とそりが合わず退任し、閑職にあった。そこを井上蔵相に拾われ、興銀総裁になったのだという。井上蔵相のお声がかりとあって、結城総裁は大川社長の事業、特に権太工業の救済には大変に力を入れてくれた。

金解禁問題以来の因縁の井上蔵相と、三井の総帥・團琢磨の後押しがあったので、合併の条件の一つとして、合併後新会社の初代社長は、何といても王子製紙を始めとして日本の製紙業の開拓者であり、現に富士・権工・二大製紙会社の社長である大川社長をそれに充てるのが当然だと、大体話が決定していた。

その間、若槻内閣に替わって犬養内閣の高橋蔵相時代となり、ただちに金輸出再禁止を履行した。

一時は昭和六年十二月十三日。

緊縮政策も止め、国内国外とも積極政策を進めた。翌年二月には井上が、三月には團が共に兇弾に倒れ、五月、五・一五事件では犬養首相が倒れた。

この状況を見て憂慮したのが益田孝である。すでに現職を去って二十年。小田原に閑居していたが、幕末から維新の激動期を生きぬき、三井物産を世界的に仕上げた人物であった。

團琢磨を起用したのは益田だったから、益田は團の後任に三井銀行常務の池田成彬を推した。池田は、技術者出身の團とは性格的にも対照的であり、銀行出身のベテランであった。成彬イコール清貧”といわれるほどの人格者で、日本の金融界に大きな発言権をもつに至った人物である。

そのうち三社合併の約束が実行される時期になった。この頃すでに各企業は一応危機を脱して整理段階に入っていた。

製紙三社のうち、樺工は金融的には弱かったが、事業の将来性から見れば、最も若く立地条件も最優秀だったので、不況下における取り決めの、王子一、樺工三の比率は極めて不適当になり、株主の間にも不満の声が出ていた。

そのうえ実行寸前になって突然、井上・團両者立合による当初の約束を破棄し、合併会社初代社長は藤原銀次郎、大川平三郎は単なる相談役に決定され、覚書として文書になっていた。

藤原銀次郎は、慶応義塾を出、『松江日報』主筆となるが、転じて三井銀行に入社し、中上

川彦次郎に見出された。富岡製糸所・三井物産上海支店長次席・同台湾支店長・同木材部長を経て製紙業界に入り、財閥の中で育った、いつてみれば「世渡り上手のサラリーマン重役」だった。

合併実施期の協議は、権工の金融上の世話役であり債権者である結城興銀総裁と、池田三井財閥総帥との間で行われた。

——大川社長は、当初から井上・團協議の決定だったから、信頼しきっていた。

そんなある日、大川社長が私に次のような述懐をした。社長の胸中いささか穏やかではなかったと私は推察した。

「池田、今度の合併の件だけどね、もちろん最初は自分が初代社長との話があったが、昔から自分は自分自身の栄達を考えたことはなかった。日本の重要産業の製紙業が一社にまとめれば、国家的にもそれだけ貢献することが出来る。

藤原君は自分より十歳も後輩だけれども、なかなかの出来物だから、この際、後輩に花を持たせてやろうと思ひ、わしは何も発言しないのだ」

しかしながら、井上・團の協議はどうして土壇場で変えられてしまったのだろうか。

会議では、権工側の代弁者は井上蔵相から推された結城興銀総裁で、この約束も引き継いでいるわけなのに、誠に奇怪な話であった。私には納得がいかなかった。

しかし、うがった噂が流れていた。それは三井財閥の策謀で、当時政財界に君臨している同財閥に向かって、後ろ楯の井上蔵相を失った結城総裁には、もはや前約を主張する力などはない。それどころか結城自身、将来金融界のリーダーや政界進出等の野心もあり、ことに三井の池田は同郷の山形県人で、結城にとっては今後の有力なパトロンである。——事実、結城は後年、日銀総裁、大蔵大臣を歴任したのだ。

それで結局、大川社長は三井財閥に押し切られたのだというのである。

これも別章に書いたが、数十年前王子製紙が渋沢中心の経営であった頃、三井の代表として藤山雷太を専務に就任させ、渋沢を追い出し、王子を乗っ取った。その時会社幹部は大川専務を擁して、労働者ではない管理者のストライキを行ったが、結局渋沢社長に殉じて総退陣、すべて三井財閥系となったのである。

そしてまた今度の合併で富士・樺工が併合され、ついに製紙業全体が三井財閥一色になる。財閥の強引さとは、まずこんなものであろう。

昭和二十七年河出書房発行、藤原銀次郎述、下田将美著『回顧八十年』のなかに、*「藤原・大川両雄の争覇戦であった」とか「財界における源平の争い」とか「謙信・信玄の一騎うちと評すべきか」*、*「明治・大正・昭和三代を通じての産業界の最も興味深い決戦」*などと書かれ、さらにまたこうも書かれている。

「大川の頼みの綱は渋沢氏と井上準之助だった。大川は大蔵大臣の井上氏の処に日参して金融の援助を嘆願し、井上氏を通じて興銀の総裁、結城豊太郎氏から金を引き出すのに専念したが、なかなか思うようにはいかなかった。大川氏も男であり、すでに両者間の契約調印も終わった上は、身を潔くすべきであったのに最後まで女々しい執着がつきまとった。

これは性癖の最も悪い面が現れたのである。王子、富士は臨時総会で合併を承認したが、樺工はこの合併が総会で決らなかつた。大川氏はこの総会の日、これを覆そうと計画し、運動したのであつた」

などと色々書かれているが、大川社長の人となりや実生活を理解しない一方的な見方で、かえって藤原の人柄を表明したようなものではなかつたか。

大川社長は自らの栄達のために策を弄する人ではない。それに財閥の中で育つた人ではないから、藤原とはまるで違って、財閥のため策を弄する必要もない。一途に日本の製紙業の発展を考える男であつた。

さらに大川は藤原のライバルではない。ただ、「若い藤原に花を持たせよう」といった意味も読者諸賢に分かつてもらえらると思う。

大川社長の仇敵は渋沢栄一以来、三井財閥であつたのだ。

その頃の三井・三菱財閥は、日清・日露・第一次世界大戦・関東大震災・世界恐慌等の波瀾

の時代を巧みに利用し、金融資本・商業資本から工業資本へと触手を延ばして、日本経済界を席捲するだけでなく、政界をも左右するに至り、三井の政友会、三菱の民政党とまでいわれた。なお、回顧録の樺工の合併総会の混乱を「大川の女々しい執着」とか「悪い性癖の現れ」などと藤原は極め付けているが、これはむしろ私の責任で、社長には申し訳ないと思っている。それには、次のような真相があった。

合併比率の二対三の苛酷さ、大川社長処遇の違約に、多年恩顧ある社員が憤慨して結束し、社長に内緒で合併反対を決行しようとしたのだ。そして被合併会社の社員は立場上表面に出られず、一番身軽な私が、その先頭に立って合併総会反対の委任状集めを行ったのである。

むしろ外部の証券会社関係などの協力も得て、委任状がついに過半数に達したのだ。そこで初めて社長に経緯を明かし、その賛同を迫った。

大川社長は私達の行動に対して、随分考えていたが、「自分は既に七十歳を越えている。今更自分一身の問題で国家の企業の末節を汚すわけにはいかない」と、その決意のほどを語ったのだ。

これらの噂が洩れて大川社長への誹謗となったのだが、三井財閥の強大な策謀には敗れても、大川社長の大義名分、私達部下の正義の戦いには、今もって高い誇りを感じている。

大川社長は大乗的というか、平たくいうなら「天下国家の立場」で、三井に対し恩讐を越えて若い藤原銀次郎に栄冠を譲ろうと考えたのだ。これは私が証言する。

この三社合併の話は、金解禁の物語と共に、大きな財界の裏面史であり、秘話だと考える。日本は敗戦によって一切の既存の権威は崩壊し、三井財閥や、藤原銀次郎がせっかく努力した大王製紙も、再び三社に分割されたのは皮肉な運命であろう。

それにこの三社合併がなかったら、戦後に樺太を失った樺太工業は、自滅の外なかったかもしれない。

事業の運命はとにかく、大川社長の愛国的人格は永遠不変である。

晩年、藤原銀次郎はある人に、

「自分の終生の希望は、一度でよいから事業のオーナーになりたかったことだ」

と、述懐したと聞いたが、対外的には華やかだった彼も結局、財閥の一番頭に過ぎず、むしろ財閥の醜い面の一端を担わされた生涯の感懐かと思われ、私にはその点で哀れを催す。

財界誌などが世に多いが、執筆者はとにかくデータをよく調べ、考察を深くして書いてもらいたいと思うものである。

第四章 私の被命事業

伊香保ケーブル

私が、始めて役員になったのは「伊香保ケーブル鉄道株式会社」であった。

昭和四年頃からの不況で、その影響をまともにうけたのは、まず観光事業、その次は、私鉄事業であった。

伊香保ケーブル鉄道は、大川社長の直接の企画ではなかったが、社長の弟・田中英八郎の女婿で、樺太工業専務、藤田好三郎が創立したものである。今の、西武鉄道が経営している豊島園遊園地なども、多分その藤田の企画ではなかったかと思う。同様に、群馬県の伊香保の榛名山にケーブルをかけ、下は温泉郷だから、山の上を大遊園地にするという計画だったようである。

藤田好三郎は、大変な企画の達人であった。日銀出身で、その頃、郷誠之助男爵を中心とした経済団体として日本財界の一方の雄であった「番町会」との関係も強く、この番町会には若手の堂々たる財界人が集まっていた。そのメンバーである地下鉄の早川社長、京成電鉄の後藤社長といった、私鉄関係のトップレベルの人々が、この伊香保ケーブル鉄道の重役になっていた。

ところが、不況にあって伊香保鉄道ケーブルは経営困難に陥った。

そこでどういう事情があったか分からないが、大川社長から命令がきた。

「おい、池田、ひとつ手伝って伊香保ケーブルの立て直しをやれ。重役はみんな大物ばかりだし、それぞれみんな自分の仕事も大変だろうから、この際、お前が役員に入り頑張ってやってみなさい」

「はい、やってみましよう」

私はまだ二十代の若さで、重役などという実感はまるでなかった。

そのうえ驚いたことは、役員就任早々起こったのが、なんと従業員のストライキであった。面白いことには、私にはまだ重役意識や階級意識が毛頭なく、労働問題の経験者でもない、ということがかえって結果をよくしていったようなのである。

その時の私は、ただ大川社長の命令だというわけで、伊香保に急行した。現地に着くと、下の事務所にはだれもいない。すでにストライキが始まっていたからだ。

ストの拠点は山の上の機関室、と聞いていたが、ケーブルカーが動いていない。ストライキだから当然である。仕方がないから、お題目を唱えながら、鉄道の枕木を階段のようにして登って行った。山の上のケーブルの終点の機関室に、従業員が立て籠っている。

私はストライキの経験もないし、研究したこともないのだから、その戦術も何も知るわけが

ない。体当たり以外ないと思い、いきなりストライキ団の中へ入って行き、身分を名乗ってから、

「君たち、ただここに立て籠っていて、いったいどうなるんですか。ケーブルを一車でも動かさないことには、一銭にもならないじゃないか。それに私たちは家族なんだ。船のネズミは自分の住む船底は、決して齧らないという譬えがある。君らは自分の船底を齧っているのではないだろうか。大川社長が、たいへん君たちのことを心配して僕に行って見てこいといわれて、やって来たのだ。とにかく、動かしてみたらどうだろう」

すると、リーダー格らしい四、五人が後ろに行つて固まり、協議し始めた。

私は傍らの木の根らに座りこんで、煙草をふかしていた。空気はうまいし、のどかな春の陽が輝いていた。

それから何がなんだか分からないまま、私と彼らは、友達同士として話し合ったようだ。

「よし、池田さんを信用しよう。ケーブルを動かそう」

ストライキは解決した。ケーブルカーは勢いよく動き出した。

これが、東京では、私の「大手柄」のように伝えられた。世の中は面白いものである。私はただ、彼ら従業員と、仲良く話し合っただけのことだからである。

その後、伊香保ケーブルの重役会が、東京ステーションホテルで開催された時のことであつ

た。私は重役といっても、まだ慣れていないし、若い青年である。そこで経理関係その他の書類を一生懸命整えて、重役会にのぞんだわけだ。

会場には、すでに番町会のメンバーの後藤・早川両社長をはじめ、財界の有名人が大勢集まっていた。しかしどういいうわけか、冗談や放言や笑い声ばかりしていて、なかなか会議なるものが始まらないのである。

そこで私は、思い切っていった。

「どうぞ、皆さん聞いて下さい。私が書類を持って来ましたから、会議を始めて下さいませんか。お願いします」

すると、やっと人々は静かになって、なかの一人が、

「ああ、そうか。君 適当に印を押しなさい」といって認印を私に渡された。

すると、その人にならって、全員が印鑑を私の前に差し出した。そこで私は印を押しながら、気になるので、それとなく重役連中の話を聞いていると、肝心かなめの仕事の話などだれもしていないのだ。

「ははあ——世間の重役会とは、こういうものか」

私も、大川社長のお伴をして、重役会の模様はだいたい見ているが、大川社長らの場合とは

大分違うようであった。

「しかし、やはり世の中には、時には、このような『間』というか空気のようなものも必要なんだろうな」——そのように感じたのである。

もちろん私は、大川社長の代理として役員になっているのだから、重役たちは一目は置いてくれたのだろうが、なんといっても相手は今を盛りの四十代・五十代の『天下の大物』である。こちらは二十代の『小僧』で、やはり貫禄の相違だろう。

調印の後、私は、重役たちにスト解決の報告と今後の会社再建の協力を依頼して、引き下がったのである。とにかく、私は、番町会の『お歴々』には、圧倒され通しであった。

それから、しばらく後であった。会社の実状を視察して貰うために、その大物役員の『ご一同』を伊香保に招待した。そして渋川から芸者も呼んだりして、サービスにこれつとめた。むろん、大川社長の指図で行ったことで、私の独断では出来るものではない。

その翌朝であった。ご一同の人々が朝食に集まって、

「やあ池田君、夕べはね、いい按摩を世話してくれて、お蔭で今日は肩がかかるくなったよ。ありがとう」

私への挨拶である。同じ役員でもこちらは接待役だから、恐縮してただ頭を下げ笑っていただけである。

こういう時の、大人物なる者の態度は、いかにも屈託がない。しかも、ありのままの姿であり、若い者の私にも気を遣うことなく、しかも見るところはきちんとして見ているのだ。

「どこか、凡人とは、体や脳の構造が違っているのだろうか」

私はただただ、恐れ入ったわけである。

二十代から会社の役員となった私は、たしかに幸運な人間であった。当時、一流大学を出たとはいっても、二十代の重役さんは早過ぎた。御曹子ならばともかく、私などは柄ではなく、とにかく毎日がどぎまぎした重役さんだったろうし、会社の同輩らにも気を遣うことは、人一倍苦労がいるのは当然であった。

「あいつ、おれと同じ齡なのに、偉くなりやがって……」

友人のジェラシーの目も時折は感じたものだ。

だが、私は誠心誠意、他人には尽くしたつもりであり、決して「思いあがり」の態度のないように極力気を遣った。それから、忘れなかったことは仏を信じる心であり、常に物欲・権力欲も自身で戒めていたのである。

熊本電気軌道

熊本といえば、城と清正と阿蘇山を思い出す。若き日の歌人吉井勇は、その情熱を一首の歌に託した。

君にちかふ阿蘇のけむりの絶ゆるとも

万葉集の歌ほろぶとも

——歌は明治四十三年刊行の『酒ほがい』におさめられている。

その熊本は、古くから大川社長の製紙や電力の事業地である。その関係もあって、社長のバックアップで創立した会社のひとつに、熊本電気軌道株式会社がある。

この会社もやはり当時の不況から、事業が「左前」になっていた。

私は、このの監査役として、事業の立て直しを命ぜられ、半期ごとに一か月の出張をした。

私は熊本に行くと、毎朝早いうちから幹部社員の全員を連れて、加藤清正公を祭つてある清正公神社とその菩提寺を訪ね、そこで法華経による会社再建祈願の行事をした。

また、鳩の糞で荒廃している本堂の修理、境内の清掃を行つて、奉仕に勤めたものである。

清正公神社は、坪井川を渡って、熊本城に近かった。鳥居を入れて、かなりの距離の石段を上がる境内は広々としていた。現在はどうなっているかはともかく、私が行った頃は、樹々が立ち並んで、こんもりとした幽玄静寂なお宮であった。

社員の結束は、いちだんと増した。会社も活発化して、鉄道からバス事業へと発展することになった。

その功労者の一人に、長崎県出身の内山秀作という社員がいた。早稲田出の技術者であったが、後年、熱心な法華経の信者になった。

百十四銀行の融資

大川関連会社の主力であった樺太工業には、興業銀行という有力なバックがあった。それでもなお、地方の銀行からも新しい借金をしなければ、経営困難になっていた。

四国高松市は、栗林公園・玉藻公園などで有名だが、この高松市に話が続いてゆく。

高松は、高松県と丸亀県とが合併した香川県の県庁所在地。香川県は、四国全島の面積の十分の一で古い国名は「狭野国」つまり狭い国だ。ついでに言えば、小説家の菊池寛、アナーキストの大杉栄、歌人中川幹子が出ている。

その高松市の「百十四銀行」といったと思うが、そこへ樺工は大量の社債を届けることになった。重役間の話は私には分からないが、とにかく社長命令が下った。

「池田に持たせてやれ」

私は、社債を鞆に入れて、生まれまで初めて四国へ渡った。見るもの聞くもの、すべてが新しかった。単身であった。二日目に百十四銀行の玄関に入った。

私は、融資の件は既に決まっております、単に担保のための社債を届けるのだと思っていた。すると、先方からあれこれと質問が出るのだ。

やがて、会議が始まって、かなり長い時間待たされた。協議の結果「お引き受けします」と快諾の返事を貰った。おまけに「ご苦労さま」ということで、四国の名産を貰って、東京へ帰って来た。

帰ってくると、なんと会社では、評判がたった。

「百十四銀行の融資は、池田が話をつけた」

私は何の気もなく、社長命令で行っただけである。交渉してうまく話をつけたとかいったような、そんな重大な使命を果たしたのではなかった。多分先方の銀行から、電話で改めて快諾の返事が東京本社に届いたということだろう。樺太工業が、悪戦苦闘の真最中だったので、大川社長はじめ役員も大変な喜びようであった。

しかし、若い私には、どうもピンとこない。鳩が豆鉄砲をくらったような、妙な具合で、数日間ぼかんとした状態であった。

四国高松というところ、いつもこの話を思い出して、私は一人で笑っているのである。——私は銀行側と何を話したか覚えていないのに、その融資の功労者になっているのだ。まことに妙なことが、世の中にはあるものだと思うからである。

東京倉庫運輸

静岡県の熱海温泉に行くと、『金色夜叉』の「お宮の松」というのがある。小説のなかのハイライト、貫一がお宮を足げにして、例の名調子の「今月今夜のこの月を……」という、あの場面をみごとに再現して作ったわけだ。

私はただただ、うまい観光手段だな、と感心することしきりである。

それに最近、川端康成のノーベル賞受賞によって、その川端ブームに乗り「踊り子号」を伊豆急行電鉄が走らせている。私はこれにも一本とられたようで、名作をうまい具合に観光用に利用しているのは、見上げたものだと思う。

これは何も日本ばかりではなく、アメリカやヨーロッパでも、文学者や音楽家などを利用して、町の名や記念館や遺跡を残し、けっこう観光手段にしているのは同様のようである。あまり俗っぽいのは困りものだが、品よく利用すれば、決して芸術を損なうこともなく、上手にお金儲けにもなるので、けっこうなことである。

ながながと文学などの話になったが、それはさておき、静岡の人で、静岡で事業をやっている、松村貞治なる人物について語らねばならない。

大川社長が「富士製紙」や「静岡電気鉄道株式会社」その他、静岡を地盤に種々の事業をやったところから、工場や山林などの関係で、社長に世話になったらしい。年輩は五十代ぐらいの働き盛りで、なかなか仕事も切れる才能を持った人であった。

昭和五年、金解禁以後の大不況で、樺太工業が苦境に陥った時だ。社長のところに行つて、樺工の社債を大量に引き受ける証券会社を紹介したり、その他色々協力したりしたが、大川社長の紹介で私もこの人と交際するようになった。

彼は大変な法華経の信者で、私より二十歳以上の先輩だったが、私とすっかり意気投合してしまった。

当時松村貞治は、東京倉庫運輸という会社の専務として、不況後の再建に当たっていた。

昭和七年頃は、日本の不況が一応底をつき、再生期に入ったけれど、社会局の発表によれば、昭和六年以降、七年四月までの賃金不払い工場八百五か所、金額にして二百九万八千円。それまでの三、四年間におよぶ不況の被害が余りにも大きく、その立ち直りは容易なことではなかった。

東京倉庫は、山の手線池袋駅の貨物駅に隣接し、七百余坪の借地に、五百余坪の平屋倉庫を持ち、倉庫業と国鉄（丁）中心の運輸業を営んでいた。

不況の数年後、資本金二十万円で、二十五万円の借金を背負い、しかもそのうち五万円は高

利の借金なので、松村専務は悪戦苦闘していた。

そんなある日、松村専務は大川社長の自宅を訪れた。資金的援助のことと、私の応援を要望するためだった。

「どうにも困っております。大川さんのお力添えを得たいとまいりました」

社長は、昔のよしみもあり、松村専務に頭を下げられると、不況時代の協力に報いたい意味もあったので、直ちに同席の私に向かって命じた。

「お前の助力を希望しているから、手伝ってあげなさい」

こういう事情で、私はこの東京倉庫の監査役に迎えられた。

私は、大川社長と相談のうえ、まず高利の借金五万円を大川合名で肩代わりすることに決定した。

さて、松村専務から、詳しい話を聞いてみた。

「この倉庫の創立者で、社長の星野錫氏は、渋沢栄一の弟子であり、本多日生上人の門を叩いた人です。ですから私も社長の影響を受けたのです」

経営の責任者である星野社長と松村専務が、いずれも法華経に縁のある人々で、しかも私の恩師の本多上人の門下と聞いて驚き、私はすぐに共鳴した。

このことが、図らずも私が東京倉庫運輸と一生を共にする因縁になったのである。以来、世

渡りの実践学や、趣味などを松村専務から教えてもらったりした。

数年後、大川社長が亡くなったあと、同族会議で、この倉庫会社を渋沢倉庫に買収してもらったかどうか、という身売りの意見が出た。

そうして、それが会社の従業員の耳に入った。当然、従業員も大変動揺した。

「合併すれば、自分たちの運命は分かっている。今まで自分たちは努力してきたけれど、何分あの不況で手に負えなかった。しかし景気も立ち直ってきた現在、これから全従業員が結束して努力する。どうか、なんとかして身売りだけは、しないで欲しい」

従業員全員が、私に嘆願しにやって来たのだ。

考えてみれば、従業員たちの言い分にも一理はある。

あの不況時には、みんな一生懸命やったのだから、大会社でさえばたばた倒産した。まして中小企業などはこっぴど微塵だったのだから、倒産しないで生き残ったのが精一杯だった。

大川合名の立場からすれば、当然渋沢倉庫に買収してもらって、債権を回収する方法がよいに決まっている。だが、従業員の側からみれば、五万円の借金のために自分たちの生活を犠牲にするのはたまらないのだ。

ことに国の経済が息を吹き返してきた現在、なおさら心残りなのである。また私は、現在倉庫会社の役員の人でもあり、それらの事情を考えると、私にも責任があると思った。

そこで、この件について、私は銀行の先輩などに相談した。

「そういう事業は、処分しないで、育てる方法がよいのではないか」という意見が多かった。となれば、まず、大川合名の債権を肩代わりする方法を考えねばならない。

幸いに不況時代の親交のおかげで、私個人の信用で、銀行から五万円の融資を受けられることになった。

だが、私がこの会社の再建に責任を持つとすれば、ただ資金だけ投入しても駄目で、私自身自ら倉庫会社に入社して陣頭指揮をしなければ、実際の立て直しは出来ないと考えた。

しかし、私は大川合名の支配人であり、関係会社数社の立て直しという重大な責任を負っているのに、それはまず不可能である。そこで、私は一策を考え付いた。

それは、今度の不況乗り切りで自信を得た「宗教的経営」である。私は全社員に対して、一つの条件を提示した。

「まずみんなが、宗教的に立ち上がってくれたまえ。その具体的な方法として、毎週土曜日の午後、全社員が私の家に集まって、お坊さん呼び、法華経のお祈りをしたあと、経営の研究会を開くことだ」

法華経を信じて祈れば、仏様は必ず護ると誓っておられる。ここは、ひとつ仏様の言葉を試

してみよう。キリスト教では、神様を試してはいけないというが、仏様は試せというのだから、従業員全員、真心を打ちこんで試してみようではないかと、続けて話し合った。

従業員は、本当に救われるかどうかの瀬戸際だったので、諸手をあげて賛成した。

そこで「同心会」という会をつくり、毎週土曜日、先生を呼んで、祈願と法華経の講話を拝聴し、さらに経営の研究会を続けることになった。

その後、不思議なことに、次第に明るい道がひらけてきた。

そのひとつに、会社の債権者の大手で、馬越某という米の相場師の話がある。彼は電話一本で東京・大阪間の米の売買をやっており、大変な財産家であった。

ところがこの倉庫には、この人の米は一粒も入っていない。よく調べてみたところ、大体、相場師というものは米相場だけで売買するのだけれど、時には現物を引取る場合もあることが分かったのだ。

「これだ。妙案だな」

私はさっそく手土産を持って馬越邸へ訪ねて行った。

「私の会社も大不況のため、大変な打撃を受けました。あなたからの借金でご迷惑をかけているが、あなたのお米をどうでしょう、ひとつ私の倉庫に入れてくれませんか。その代わり米の保管料は要りません。その分は全部、借金の返済に当てます。勝手な言い分ですが、どうか

現物を入れて下さいませんか」

私は熱心に話した。彼も膝を乗り出し、

「それは面白いな。保管料は要らないんだね。どうせ、よその倉庫に金を払って預かってもらうんだから、同じことだな。君はうまいこと考えたな、感心した。……よし承知した」

このようにうまくことが運ぶとは、私は思ってもみなかった。しかし結果はうまくいき、彼の米を入れることができた。

さらに彼の斡旋で、ほかの同業者の米も入れてもらった。倉庫はついに満庫になり、利息もまけてくれたりで、借金をどんどん返すことができた。嘘のようだが、世の中にはこういう運もあるものだ。

やがて、太平洋戦争も近い昭和十五年の初め、私は十数年勤めた大川合名を辞任することになった。そして、その後は、私がこの会社のすべての面倒をみることになり、今日に至っている。

——思えば、人間の縁とは不思議なものである。そして、私の信仰は益々深くなっていった。

台湾油脂工業

朝日新聞社元經濟部長の宇野という人が発起人で、「台湾油脂工業株式會社」を設立し、私は大川社長に命じられて役員をしたことがある。

昭和六年九月、何者かによって、奉天北郊の柳条溝で満州鉄道が爆破された。しかし鉄道の損傷はほとんどなく、事件直後には長春発の急行列車が現地を無事通過し、奉天駅に到着した。それにもかかわらず、関東軍の鉄道守備隊はこの事件を中国軍の挑戦であるとして、爆破の一時間後には付近にある奉天・北大營の攻撃を始めた。

同夜のうちに関東軍は、奉天・長春・公主嶺・四平街など、満鉄沿線の主な都市でも一斉に軍事行動を起こし、ついで司令部を旅順から奉天に移して、戦時体制に入った。これが満州事変の発端で、以後十四年間にわたる大戦争となる。

そのため、飛行機に使う機械油が欠乏してきた。日本国内では到る所の松林を切り倒し「松根油」を採取するようになった。

昭和二十年、敗戦後初めて国民の前に暴露されたように、満州事変は関東軍の陰謀に基づく計画的な行動であった。関東軍参謀の板垣征四郎大佐・石原莞爾中佐らは、満州占領の計画を

考えており、奉天城砲撃のため、攻城用の二十四センチ榴弾砲を秘密裏に運び込んでいた。板垣らは本庄閔東軍司令官にも計画を明かさず、第一線中隊長らに命令し、一挙に行動を起こしたのである。

ところで、この台湾油脂工業は、日本で松を倒して松根油を取るのと違い、台湾で蓖麻（ヒマ）を栽培しその種子をしぼってヒマシ油を作り、飛行機の潤滑油にするという、国家的な事業を行っていたのである。

樺太工業・富士製紙・王子製紙の三社が合併した後、大川社長は台湾で砂糖キビによく似た植物、マオランを原料にして、パルプを作る「台湾興業会社」を設立したが、その機会に宇野から申し入れがあった。

「同じ台湾で事業をなさるなら、私の方のヒマシ油製造もぜひ後援していただきたい」というのであった。

大川社長はすでに七十六歳の老齢であり、この申し入れに対してあまり乗り気でなかった。

「池田、この申し出の件はお前に任すから、まず台湾油脂工業に参加して、業務内容をよく検討してくれ」

こう私に指示をした。そこで私はこの台湾油脂工業の取締役になった。

宇野は私より年齢はかなり上で五十歳前後と思われたが、経済のベテランであるだけでなく、

幸いなことに熱心な観音信仰者で、法華經信者の私とも大いに肝胆相照らす仲となった。

ある日、彼は私の机の上に美しいブロンズの観音像を置いた。

「みごとな像でしょう。私が大切にしているものですが、あなたに差し上げましょう」

その後、十一年の年末、大川社長が死去。中国大陸での戦争は拡大して、台湾と日本本土の交通もひどく難渋し始めた。そのため外地の事業はきわめて苦境に陥り、ついに敗戦を迎えることで、この事業も消滅した。私は一度も台湾へ行く機会もなく、東京支社へ時折顔を出すだけの役員であった。

宇野もまた、憂国の雄図で興した会社の消滅とともに、敗戦後に急逝していた。

現在から思えば、このヒマシ油製造の事業は新聞などにも発表されて、かなり重要な軍事産業のひとつに数えられたものであり、折角の宇野の雄図が挫折したのは、さぞ彼にとつて残念なことだったろうと、思われてならない。

なお、ヒマというのはトウゴマの種子。ヒマシ油はその種子を絞った油である。無色ないし暗緑色の脂肪油であり、粘性で不乾性の油であるから飛行機の潤滑油に適し、戦争中には役立つたわけである。現在では減摩材や石鹼を作るのに用い、また薬用として下剤に使用もできる便利な油である。

日本劇場を建てる

1 帝劇はもう古い

私が大川社長から委任された仕事のうち、最も大きなものに、日本劇場の建設があった。

——「日劇が壊される」と人づてに聞いたのは、いつのことだったか忘れたが、それは私の若き日の思い出だけに淋しい気持ちだし、また時の流れの速さを感じたものだった。

その後所用があつて銀座に出たついでに、日劇のあつた場所に寄つて見ると、すでに新しい鉄骨が空を向いて建てられていた。

「日劇が消えたことは、客が少ないこと、すなわち客を呼べない経営者の無能さ」

確かにそうかも知れない。劇場・映画館に足を運ぶより、テレビの前でお茶でも飲みながら見るといった人が多くなつた。時代の急転は経営者にとっては苦しいことだ。

日劇の定員は二千八百六十人。今どきなかなかこれだけの人は集まらない。そういえば、近ごろは定員五百人くらいの小屋（大劇場でも小屋という。芝居小屋というように使うが、ショービジネスにたずさわる職業用語だ）も出来てきたという。

日劇がなくなることについて、コメントを求められたシャンソン歌手・高英男は、

「歌舞伎座がなくなるなんてこと考えられますか。日劇は私たちの『歌舞伎座』ですよ」といったそうだが、さぞ彼などにとっては寂しいことだろう。

ある日、知人が新聞の切り抜きを持って来てくれた。

昭和五十六年三月の読売新聞である。以下はその引用である。

「ベニヤ壁の下から秀麗なモザイク壁——。

来月に解体作業が始まる東京・有楽町の日劇ビルで、一階正面ホールのベニヤ壁をはがしたところ、その後に隠れていた、芸術院会員川島理一郎画伯の大モザイク壁画が現れた。

高さ三メートル、幅十五メートルという。

ホールで提携商品を売ろうとした日劇が、さる三十三年、売り場にそぐわないと、壁画全体をベニヤで覆って以来、そのまま忘れられ、二十三年が経過したらしい。

日劇関係者は十六日、壁画を川島画伯の遺族や弟子たちに見せる一方、保存方法を検討し始めた。」

これがその記事だが、二十三年も忘れたままというのは、ちょっとひどいなと私は思った。

日劇に近い数寄屋橋も既に無く、劇作家菊田一夫の筆で、

「数寄屋橋ここにありき——という碑があるばかり。「数寄屋橋のほとりに日劇ありき」と書き加えるわけにもゆくまいか。

ともあれ私は、有楽町にあった日本劇場の建設と、経営の責任を任されたのである。

これには実に面白い経過があった。

東京には明治の昔、渋沢栄一・益田孝らによって建設された、日本を代表するナショナル・シアターとして「帝国劇場」があった。

そして「今日は三越、明日は帝劇」とPRされ、当時のハイクラスの人々の歓楽の象徴であった。

余談になるが、この三越も、岡田茂という元社長が特別背任と脱税であげられ、社長の座を追われて「三越」の名に終生消えることのない汚点を付けてしまった。

聞くところでは、彼は銀座支店長のころ、銀座は昔から青春の街だという発想から、レコード売場にバンドを連れて来たり、女店員にミニスカートをかせたりして話題をよんだという。また屋上にビヤガーデンを開設したのも彼で、それが大当たり。四十四年二月期の売上高を五十五億円、前年より二〇八パーセントと一挙に二倍にした男だから、それなりの才覚はあったのであろう。

だが岡田は社長になると、気にくわぬ重役は他の支店へ飛ばして、茶坊主的な重役ばかりにし、さらに問屋いじめの「押しつけ商法」で益々評判を落としました。私にいわせれば全く、つまな男である。

なんでも、社長専用エレベーターを一億もかけて作らせたり、自分の家の一部を社費で作ったりしたなど、やりたい放題もいところだ。悪業の数々を見ては、私もかつては事業家だから、なおさらひどい男だと思う。それに加えて「三越の女帝」といわれた岡田の愛人がおり、脱税で共に逮捕されるに至っては、道義地に落ち、帝劇と並んだ天下の三越も全くお粗末になったものである。

一方の帝劇も、現在は皇居のお濠端のビルに間借りしている有様だ。昔の華やかさはない。この帝国劇場は明治四十四年に落成し、当時の新聞に「丸の内三菱ヶ原に、新しく赤と白の建物が出来た……」と報道され、赤い方は警視庁だったという。

帝劇は四年かかって建てられた。設計は横河民輔という人。その頃までの芝居小屋とは全く違った気分を出そうとした。全体にルネッサンス風の洋式デザインを採用したから、かなりハイカラな試みであった。

さらに華麗なプロセニアムの数々の彫刻や、客席の上の天井に和田英作の筆によって描かれた大きな油絵「天女の図」などは、当時の人々をあっと驚かし、ハイカラ好みの人々の度肝をぬいたという歴史がある。外見だけでなく、劇場の運営は渋沢栄一や益田孝ら財界人の出資とあって株式会社組織であり、興行も従来の芝居とは違う方法を目指して、外国の音楽家や歌劇団を招き演奏興行も行った。いま思えば大きな功績を演劇界に残したのである。

その後、関東大震災で焼失し、再建後は昭和五年松竹に合併された。その帝劇も近代化の波をかぶり、スケールも次第に小さくなって、昔の大帝劇の貫禄はなく、もう旧式だという評判がたったのであった。

2 日劇の再建

大正から昭和に移ったその初期に、貴族院の中で政治家らしくもなく、「帝劇より近代的で、もっとでかい劇場を作ろうじゃないか」

という声がだれからともなく起こった。当時の政治家は「文化的」な面もあったわけだ。

大川社長はその頃、貴族院に勅選され、交友倶楽部に属していた。戦前の貴族院は、政界における発言力が強かった。院内の団体として公・侯爵による「火曜会」があったが、人数が少なくして俗に貧乏華族といわれた。世襲財産もない子爵らは人数の多い「尚友会」。伯爵組は大名出身の連中で裕福だったが人数が少ないので、子爵組を買収して院内に「研究会」を作り、一番格の低い男爵組は成金貴族・勲功華族を集めた「公正会」を作って、研究会に対決の姿勢を示していた。

これら華族組のほかに、政友会の勅選議員団、多額納税議員で「交友倶楽部」を、憲政会系で「同成会」を組織していた。つまりグループごとにまとまっていたといってもよい。そして、

利権や議員になるための選挙策動に明け暮れる者もいて、昔も今も政治家の根性に変わるところがない。しかし、貴族院の華族の中には、子供のように純真でいて、大きいことの好きな連中も大勢いた。

そこで、滝脇という子爵が中心になって、新しい劇場を企画することになった。

「大川君は金持ちで、しかもなかなかの芸人と聞く。ことに帝劇建設の渋沢子爵の甥である。ひとつ大川社長をかつぎだして創立委員長に据え、政界および実業家のトップクラスを網羅して、新劇場発起人にしようじゃないか」

ここでまた大川社長が担ぎ出されたのである。

新劇場は、スケールで東洋一、アメリカやその他の国を含め、世界で十二番目であった。

ところが、工事に着工して土地を掘り、地中からは長い長い鉄骨がまるで竹藪のように林立しはじめた頃だった。政府の緊縮政策、金解禁に加えて、世界大恐慌が襲って来た。日本経済は大不況となり、全産業が大混乱に陥るといふ騒ぎとなる。

発起人の人々はいずれも大企業責任者であり、自分の足元に火がついたのだから、劇場建設などというのんきな仕事は吹き飛んだ。当時の銀行では劇場に融資はしない。ことにパニックのあとであり、当然、資金が一向に集まらない。

ついに建築工事中止の止むなきに至り、建築現場は、ばかでかい廃墟になってしまった。底

には水がたまつた。

「昼間からお化けが出るから近寄るな」

銀ブラ族から敬遠され始めた。さらに酔っぱらいが小便をしようとして真っさかさまに落ち、首の骨を折って死亡するものが二人も出るという有様だった。

さてこうなると、施工者の大林組も大変だった。莫大な工事未収金を背負い、金主を求め東奔西走して次々と工事引受人をさがしたが、なかなか大物は出てこない。

「このままでは、大林組が破産してしまふ」

と、悲鳴をあげる始末であった。当然のことであろう。

ちよつどその頃のことである。

天皇が、お召し列車の窓からこの風景を眺められた。

「あの竹藪のようなものは何か」

と御下問があった。現在と違ってその頃のことだから、貴族院議員の中が大騒ぎとなった。

なにしろ、ことの起こりは貴族院議員から出た話だから、知らないふりをするわけにはいかなかった。

この翌年あたりから財界も不況は底をついて、上昇傾向になってきた。

「なんとか日劇を再建しなければならぬ」

と、話がごく自然にまとまることになった。

大川社長は日劇の相談役に過ぎなかったが、貴族院議員であり、発起当時の創立委員長でもあったので責任を感じていた。

その関係で、大林組は再び大川社長に救援を求めて来た。

先にも述べたように、銀行は劇場に融資しなかったから、結局大川社長個人の財力を当てにしての話であった。当時日劇の社長は、この土地の提供者であった富国生命の金光庸夫社長、後の国務大臣である。

そして、この再建の責任者として表面に出て来たのは、元山下汽船専務で林武平という人。大林組と折衝の結果である日劇再建の契約書案が大川社長に提示され、それが大川合名の私へ回されてきた。

早速内容に目を通すと、大林組の要望事項は、まず現在までの工事未払金をすっかり払えということで、それを呑まなければ、後の工事には責任を持たないといわんばかりのものだ。

「これはおかしい。林さんは何を考えているのだろう。これでは大林組の代弁者ではないか」
たしかに大林組も大変だろう。また林専務にとってはこれが一番安易な道である。しかし、大川社長は創立委員長ではあったが、日劇の社長でも取締役でもなく、一相談役に過ぎないで、この工事については何の相談も受けていなかった。

大林組はこの時まで、日活の藤田社長や、北海道の板谷宮吉などいろいろな財界人と関係していたし、また不況時代の損害もあったであろう。しかも、大川社長が陛下の御下問に対する貴族院議員としての責任感からの再建引受けであることは知っているはずだ。この契約書案はどうも奇妙だと私は思った。

「下世話でいえば、芸者が、今度面倒をみようという新しい旦那に、前の旦那の当時の借金まで全部背負ってくれ、とねだるようなものではないか」

甚だ虫がよすぎる。

また、大川合名としても、自社の事業がやっと死線を越えたばかりで、財政的にはまだなかなか容易なことではない。大川社長は、創立委員長に担ぎ出されたという、いわば過去の責任を考えて、再建を引き受けたまでのことであった。

私は、間に立った林専務には気の毒と思ったが、「お家の大事」と思って、この再建案には反対し、新しく私の意見を打ち出すことにした。

まず、建設については、出来上がる分だけはどうしどし支払いをすること。こうして、劇場が全部出来上がった後、建物を確かめ、立派に大川合名の誇りになると分かれば、その時点で初めて棚上げした借金も支払うという考え方であった。このように支払い方法を逆にしなければ、大川合名の現状では一切協力出来ない。

こういう私の意見書を付けて、大川社長に再建契約書案を返した。

「うん、うん、なるほど。池田、お前の考え方が正しいよ。これでよいから、大林組とがんで交渉してくれていいぞ」

「それでは、その線で進めてみますから、社長も承知なさって下さい」

私は大川社長の賛成を得たので、早速大林組にこの案の書類を送ったのである。それからが大変だった。大林組は金がなくて弱っているところへ、この条件だから大いに憤慨して、

「池田をなぐる」——という物騒な一幕もあったという噂を、後で聞いた。

3 契約成立

大林組は怒ったが、日劇役員会では池田案が妥当だとして、この線で行こう、についてはこの際大川系から経理担当常務として、池田を推薦して欲しいというのだった。

「今度は起死回生の仕事、後戻りは出来ないんだから、ここはひとつ若い池田君にやってもらいたい」

私にお鉢が回って来た口上は、そのようなものであった。

昭和の御代になってまだ数年しか過ぎていなかった。その頃はまだ劇場経営は「興行師」といわれ、役者や俳優は「河原乞食」といわれて、まともな職業と思われていなかった時代であ

る。そこで、こんな世界に池田を入れたら、とんだ道楽者にしてしまうのではないかと心配した向きもあったそうだ。

私自身にしても、大川合名の仕事も大変だし、日劇再建案に対する私の意見も、過大評価されたもののは合名の財政状態から思い付いた大義名分に過ぎなかったのである。

大川社長は、どういう考えがあったのか分らないが、私に決断を下した。

「よし、それでは池田、お前ひとつやってみる。お前が常務だ」

至上命令が下ったのである。私は心中ひそかに考えた。

「社長の責任はあくまでも殿堂建設にあるはずだ。それ迄ならなんとかなるだろう」

私は常務を引き受けたのである。

大林組は、この案では「倒産だ」と相変らず騒いでいたが、ここでこの件を解決しなければ、一歩も前進しない。

そこで大林組は直接交渉の責任者として、上草庶務課長を当たらせた。上草課長は大林組東京支店長植村常務の代理というわけだった。

その上草課長は、大林組でも豪傑と定評のある人で、年齢四十歳を越していると私は見た。私と彼は初めからぶつかり合った。上草課長の言い分は、例の林専務の提示した案を楯にとつて全然譲歩しないのだ。

しかし、私はここでも大川社長の人柄と、今日までの業績、それから法華經の信念を語る以外に何も武器はなかった。

「大林組も資金で苦しいでしょう。しかし大川合名もやっと死線を越えたばかりです。死力をつくした直後なのです。考えてもみて下さい。これはだれのせいでもないでしょう。日本の運命ですよ。今は自分たちだけの利益を追求している場合じゃない、そう思いませんか。お互いに背水の陣で協力して、この国家的使命を完遂しましょう。」

大川社長もそのつもりで引き受けたのです。どうですか、これも前世の因縁だと思って、大林さんも引き受けてくれませんか」

こういって相手の返事を待った。

さすが大林組の剛の者。相手に対して一步も引かない大建設業者の庶務課長であるから、「池田さん、よく分かりました。帰って早速相談して出直してきます」

やっと立ち上がった。私に手を差し出していった。がっちりとした幅のある掌で、私と握手すると帰って行った。その時、その顔には強い決意が現れているのを私は見たのだ。

数日後だった。上草課長はやって来て、挨拶もそこそこに口を開いた。

「池田さん、あなたの案で結構です。仕事をやらせて下さい。その代わりといっってはなんだから、新しい工事の分は手形がいいですから、前渡し金的に払って下さい」

「そうですか、呑んでくれたんですね」

快諾の返事に私も嬉しかった。こうすんなりいくとは思っていなかったからである。

「池田さん、実をいうとですね、私は先日のあなたの話にすっかり共鳴したんですよ。大川さんの国家的な犠牲の精神に感銘しました。背に腹はかえられぬとはいえ、大林組の条件は少し恥知らずでしたよ。私も恥ずかしくなって社に帰ってから、支店長や幹部を説得したんです。本店に気がねしてさっぱり決断が出来ないんです。

私も業を煮やして、独断で辞表をふところにして大阪の本社に行つて来ました。本社の白井専務に会つて一部始終を報告して、私の決意を話したんです。そしたら分かつてくれましたね。よく分かった。わしが引き受けるからといって、励ましてくれました」

「そうですね、それはよかったです、本当によかったです。私もこれで安心です。手形の方はちゃんとします。どうかよろしくお願いしますよ」

ということ一件落着。肩の荷がいっぺんにおりた気持ちであった。

この大阪の白井専務という人は、大林組の若い二代目当主を擁し、大林組を支えた譜代重臣四天王の一人だった。『大林組の大久保彦左衛門』とうたわれ、上草課長が最も信頼している親分であったようだ。

上草課長については、もうひとつエピソードがある。——初対面以来、私たち二人は『刎頭かぶつけ』

の友”のようになってしまったのだが……。

彼は自ら「桐野利秋」——明治維新の勤皇の士、中村半次郎の後年の名、明治十年の西南戦争で西郷隆盛と共に城山で自刃した熱血漢——をもって任ずる快男児。一介のサラリーマンとは違い、私がこの契約の発案者として合名に対するように、彼もまたこの案の決断者として大林組に責任を持った。一つには大川社長の名譽のため、他方、大林組再生のため、どうあってもこの日劇を完成させねばならない。共通の運命にあったことを知ったからかもしれない。

その頃であった。大川社長は湯河原温泉の天野屋旅館で病氣静養中であつたが、上草課長と二人で日劇再建の新契約書の調印を願ひに行つた。

長く待たされ、ついに夜中になつてしまつたが、どうしたわけか一向に契約書が二階から降りて来ない。あまり待たされるので、上草課長は口には出さないが、いささか立腹の様子だつた。そこへ夜食のつもりなのか、女中が山盛りのゆで卵を運んで来た。

そのゆで卵を見るや上草課長はいかにもやけ気味に、矢庭に卵をつかんだ。むいては食べ、むいては食べ、まるで敵にでも出会つたようで、私には少々こっけいに見えた。

私も空腹だったので、つられて二個ぐらい食べた。

卵を全部食べ終わって少しげんがりしていると、やがて女中が社長さんがお呼びですといつて来た。私は胸をなでながら鏡を見ると顔が真っ赤であつた。仕方なく赤い顔で、二階の部屋

へ上がって行った。

大川社長は寢床に座ったままだったが、元氣な声で、

「二人ともご苦労さん。……しっぴかりやってくれよ」

といつものように、やさしくいつてくれた。

契約書を受け取り、すっかり恐縮して部屋を引き上げてから、冷汗を拭いていた。社長に返事をしようとしても、ゲップが出そうだし、あんなに恥ずかしく苦しい思いをしたのは生まれて始めてだった。それにしても、客を大切にされる大川社長が、あの夜はどうしてあんなに待たせたのか。多分、睡眠中であつたのかも知れない。

その翌年、上草課長が黄疸にかかつて寝ていると聞いた。早速見舞いに飛んで行った。

「わしは湯河原の時の罰が当たつたようだよ。ゆで卵の食い過ぎだ」

布団から顔だけ出して苦笑していた。

さて、いろいろ面倒な経過はあつたが、設計界の大家、渡辺仁の指揮のもと、大林組も本店の白井専務のお声がかりとあつて、大張り切りに働いてくれた。

五年の歳月を雨風にさらされていた土地に、アメリカのブロードウエーにもないという円筒型の建物が、東洋一の地上五階、地下一階の大劇場が、数寄屋橋近くに燦然と竣工した。

銀ブラの人々の目を驚かせ、そのほとんどが佇んで見上げていた。——私は得意だった。

「すごい劇場が出来たもんだな。円筒というのが珍しくていいな」

ちょっと離れているが、日比谷までわざわざ見物にやってくる人々も多かった。それほど、当時としては珍しい、新しい名所となった。

こうして、昭和七年の年末に、大々的なオーブンとなったのである。

翌八年、ドイツではヒトラー政権が誕生。日本は国際連盟総会に松岡洋右全権を派遣、連盟を脱退、日本は国際外交の舞台からとび降りて、この日以来、外務省は「陸軍省外務局」になり下がってしまう。やがて日独伊三国同盟となって、国は破滅の道を迎えることになるのだ。

また、年末には、皇太子御誕生で日本中はめでたい奉祝となる。しかし七年に、上海事変勃発以来中国大陸の戦線は拡大の一途を辿り、次第に軍国主義日本の色は濃くなっていく。暗い時代の到来であった。別項でも述べるが、この頃の日本はとにかく中国大陸を目指し、軍隊も商社も進出侵攻の時代であり、景気はやや上昇気味といっても、いまひとつ不況風はなおっていない。

私にはどうしたとか、陸軍からも海軍からも召集令状が来なかった。

「どうも出征してゆく友達に、なんだか申しわけないようです」

大川社長に私は時折そういった。

「兵隊にいくばかりがご奉公というもんじゃないさ。お前は充分、お国に役立っているさ。」

くよくよしないで胸を張って、東洋一の劇場に専念しておればよいのさ」
そのように社長に慰められて、私も気分が晴れるのだった。

4 劇場興行まで任される

日劇再建案が出始めて、私が経理担当常務に決まった時、劇場が完成すれば「お役御免」と思っていた。

次第に工事が進行し、少しずつ足場も取れ、壮麗な姿が徐々に出現するにつけ、日劇役員会の重役たちの間からいろいろ意見が出てきた。

「五年間も苦勞してやっと完成した、この日本一、いや東洋一の劇場を、むざむざと興行師に貸して、彼らの私利私欲に任せてしまうのはどうかなあ。第一、建設趣旨に合うのかどうか、それも問題じゃないか」

「少なくとも、日劇オープンだけでも、われわれ自身でやるべきだ」と主張する向きが多くなってきた。

そうはいうものの普通の建物と違って、劇場のオープンは単なる建物の披露ではなく、即営業開始につながるのだ。

しかも、このような興行にとっては、最初のオープンが極めて重要とされた。オープンの時

期は、新年を控えた年末が最適とされているというのだ。

幸いなことに、建設完成は昭和七年の年末だった。

「年末が決定的ではあるが、肝心の興行は一体、だれがやるのか」

そういうことが大問題として起こってきた。

それというのも、興行はいわゆる水商売とも水ものともいわれていて、一般の生産企業のように原価主義では、やれない。

あくまでも大衆の恣意的選択である。その経営は、体験と「勘」に頼る冒險的な、むしろ「賭博」的な要素をもつ企業とされている。だから日本工業化時代の企業家からは、輕蔑視されてきた。

その賭博的といわれる実例はいくらでもあった。

昭和七年だけを見ても、一月に元日活社長の中山貞雄が日本映画株式会社を設立、麻生喬監督で『浅草三重奏』他一作を製作し、三月八日に封切ったが、三月十日にはもう資金難のため、百十数人に手当を支給して解散してしまった。

また二月には、不二映画が解散して、当時の映画スター岡田時彦・高田稔・鈴木伝明、それに阿部豊・鈴木重吉両監督らは新興キネマ・日活などにそれぞれ移っていった。

さらに六月には東京・大阪松竹歌劇団が、待遇問題のこじれからストライキに突入し、一か

月も続いた。この時のリーダーは、ターキーこと水の江滝子で「輝ける委員長」と騒がれたが、まだ十九歳の娘であった。話にもならぬ低賃金と、劇団内の封建的な人間関係に、少女らが立ち上がったのだ。

昭和初年、宝塚の歌劇団の初任給が十五円だったので、松竹も同じくらいと見ていいのではないか。十五円では化粧代程度のお金だ。松竹としては、女優ではなく歌劇学校の生徒として舞台に出演させ、学科の「実習」だということ、うまく使って儲けていたわけだ。まるで芸者などの酷使と同じであった。

ストが始まると、会社側は父兄をねらって切り崩しをはじめ、これが成功して「お詫びガール」が続出した。そして結局、争議はややむやのうちに終わり、少女歌劇部長は左遷され、ターキー以下十五人の「頑張りガール」は謹慎を命じられた。しかしターキーなき「SKD」（松竹歌劇団の略称）は不人気で、会社も仕方なくターキーを復帰させたという。思えば、昔と今の芸能界とは大変な違いである。

当時、日本では日活・松竹・新興という三芸能社が大手といわれていた。上半期の利益金を見ると、松竹が十九万円で他を圧倒しており、日活・新興はせいぜい一万五、六千円であったという。またその頃東宝は映画製作をせず、P・C・L映画製作というのがやっと昭和八年十二月に出来たわけだ。

——以上のように、先の見通しもなく設立しては潰れたり、少女達のストライキがあったりという当時の興行界の状況を見て、経営の鬼才といわれた小林一三社長は、興行の合理化・近代化を標榜していたという。

さて、日劇だが、株主・役員はいずれも政財界では一流の人物で、大劇場建設には意欲があったが、その経営にかけては全くの素人だし、また興味もないから、だれも引き受け手が無い。「まあ、経営の方も引き続いて、池田君に当たってもらおうじゃないか」

私にいわよせが回って来た。私もまるで自信はない。頼るのは大川社長、それに仏の加護だけであった。

幸いに興行会社に頼ることなく、私は企画部の陣容を整えることが出来た。「どろ縄」式に映画演劇の勉強もしなければならず、金勘定もしなければならぬのだった。

日本映画は、無声映画に代わってやっと発声映画トキキが出始めたのが昭和六年。「マダムと女房」という作品だった。私も見たことがあるが、現在の映画やテレビドラマに比べれば、なんとも幼稚で、映画技術もすべてお粗末なものであった。

一方、アメリカ映画界は日本映画よりぐんと前進していた。有名な『モロッコ』が来た時、私は見に出かけたものだった。セリフを読めるようにした日本語のスーパーインポーズが採用されていた。もう弁士も楽隊もいらぬ時代であった。私は『モロッコ』のシーンを現在でも

はつきり覚えている。それほど、この映画には感心させられたものである。

昭和七年八月、東京宝塚劇場創立総会が開催され、小林一三社長が宝塚歌劇東京公演を目標としたいと発言した。

浅草で、「笑の王国」というコメディ劇団が発足したのもこの年。トーキー映画出現で映画館に見切りをつけた活弁の大スター徳川夢声・大辻司郎に、俳優古川緑波を加えた「カーニバル派」、それに小杉勇・三益愛子・清川虹子らによる一大混成部隊である。いわゆるアチャラカ芝居で人気を集め、五か月のロングランという、日本興行界に特筆される成果を収めた。

——そんな芸能史を私は調べてはみたものの、私の性格としてこの奇怪な「水商売」を理論的に説明せずには、どうしても、一步も前進できないのだった。

われながら、困った性格だと思いつつながら、哲学的に社会的に様々究明していたが、ある日突然、意外な人からこの秘密を解くヒントを与えられて驚喜し、初めてこの「水商売」に取り組む自信を持つことができたのである。

5 女将からヒントを得る

私らが日劇再建の仕事で、下宿代わりに住み込んだ東京・新橋の待合があった。五十歳前後、芸者あがりのその女将は根っからの花柳界育ち。その女将が私に教えた。

「芸者さんのことを私たちは玉ぎよくといふのです。その玉は面白いもので、たとえばここに千円もするような、素晴らしい玉がいますとしますね。そこへもう一人、五百円で買える玉が来た。五百円で買える玉は、安く買ったんだから儲かると思うでしょうがそれは間違いないんです。

五百円の玉に千円の仕度をしてやって、千五百円かかったから、千五百円で必ず売れるかというところはいかないんです。売れないのは、買値が五百円だからですよ。

ところが千円の玉に千円の仕度をする。するとこれが倍以上になって返って来る。だから玉の良いものと仕度金を惜しんではいけないといわれるんです。

水商売とは池田さん、そういうもんですよ。製造業者なら、出来るだけ原価を安くしようと考えて、同じ玉なら安い五百円の玉を買って六百円で売れば、百円儲かると考えるでしょう。そのところが違うんですよ。

水商売というのはそうじゃないんです。五百円の玉は、結局五百円の玉であって、いくら金をかけても儲からないものなんです。原価千円の玉は、高いなと思って、もう五百円かけてみなさい。千五百円ではなく二千円の値段になるものです。

思い切って千円をかけるんです。それを二千円の玉に仕上げると、今度は五千円になって返ってくるのだってあります。これが池田さん、水商売なんですよ。」

女将の「長講義」は、私には大変な驚喜となったのだ。

この話から私なりの解釈をした。企業にも「性別」があり、水商売とは女性的な企業である。従って、女性を研究すれば、この商売の原理は解明出来ると気が付いたのである。

6 めでたく開場

それにしても当時の工業化は、富国強兵という国の方針に煽られて、男性的な生産に片寄っていた。そして精神的・生活的な慰安や、娯楽の方面、つまり女性的レジャー産業の重要性をまるで評価する余裕がなかった。軍国的非文化国家だった。

アメリカではこのレジャー産業がすこぶる進歩しているのに対し、日本の「貧乏人の子沢山」現象も、所詮は社会におけるレジャー産業の後進性を物語るものであった。

ことに大不況後、国民が精神的慰安を求めている時、私はこうした施設の意味と使命を改めて痛感したのである。

なるほどそういえば今度完成する劇場も、建物からして丸の内オフィス街の四角型のビルと異なり、円形の曲線美と、優雅な外装を例に取ってみても、これこそ東洋一の女性美である。

三歳の幼女が鏡の前でお化粧し、美しい衣装に愛着を感じる——自らを外にディスプレイしようとする本能——これこそ水商売のコツであろうと、こう理解するに及んで猛然と私は闘志が湧いてきた。

まず第一、この劇場をどういう女性に仕立て上げるかでその客層が決定する。

私はそこで考えをめぐらした。

「山の手の女性がよいのか、下町の女性がよいのか。」

日劇は東洋一の劇場だから、たとえてみれば華族令嬢みたいなものではないか。しかし、いたずらに雲の上のものであってもいけない。大衆から恋い慕われる女性でなければ困るのだ」

そこで欲を出して、山の手と下町の両方のニュアンスを出すことにした。

二階前面の観客席は豪華な移動椅子の高級ロビー式。入場料についても、このロビー式は一人七円（現在額で一万四千元）とし、一階と二階の後方、それに三階の大衆席は思い切って、ただの五十銭（千円）とすることを考えてみた。

大阪松竹座に、昭和七年「十銭劇場」が開場した。これは毎朝一時間だけニュースと短編映画を上映したのである。これがニュース劇場の最初であった。

ついで九年、日比谷映画劇場が開場したが、入場料五十銭均一の等級なしという珍しいものであった。

そこで私は、日劇の入場料の見当がついたと思った。後にこの値段はみごとに当たって大変な人気を呼んだ。破天荒の試みとして――。

さて、入場料は決定しても「出し物」がなかなか決定しなかった。なんといっても東洋一の

劇場だから、ちやちなものは絶対出せなかった。

ちょうどその頃だ。何回となく日本に上陸しながらフィルム賃貸料が高価で、どこの映画会社でも欲しいが手が出せないといわれた、チャールズ・チャップリンのアメリカ映画『街の灯』があったのだ。

「これだ、これ以外にはない」

これは高い玉だが、高い玉ほどいいといわれた事も私は考え、この上映を決定した。この『街の灯』に加えて、オープンのアトラクションとしてアメリカのマーカスショーを迎え、豪華番組を組んだ。

封切ったのが七年十二月二十四日のクリスマス・イブであった。街にはジングルベルが鳴り、デパートや商店街は大売出しで賑々しかった。

かねて数寄屋橋畔に優雅に輝いて、物見高い東京っ子の度肝をぬいた噂の日本劇場だったから、開場してみると忽ち満員「札止め」になった。

ところで、開館も目前に迫った頃、アメリカへ注文した映写機が期日より遅れ、肝を冷やしたがどうにか間に合った。私は、どうなるのかと全く毎日毎夜落着かない、睡眠もとれない始末だった。

それだけに、開場して大入りの盛況を見ると、私は心が躍った。早速大川社長へ状況を電話

報告した。社長は答えた。

「そうか、よくやった。いずれわしも見せてもらいに行く」

私は劇場の中を行きつもとどりつ、とても椅子にかけている気分になれなかった。

7 名作『街の灯』

「やりました。常務さん、やりましたよ。大ヒットです。今朝からもう劇場の周囲はずっと行列、長い行列が出来て取り巻いています。列の終わりの方が、どこか分からないほどです」館員が私の事務室へやって来た。

若かった私は、得意満面で彼に向かっていったものだ。

「プロの興行師もはだして逃げ出すだろうよ」

浮浪者が主人公の、庶民を大切にする名優チャップリンらしい映画『街の灯』は、異常な人気だった。入場客が劇場の周りを七周り半も行列し、警官隊が出動して整理に当たったといわれたのは、この時が最初のことであった。

ところが後で分かったことだが、当の名優チャップリンが既にこの年の春頃来日していたのである。新聞に写真や似顔絵入りで紹介されたこともあずかって、庶民のアイドルにされたのかも知れない。

チャップリンとその実兄とは、日本政府の招待客として、まずはじめに神戸で大歓迎を受け、特別列車で東京へ向かった。東京駅ではなんと四万人もの群集に取り囲まれ、逃げるように自動車に乗り込んだという。

車がホテルに向かう途中、皇居の前で降ろされてお辞儀をするように頼まれた。彼は理由も分からぬまま、その注文通りにしたという。無理もないことだろう。

翌日、犬養首相の長男で作家の犬養健の招待で、両国の相撲見物をしていると、世話係が犬養の所へやって来て何か耳打ちをした。

犬養はチャップリン一行に向かつて、

「すぐ戻ります」——といって出て行ったが、取組の終わる頃戻って来た。

犬養は顔面蒼白、やや自制心を失ったように、

「たった今、父が暗殺されたんです」

そう重大なことを告げた。そのためチャップリンは、公式レセプションとして犬養首相との会見は出来なくなった。

皇居での話も国技館での話も、チャップリンの自叙伝を読んで知ったことだが、私には大変興味深かった。

暗殺とは昭和七年の五・一五事件のことである。逮捕された古賀海軍中尉は、後の法廷で意

外にも、チャップリンも殺す計画があったと語り、新聞が大きく報じていた。

当時の判事と古賀の一问一答が残されている。

判事「チャップリンを殺すことに、どのような意味があったのか」

古賀「チャップリンは合衆国の有名人であり、資本家どものお気に入りである。われわれは彼を殺すことによって、アメリカとの戦争を引き起こせると信じた」

こういつているが、チャップリンは当時、アメリカに帰化していながら、常に「自分はイギリス人だ」と誇示するように語っていたという。

後年チャップリンは立派な『チャップリン自伝』を著したが、その中で在日中の一日、犬養といっしょに首相暗殺後の首相邸へ行ったことが書いてある。新聞記者にコメントを求められて、「事件は家族にとっても、国家にとっても大きな悲劇である」

そうとしかいようがなかったと述べ、さらにこうも述べた。

「日本の思い出がすべて怪事件と、不快ばかりだったわけではない。むしろ全体としては、非常に楽しかった。歌舞伎は予想以上に面白かった」

歌舞伎の立ち回り、心中ものの有様を詳細に述べているのは、さすがに名優の貫禄である。

「日本が何時まで西欧文明のビールスに感染しないでいられるかは問題だ。固有の文化に特徴づけられた生活の中の、いくつかの単純、素朴な瞬間——月見、花見、茶席の瞑想など——

に対する日本人の好みも、やがては西欧的企業のスモッグにおかされて、失われてゆくことは必定であろう」

こうも述べているのは、正に卓見であろう。そして失業者や、貧富の差を見た事も語り、「それにしても不況は深刻をきわめていた」——と結んで、日本の見聞を終わっている。

さて、日劇の盛況は大体半年位続いた。映画のほか、舞台での企画はすべて私が大川社長と打ち合わせた上で、その英断によったことはいうまでもない。

この盛況の最中、陸軍の映画班から皇国精神高揚のため、日本の代表劇場として軍の映画を一本上映するように指示してきた。

満州事変に端を発し、日中戦争が続行されている時節なので、舞台正面に国旗を掲揚し、開演の前には必ず観客に起立を願って国歌君が代を斉唱、さらに「天皇陛下万歳」の三唱を行ってから開幕する順序だった。そこで「万歳劇場」と異名をとってしまってもいた。

こうして約半年ほど経った。ここで素人の悲しさ、思わぬ障害に突き当たった。

当然のことだがいつまでも『街の灯』に頼ってははいられない。ところが、それに続く名作の名にふさわしい映画がない事だった。

その頃のアメリカの映画会社はユダヤ系が多くて、みごとに需要研究がなされていた。販売計画は万全でよく社内統制もとれていて、製作は何年も前から、自国向け・外国向け・更に日

本向け、又その時期向けといったスケジュールが整然と決定していた。

そこで日本の興行界は、外国向け・日本向け・時期向けの中から選択するという決まりであった。

ことに益・暮れにはどんな駄作でも客が入ることを見越して、最初から「安物」しか製作していない。正に合理的な商法であった。

『街の灯』の大ヒットの後だけに、東洋一の大劇場がこういった安物で、街の映画館を相手に競争しなければならぬのは、誠につらいことであった。

ことに日劇はセカンドネット、つまり二番・三番と上映するチェーン館を持たない「単館」であるため、ここの封切だけで勝負しなければならない弱身があった。影響は甚大、竜巻のごとき増収から、ナイヤガラ瀑布のごとき減収ということになってしまった。

8 小林一三に肩代わり

このような状態になると、様々な障害が重なり、魔がさしてくるものだ。

また他の映画館からは圧力がかかってくるのである。

さらに順調な時は静かだった出資側の「奥」のほうからも、色々と苦情やら素人意見が飛び出して、経営は非常に難航した。

ある時は、日活と合併の話もあったが、条件が合わず不調に終わった。

そこへ、かねて日劇に注目していた小林一三阪急会長が乗り出してきた。

小林一三は、強運の人ではあった。だが運が良いだけでは、一介の銀行マンから会社社長、
商工大臣というコースを歩けるわけではないであろう。小林一三が数々の名案を出して来た過程
には、それに倍する努力や研究があったはずだ。

宝塚歌劇の生みの親といわれたが、その宝塚も、大正二年の頃は雲井浪子ほか十五人の少女
という貧弱なものだった。名前も唱歌劇といって、温泉場の余興をやっていたのだが、お客は
大阪や神戸から電車賃を払って見物に来てくれるのだ。

遊園地の入口で入園料を支払い、少女歌劇で又入場料を支払うという、電車賃と合わせて三
重の仕組みになっていた。決して損どころか、大儲けになるような考え方をした。

ほかに食料品を中心にしたターミナル百貨店の創設や、沿線住宅地の開発によって乗客を確
保し、また大衆向けのカレーライス、八十円均一ストア等々のアイデアに、存分に頭を使い腕
を振るった人であった。

私が企画部長とねじり鉢巻で、無い知恵をふりしぼっていた頃、小林一三が、東京・滝野川
の大川社長邸に突然姿を現した。もちろん後で聞いた話である。

その時の小林は宝塚の社長であり、阪急電鉄の会長であり、その他諸会社の役員であった。

「大川さん、私の話を聞いて下さい。興行というものはね、一種特別の仕事です。素人が手を出すと怪我をする。松竹さんも日活さんも、その道のベテランが経営しているからうまく運営できるんです。」

「この世界ばかりは、一般のビジネスマンが考えるようなものではないから、お止めなさい。日劇の株は全部、私が払い込み額で引き受けましょう。どうですか」

「話がよく分かりました。実をいいますとね、私もちょっと困っていて、この先、どうしようかと悩んでたんですよ。よろしい君に一切任せましょう」

大川社長はもともと興行をやるつもりはなかった。貴族院の華族さんらに担ぎ出され、天下のため帝劇よりもっと素晴らしい国際的な劇場を建てて、日本のメンツを大いに誇ろうという趣旨で、同志を糾合したのである。従って、日劇が完成してしまえば、その目的は達成されたわけである。

それにまた、企業家として株主に損をさせるといふのは、一番つらいことであった。

その株を払い込み額で全額引き受けてくれるというのだから「渡りに舟」、大川社長はこれで創立委員長としての責任が果たせると考えて、役員会も何もなく全く独断で決定してしまつた。

株主らも、仕事は始まつたばかりで株価もまだ不安定であつたから、これで救われたことと

なり、文句など出るわけがない。

このような両雄の接触を私は全然知らなかったから、悪あがきをしていたことになる。

大川・小林会談から一週間ばかり過ぎた頃、大川社長からこっそり私の事務室へ呼び出しがあった。

「社長に何か名案でも湧いたのだろうか」

はかない望みを持ち、社長室に入り、机の前に立った。

「おいっ、池田、お前には話をしなくて悪かったが、小林一三が日劇の全株を払い込み額で肩代りし、その経営を引き受けるといつてきたんだ。これで株主に一銭の損もさせないで済むし、おれのメンツも一応たつので譲ることにしたよ。」

お前も色々と頑張つて、途中で投げ出すのはいやかも知れないが、まあここは我慢してくれ。それにいつまでも、お前にこういう仕事をやらせておく訳にはいかないしな」

私は面くらったが、しかしすぐさっぱりした顔になって、

「そうですねか社長、それはよかったです。実は『街の灯』の後の『出し物』が無くて弱ってたんです。これでほっとしました」

私は安心し、同時に少々拍子抜けして引き下がった。

これでやっと、肌にあわなかつた興行の仕事から解放されたわけであった。

小林一三は、興行界のインテリとして、この世界の品位向上や、興行経営の合理化を念願としていた第一人者だった。日劇についても、発起当初から統計的に調査研究していた事なども、大川社長から後日聞かされた。

そして、素人経営の行き詰るチャンスをねらっていたというのだ。まさに小林流の「信長、桶狭間電撃作戦」が功を奏したのも、いわば当然のことであった。

さすが大川社長もこの「女性産業」には手を焼き、私のにわか仕込みの「水商売学」も神通力を失った。だが、それがその後のためにもよかった。

東宝になった日劇は、「日劇ダンシングチーム」の誕生となった。

小林一三の敏腕とはいえ、戦時中から敗戦にかけての半世紀は、恐らく幾多の苦難の道を辿ったことであろう。

昭和五十六年二月。「さようなら日劇フェスティバル・ああ栄光の半世紀」を最後の公演として、「日本劇場」はその姿を消すことになってしまった。

思えば、若い日の私の思い出が、短日月だったが、日劇の中にはいっぱい詰まっていたのである。

第五章

大川平三郎の私生活

衣食住と趣味

私が大川社長の日常生活に触れたのは、大正十五年からであったから、社長はもう六十六、七歳で、すでに功成り名遂げた頃であった。

この年で大正は終わり昭和となるのだが、共同印刷三千人のストライキや、日本楽器従業員千二百人のストライキなど、深刻な事件もあった。一方、明るいニュースでは、第二回国際女子競技大会がスウェーデンで行われ、人見絹枝が走幅跳びで優勝して日本中が大はしゃぎだった。改造社は『現代日本文学全集』を一冊一円で予約募集し、予約者二十三万人を得た。これがいわゆる「円本」のはじまりとなった。

大川社長の生活は、そうした地位になってもほとんど昔と変わらない。つまり質素そのものであった。しかし俗に世間というケチとは違って、ひとつの確固たる信念があつてのことだ。自分が子供の頃見た母の苦労が、一生涯脳裏から離れず、その母の恩に対する感謝の気持ちから、物を粗末にしない、また贅沢を戒める生活となったのだと、私には思われる。

先ず衣・食・住の「衣」の關係から述べると、十二年間に洋服を新調したのを私は見た記憶がない。また逝去後の形見分けのラクダのシャツと股引は、最後まで着古されたもので、その

肘や膝はすけてみえるほど薄くなっていた。

もちろん私にとっては、それがかえって社長の温もりと同時に、そこに一生を貫いた宗教的感謝の精神を感じるような気がした。

そんななかで不思議なことがひとつあった。

それは装身具を好まないはずの人が、立派な金時計を持っていたことだった。しかもそれは金鎖がついていて、チョッキのボタン穴から下げていたのだ。昔、二十二型の懐中時計といって、当時、金持ちの豪華さを誇示する装身具の代表的なものであった。

ところがある時、それを卓上にとり出し、私に向かってこういった。

「おいどうだ。わしの持っているこの時計が、メッキだということをだれも気がつくまいな。こういうものはね、持つ人によって、いろいろ変わって見えるもんだよ。わしが下げておれば、だれでも本物と思うだろう。実はこの時計はね、わしが最初アメリカに行った時、その街で日本人ばかりの集まりがあつて、それに出席した。するとその時、服部という男がいて、お前は時計を持っていないようだねといつて、わしにこれを譲ってくれたんだ。それから、もう五十年近くになるが、その時の好意を忘れずに、いまでもこうして愛用しているんだ」

社長はさらに言葉をついでいった。

「その贈り主の子孫が現在、日本の時計王として繁栄を続けているので、その子孫に創立者

の記念として贈ろうと思う。その添状を書こうと思っているんだ」

これは、成功してもいつも感謝の念を忘れず、物を粗末にしないという、よい一例だと思うのである。

社長は常に懷中に鼻紙用のちり紙を持っていた。ある時、ふとそれを使うのを見てみると、あの薄い「京花」をいかにも大切そうに、そして丁寧一枚はがして、それを二つに折って使った。紙の中に埋まって暮しているような製紙王が、こんな薄い一枚の紙にも、なんでこんなに気を遣うのかと不思議に思ったが、考えてみれば、毎夜工場から送られる見本紙の検査に、あれだけの努力をそそぐ社長からみれば、この薄紙一枚が社長の命だったのだ。他人には分からない気持ちであろう。

子供のころ、農民であった親達から、

「一粒の米でも、粗末にしたら目がつぶれるぞ」

と戒められた。かつて社長は私に向かつて、

「おれは一銭を借しむが、百銭は借しまぬ」

といった。今「一銭を笑うものは一銭に泣く」という諺を思い出している。

いま思うと、社長の持物の中には財布やがまぐちを見たことがなかった。従って、自分で金を出し入れしたのを見たこともない。恐らく自分では金を持たなかったのかも知れない。関係

会社から貰う手当など、十円・二十円の小切手も、無造作に洋服のポケットから出して、全部を私に渡す。

公私を区別して取り扱っているが、一向に私的な支出の命令がない。社長は個人分を忘れてしまっているようだった。日常生活に、十年一日の如く合理的なパターンがきちんとあって、その中で自分で金を払うような私生活は全然ないわけだ。土曜の半休も日曜もない。

考えてみると、自分が仕事から解放されて、私的な慰労の時間や行動を持つというような生活がないのだ。

つまり、今日的な意味の、仕事は労働、労働は苦痛、苦痛は疲労、疲労回復には娯楽・慰安・レジャー、それにはポケットマネーが必要という、近代的な、西歐式の相対的・二元論的な方程式は微塵もなかった。仕事が芸術であり、喜びであり、慰安であるという、これが東洋的・日本的な自然の生活態度であったようだ。

考えてみれば、仕事という字は、他に仕えること、働くという言葉は、はたを楽にするということで、これは自分の欲のためにすることではない。よい仕事をし、よく働くことが、すなわち、他に喜んでもらえる生甲斐であることを教えた東洋の思想だということだろう。

また「食」では、酒は奈良漬でも酔うほどの下戸であったが、食べ物で一番好きだったのは、すきやきだったようだ。

「さあ、みんな食べる、食べる」

といいながら、煮えるそばから欠食児童のように、箸を置かずに食べるのだ。

伴食のある幹部社員が、

「こちらが箸をつける余地がないんだ。困ったよ」

と大笑いしていたが、まるで少年時代を思わせる姿だ。特に食い道楽とか、好き嫌いはなかったようである。それでいて「八百善」などの割烹料理店を大変ひいきにしていた。

さて、「住」の問題だが、社長は一生涯、別荘というものを持たなかった。晩年の病氣の時も湯河原の「天野屋」という旅館で、療養していた。

ある時、会社から帰って、自宅の玄関の柱を叩きながら、「おい池田、これは柂目の柱だよ。だがこれが張りの柂目だということが分かるか。中国の言葉に『堂閣に恥じず』という言葉がある。どんな『大廈高樓』でも、そこに住む人間が出来ていなければ、その人間はかえって小さく見える。どんなボロな草庵であっても、そこに偉大な名僧が住まっておれば、その家は宇宙大に大きく見える。だから人間は堂閣に恥じないような人物にならねばならないという意味だ。

おれが、こんな張りものの柱の家に住んでいるとは、だれも思わないだろう。おれは堂閣に恥じないんだよ。ワッハハハ……」

と笑ったことがある。

その外、「娯楽・趣味」の方面では、そのころ、浅野総一郎・根津嘉一郎など財界人の友人には、書画・骨董・彫刻などのコレクションや、お茶その他の趣味の人も多かったが、社長は、一切それらに凝ることはなかった。

かといって、株や土地の投機で、金儲けしようとする野心も持っていなかった。ただただ、自分の引き受けた企業の繁栄、ひいては日本の産業の振興を考へることが趣味のようであった。その証拠に、一人一業主義者の多かった仲間のなかで、七十以上にもわたる多種多様の事業に関与したのを見ても明らかである。

しかし、この企業の上に財閥的野心を見せたものではなく、いずれも国家的な、また依頼者への親切心からの関係であるところに、社長の人柄が偲ばれるのである。

いわば仕事が一種の趣味であり、その面では天才的であったようで、むずかしい問題となれば、いよいよファイトを燃やし、それを解決することが無上の喜びであった。学問的にも経験的にも磨きあげた自信があり、頭の中には、いわゆる「不可能の文字」はなく、何事も快刀乱麻、一種の悟りの境地であったのかも知れない。

このような終始緊張の生活の中で、唯一の息抜きが「歌沢」であり、また左手書きの文字と戯画であった。

歌沢は、正式には歌沢節という端唄の一つで、安政二年に笹本金平こと笹丸(歌沢大和太掾)寅右衛門、柴田金吉などの創ったものだという。入社早々、社長にその歌沢があり、すでに名人芸だと聞かされた。

ふだんあまり冗談もいわず、高笑いもしない、謹直そのもののこの人が、謡曲や長唄ならまだしも、またこれらを経過した上ならともかく、繊細、情緒的といわれる歌沢に、しかも直接取り組まれたとは、まことに大胆かつ不可思議であった。

ある日自動車の中で、これも問わず語りに、こういわれたことがあった。

「ある晩、帰宅の途中で、とある家の前を通ると、その二階から妙なる旋律と唄声が漏れてきた。車をとめて聞くほどに、その「間」がいかにも普通の唄と違い、生活のリズムから外れているように感じた。あるいはこれは、歯車のような自分の生活を、いつとき別世界に誘って休息させてくれる唄かも知れないと思った。

また、段々ふえる宴会に、下戸で無芸の苦痛も感じていたので、その門をたたいたのが縁だったのだ」

入門してから相当長いはずだが、所詮は世間のいわゆる旦那芸・社長芸であろうと思っただ。ある日、料亭で歌沢の家元たちを呼んで一席を催した。

その時、弟子の笹の社長が、大家の家元に向かって、

「そこはこう唄った方がよいようだね」

と逆に指導している。家元もまた素直にやり直している。家元はすべて女性だったが、それにしてはそれがいずれも体験的・芸術的な視点からの解説指示で、家元も承服せざるを得なかったようである。

一見、遊びの道具と思われる芸事でも、要するに一旦飛び込むと、その道に徹底しなければ承知しない社長の人柄をよく示していた。

女性 観

今の「トーキー」映画は、映像のほかに音楽や声が出るのは当たり前である。しかし、昔は「サイレント」つまり無声映画で、たまに文字が出る外は絵が写るだけだから、このままでは意味が取れない。そこで、映画に説明者がつき、画面の進行につれて説明していった。これを、活動写真(映画)の弁士、略して「活弁」といったが、弁士たちは、活弁と略されるのは軽蔑されていようで嫌ったという。また、画面の効果を盛り上げるために、ステージの前に楽士が陣取って、音楽を奏でていた。私が映画を見た初期は、すべてこの活動写真時代だった。

やがて外国から、声の出る「トーキー」という映画がやって来た。しかし、これは言葉が外国語だから、やはり説明が必要だった。遅れて、日本でもトーキー映画が製作されるようになった。たしか『マダムと女房』(部分トーキー)といったか、昭和六年に作られたそうだ。そして、映画は発声の時代に入った。弁士・楽士に失業するものが目立ってきたのは、当然だった。私もよくそのトーキーを見たが、初めて見た外国映画には驚いた。その驚きは、現在の若い人に語っても、不思議がられるだけで、到底分かってもらえまい。それほど、私にはワンダフルであった。

そこで、弁士たちは、トーカー反対のストライキを始めた。しかし、時代の波には勝てなかったのだろう。次々と失業していった。聞くところでは、楽士中の管楽器演奏者は、町をねり歩くチンドン屋に転向した者が多く、また活弁の人々は、漫談を始めたたり役者になったりしたという。徳川夢声などは、その代表的人物であろう。私は夢声の話術のファンで、よく寄席やラジオで聴いたものだ。後年の『宮本武蔵』の朗読などは、まことに芸の最高のものといわれ、いまでも私は感心している。

銭湯は七銭だった。これが本当の「銭湯」だろう。ゴールデンバットというタバコが、十本入り、これも七銭だった。羊かんをはさんだカステラ風の菓子「シベリヤ」が流行したのも、この頃のことだと私は記憶している。

その頃だった。私が監査役として迎えられた東京倉庫運輸の社長は、前記のように、星野錫という人で、渋沢栄一の輩下だった。

私は、かねがね大川平三郎の「三人妻」のことがいささか気になっていたので、ある日それとなく、その星野社長の意見を聞いてみた。

星野社長は答えた。

「そうか、うん、君が気にするのはよく分かる。実はね、君、こういう話があるんだ」
そして続けて、次のような話を私にしてくれた。

「あの渋沢のおやしさんが、長男を廃嫡したことがあるんだ。渋沢先生は当時子爵だろう。その跡継ぎの問題だからね。側近が黙っていないんだよ。先生、あなたも相当な艷福家だから、世の中の酸いも甘いも充分ご承知のはずだ。だから、ご長男にもそれぐらいの理解があつてもいいじゃないですか、といったというのだ」

星野社長の話を要約すると次のようである。

その時代、女義太夫というものが非常に流行していた。その女義太夫に「どうする連」というのがあつた。女義太夫が寄席から寄席へと回って行く時若いファンが近寄つて、「おい、どうする、今夜はどうする」と聞きながら、あとを付けて行くのだった。

この熱狂的ファンの「どうする連」に、渋沢栄一の長男が入ってしまったのである。そのあげく義太夫の女師匠に惚れてしまつて、夫人がいるにもかかわらず、その師匠の家に入りびたりだった。そこで、渋沢栄一は断固として長男を廃嫡してしまつた。廃嫡するほどのことじゃないといつて、諫めた連中に向かつて、渋沢栄一は答えた。

「君達は、わしに理解があつてもよいと思うだろう。だが、自分はどんなに道楽をしても、一時といえども国家のことを忘れたことはないぞ。極端な話、国のことを考え、国のためにことをなす時の慰安というか、かくれ蓑というか、道楽はつまり一種の方便だったのだ。

決して、それに没入してしまつたのではないんだよ。家を忘れ、妻を捨てた、今の息子の生

活の、どこに国のためということがあるんだ」

かくして、渋沢栄一は側近らの諫言をしりぞけ、長男を廃嫡して、孫の敬三に子爵を譲ったのである。敬三は戦後、日銀総裁や大蔵大臣をやった人である。

渋沢栄一は青年時代に、明治維新前の勤皇派に属して、国事のためにそれこそ白刃の下をかくぐって来た。勤皇の志士には、いろいろ色里の物語があるが、国事に命がけの男というものは女性からも真剣に惚れられた。明日の命も知れない志士にとっては、そういうところが一種のかくれ場所であり、泣き所であったのかもしれない。

星野社長は語り終わって、こうつけ加えた。

「池田君、君も、大川さんという人が、本当に、自堕落な遊びのつもりでやっているのかどうか、その生活の中味を、もう一度よく見てごらんなさい」

それからというものは、改めて見なおしてみても、なるほどと思った。

大川社長の正夫人より、他の二人は年長者であり、しかも正夫人より前の結縁であったと聞いた。

それから数年後、私の気持ちを察したのか大川社長は問はず語りに、

「あの人たちは、僕がむかし製紙業や電気事業などで家を離れ、長い間山や森林に入っていて、国のため事業のために命がけで働いたその時に、僕に協力してくれた人たちなんだ。身勝手な

自分の道楽のためじゃないんだ。だから、その時の恩に報いているんだよ」と、しみりと漏らしたのを覚えている。

社長が旅行から帰った時など、東京駅や上野駅に三人とも打ちそろって、仲良く社長を出迎え、社長はまたみんなとなごやかに握手していた。

もっとも正夫人は、渋沢栄一の妾腹の娘であり、もしも大川社長がだらしない生活だったら、渋沢栄一は娘をやらなかったろうし、部下として許しておかなかったであろう。また正夫人もさすが渋沢栄一の息女、若くしてしかも大川社長のすべてを理解しての結婚であったのであろう。

私はこのことで、仏教でいう「大乘的」という意味が多少分かったような気がした。大乘的な考えとは、大きい乗物ということで、中心がきちんと安定しておればあとは一種の方便で、大いに拡大・包容していくという意味であらう。

後年、大川社長の座右銘を見ると、

一点のまごころあらば

万変してきわまらず

とあった。そんなことで私は社長を見直した。しかも「大乘的」というものの現実の解釈を教えられたような気がした。

私も、朝の九時に出かけ、夜中の二時に帰る勤務だったが、不思議に、つらいという気持ちは起こらず、むしろこの老社長の二十時間勤務に、私は生き甲斐をさえ感じていたようであった。

もっとも私は独り者で、自分の家には学生を置いて共同生活をし、自宅の方は学生にまかせるといふ形でやってきたので、全身全霊を社長に預けて宗教的な奉仕ができたのである。

——大川平三郎・渋沢栄一ともに夫人以外の「外妻」を持ったが、その道德観は、確かに現在の一夫一婦制度から見れば、疑問視されるであろう。

しかし、ひるがえって現在の道德観を考えてみれば、その混乱ぶりは昔どころではなく、ことに性道德については、どこかで狂ってしまったとしか思われない有様である。西欧が日本の家族主義、ことに日本の母性に学ぼうとしている昨今、西欧のセックスの有様をそのまま猿まねして恥じることなく、それをむしろ進歩的だと考えている姿にはただあきれられるばかりである。

宴会の指導

昭和の大不況時代、私の仕事は銀行をはじめ、色々なところから金を借りる仕事であった。そのために、人を招待する機会が多くなった。そういう時、場所の指定から、宴会の順序、サービスの仕事、芸能についての心得まで、こまかに指導するのが大川社長のやりかたであった。すべて合理的であるが、ひとつには大川社長は、酒を飲まない、というよりも飲めない体質の人だったので、酒宴は苦手であり、接客にはことさら気を遣ったのかも知れない。しかし、芸能のことについては、歌沢の大家だといわれていた。だが、それもいわゆる「名取り」になる旦那芸ではなかった。歌の歴史や、意味を掘り下げてそれを味わうという、むしろ「芸の深さ」による評判であったようだ。

私は肩書は支配人でも、借金は初めてであり、上級のお客の接待も、初めてであるから心配だった。従って、宴会のすべての事を社長に相談するのである。すると、それには、どの料亭を使って、芸者は何人ぐらい、だれを中心に呼ぶのだという具合に、事こまかく、指導してくれるのだった。

こんなこともあった。

宴会の最中だった。女中が私を呼びに来た。

「いま別室で、社長さんがお呼びです」

社長から指定された料亭だが、まさか社長が、ここまで来ているとは知らなかった。何事かと思つて、その宴会の座敷を芸者連中に頼んで、社長のいる部屋を訪ねた。社長は、おばあさん芸者に取り囲まれて、ご機嫌なのであった。

私を見ると、社長は笑いながら、

「池田、お前、いま宴会で唄った唄を、ここで唄ってみな」

社長は、私の宴会が気がかりで、だれかに様子をうかがわせていたらしいのだ。私は、仕方なく、恥ずかしさを押さえながら、さきほど宴会場で唄ったのを唄った。下手で叱られるかと思つて、ひやひやしていたら、

「むっ、そうか。まあ、その程度ならいいだろう。しかし、そういう柔らかい唄ばかりやっていてはいけないぞ。もう少し堅い唄もやったらどうか」

そういつて、早速本を取り寄せて、芸者連中に三味線をひかせると、自分で唄つて私に教えるのだった。お客を差し置いたまま、私に唄の稽古をさせるという、まことに妙なことであつた。

道楽というより、これは芸熱心というのだろうか。

「おい、接待ではね、芸というものは、うま過ぎてもいけないよ。また、下手過ぎても駄目だね。うますぎると、とかく天狗になり、お前だけでなく、お前の経営している会社までが、道楽の会社にみえてくるのだ。第一、うま過ぎると、お客が照れて、芸をやらぬよ。むしろ自ら考えて、少し下手なように唄って、お客に唄わせるのが、接待のコツというものだ」
そんなことまで、注意してくれた。

このように、あらゆる面について、すべてを検討して合理的に考え、それを親切に教えてくれた人であった。

これなどは、まさに古風な主従の様相で、笑う人もいるかも知れない。しかも、宴会場で芸能指導などは、今どきちょっと類例がないだろう。

第六章 大いなる親心

育英給費の返済

入社してから、三年目・四年目と続けて、私は大川社長のお伴をして樺太旅行に行った。女中に代わる「男中」として、八月の一月間、社長に四六時中仕え、身のまわりの世話をしたわけだ。

その旅行から帰った時、私は学生時代に大川育英会から支給された学費の総額二百円、現在ならば二千倍として四十万円ほどの額だが、それを返済しようと考えた。それは、この二回の出張で私の手許に、それだけの余裕が出来たからである。

その日はちょうど育英会の役員会で、理事全員が集まっていた。私はその席で、のし袋に包んだ二百円をうやうやしく差し出した。私はその育英会の理事会に向かって、こういった。

「私が頂いた学費は借りたお金だと思っています。現在、幸いにして大川先生のお陰で、そのお金をお支払いできますので、謹んで、返上したいと思います」

それが私の挨拶であった。これは決して皮肉な考えからではない。実は前にも述べたが、大川社長よりも前に、東大教授の矢作栄蔵博士から、

「借金をしなさい。借金は恥ずべきものじゃない。立派に成功して、その金を返すならば、

その金は社会に大変貢献したことになる、金の冥利というものだ。金を借りることよりも、返済の約束を守らないことが恥なのだ」

という経済哲学を聞かされ、その言葉の感銘が強く残っていたからである。大川育英会からの金は給与だが、この育英会が創立されなかったら当然、矢作博士の紹介の育英会から借りねばならなかったのであり、なんとしても甘える気持ちになれなかった。

ことに矢作博士の話のように、

「このお金は、順々に私と同じ育英会の後輩らの役に立つんだ」

と思う私の決心は固かったのである。

しかし、なみいる育英会の理事は、全員反対した。

「君がそういうことをすると、ほかの卒業生も、みなそうして返済しなければならなくなってくる。だから、君の行為は美しいが、前例をつくり出すので困る」

それが、理事らの理由であった。私は自分の返済したい気持ちと、返済してもらっては困るという理事らの言葉に、どうしても割りきれない矛盾を感じた。

すると、その時、中央に座っていた理事長の大川社長から声がかかった。

「そのお金は、君たち、受け取ってやんなさい」

鶴の一声で、理事会は受け取るようになった。後で聞いたところによると、大川社長はこう

いったそうである。

「その金は、あずかって置いて、しかるべきものを買ひ、増やしてやりなさい」

私のささやかな恩返ししの気持ちをも、素直に受け入れてくれた、いい換えれば、私に親孝行をさせてくれたのだ。そういう雅量の大きい大川社長であった。

実をいうと、この二百円のお金も、普通ならなかなか出来なかつたであろうが、私は秘書課勤務であり、鞆持ちであり、一日十七時間の勤務であつたので、いつも同僚以上の特別賞与を貰つていたので。また、前後二回の樺太旅行では、社長が私の旅費もすべてまかなつてくれたので、会社から正規に支給される旅費はまるまる私の手に残つたわけである。

この二百円も、いわば、社長から貰つたようなもので、貰つた資金で返済したわけである。例えてみれば、母親から貰つた小遣いで、お袋に土産を買つて帰る子供の、親孝行みたいなものである。

何もかも分かっているのに、「ありがとうよ」——とにっこり笑つて、それを受け取る親心にも似て、孝行させる雅量といおうか、後から考えても実にはほのぼのとした快い気分であつた。これはやはり、大川社長の生い立ちからくる人格だつたと思うのであつた。

現代のように、すべて金の世の中、政治はもちろん、教育から宗教に至るまで金で動く時代には、私の若い時代のような青年はいまい。

今にして思えば、戦前は確かに封建的社會も幾分残されていたかも知れないが、人間の心の美しさがあった。その人間の心の美しさを私に植えつけてくれたのは、外ならぬ大川社長であり、そして私の大学時代頂戴した宗教心のお蔭であると思われる。

なお、その後育英会は、学生の甘えをおさえて貸費制を併用するようになったという。

社長の『出世させ物語』

これは昭和六年末、講談社の雑誌『キング』十二月号に出た私の『出世物語』である。

『キング』は現在はない雑誌なので、少々触れて見ると、創刊号が出たのは大正十四年一月で、初代社長・野間清治は、五年も前からこの雑誌の創刊を考えていたとある。日本で、世界一の雑誌を出して、全世界を驚嘆させてやろうとの野心だった。一家一冊、百万部の普及を——この念願成就のため、野間は精魂を打ち込んだわけである。

『キング』の編集方針は、一口でいえば万人向き。すなわち老若男女、学者も実業家も、読みたくてたまらない——年齢、性別、職業、地位を超越した雑誌、という欲ばったものであった。誌名も分かりやすく、書きやすく、響きがよく、親しみのある、しかも高級な誌名で、付けるのにも苦心したという。

編集主任に選ばれたのは、野間と群馬師範時代の級友・長谷川卓郎。彼に広瀬照太郎記者を配し、野間自身はもちろん、彼の妻・息子と、それに講談社発行各雑誌の編集主任らに加わって、『キング』の原稿が審査された。各委員が九十点以上の採点をした原稿でないと、採用されなかったという。

こうして七、八か月を費やしてやっと創刊号の原稿がそろった。震災のため創刊号が遅れたが、創刊号は再版を合わせ七十四万部が市場に送り出され、全部売り切れた。野望はみごとに達成されたのである。当時よく売れていた雑誌でも、二十五、六万部といわれていたから大変なものだった。

野間は、発売の期日が迫った大正十三年の暮、「新雑誌出た。よろしく頼む」という電報を五千本以上も全国の書店へ打ち、宣伝につとめて一斉に売り出した。彼の予想通り、雑誌界に一大センセーションを巻き起こしたのである。

発刊二年目、新年号は百五十万部を売り尽くした。これを見ても当時最高の権威ある大衆雑誌であったことが分かる。

私がいま大川社長の没年と同年齢になり、五十年前を回顧してみると、聖書に、

「神は自分に似せて人を造った」

とあるように、この『キング』に載ったひとつの記事は、実は大川社長がその晩年、無名無力の一青年、池田を素材に、自分の理想と体験を通して、自らの手で自身に似せて一人の人物を創造しようとした、社長の「人づくり」と「出世させ」物語なのであった。

しかも初めは、互いに気付かなかったが、この演出の裏に働く不思議な力、すなわち仏縁によって結ばれた主従の縁であったことを感じさせる、一種の宗教劇でもあったのだ。

しかし、肝心の素材であった池田新一が、駄馬であり、大根役者であったため、折角の名プロデューサーの努力も結局結実しなかった。

その証拠に、昭和一けた時代の、世界を攪乱した経済台風も一過し、昭和十一年この名プロデューサーの没後、池田は「陸にあがったカップ」同然になってしまい、何らこの大恩に報いることなく、やがて大川合名を去っていった。結局、この出世物語もまた、波瀾時代が生んだ一過性のものに過ぎなかったようである。

もっとも、これに続く十年は戦争突入の超非常時で、昭和二けた時代に踊った「国家的名優」も、敗戦と共に忘却の彼方に雲散霧消してしまったのである。

雑誌『キング』に登場

そういつたある日のこと、仕事に熱中していると、受付から面会人だという。

「だれが来たのだ」

「講談社の雑誌の方です」

私は雑誌には縁がないので、また、広告でも取りに来たのか、それとも寄付のことだろうかと思ひ、気軽に席をたち応接室へ出向いた。

会って見ると、若い記者は、どこで調べたのか、私の生い立ち、経歴、大川社長との関係などについて、相当詳しく知っていた。

「ほう、よく調べましたね。それでご用件は、なんでしょうか」

「はあ、実はいま、うちの雑誌で、『サラリーマン百物語』というのを連載してるんです。そして十二月号に『出世物語』といったようなものを組むんですが、それに池田さんを取りあげることになりました……」

記者は、そういつて『キング』を一冊差し出した。どっしりと厚い立派な雑誌であった。

詳しく聞いてみると、『破格の出世十人男』という内容のものを編集中で、その十人の中に

私も入る予定で、取材に来たという。

「それで、私以外はどんな人々ですか」

「はい、大変恐縮ですが、選考がすむまでは、マル秘ということまで……」

そこでいろいろ質問に答えた。だが私のことが雑誌に出るということが、どうも実感として迫ってこなかった。

それから数十日が過ぎて、そのことを忘れかけた頃、『キング』の十二月号が送られて来た。さっそく手に取ってみると、目次にずらりと並んだ「出世男」の中に、私の名前もあった。

「進んで一職工となり粒々辛苦の鐘紡社長、津田信吾氏。（後年、鐘淵工業社長）
努力一点張りで大栄進の、政務総監、今井田清徳氏。

一步一步初一念を貫徹した、日銀総裁、土方久徴氏。（第十二代）
曾て例なき陸軍の出世頭、二宮中將と杉山中將。

超特急の海軍の出世頭、海軍大将、財部彪氏。（後年、海軍大臣）
事務家として卓抜の手腕をもつ、拓務次官、堀切善次郎氏。

欧米に名を轟かす、若き財務官、津島寿一氏。

卒業生中唯一人実業に志した、大阪商船社長、堀啓次郎氏。」

いずれも当時、すでに天下の有名人である。その中に無名の私を加え、三十歳で大会社の支

配人となった大川合名の池田新一氏」と題して、次のような記事が出ていた。

「財界不況の余波をうけて、甚大な打撃を蒙った樺太工業株式会社では、難局打開策として、昨年暮に根本的大整理を断行したが、その際思い切った社員の大淘汰を行ったのであった。

その犠牲の槍玉にあげられた者は、上は重役級から下は職工に至るまで無慮一千名の多きにのぼったが、この大整理に当たり、却って大栄転したという一社員があった。

それは同社の秘書から一躍大川合名の支配人に抜擢された、年齢僅かに三十歳（私註、実際は二十六歳）の池田新一氏である。

その驚くばかりの真面目さと堅実無比な勤務振りは、早くも社長大川平三郎氏の認めるところとなって居たとはいえ、この抜擢には直接原因をなす一つの物語があるのだ。

それは大整理のあった直前のこと、関西のある実業家との間に、社の盛衰にもかかわる、一つの難事件が持ち上ったものである。

これには重役連もことごとく手を焼き、殆ど談判破裂というところまで行ってしまった。

この時、大川社長は特に池田氏を呼んで、

『君、一つ引受けてくれないか』

と命じたのであった。社長として何か考えるところがあったのであろうか。

事は重大である。

『やっつて見ます』

と、きっぱり答えたのであった。

しかし重役の中には、斉しく氏の若さを危ぶみ、その成功は思いもよらぬと憂慮する者もあつた。

この事件の起こりから、経過及び先方の言い分等を逐一調べてみると、これは利害関係以外に多分に感情問題がからんで居るらしいことを見てとつた氏は、いよいよ交渉になると、微塵も策を弄さないことにした。

そして心底から赤誠を披瀝して、縷々利害得失を説くこと実に数時間に亘つたが、その真剣さと率直さに、相手は何時か引き入れられ、だんだん動かされていって、遂には若い氏の意気にひどく共鳴してしまつたのであった。

かくて結局無条件で一切を氏の手に一任するとまで折れたのであった。

これは驚くべき手柄である。会社の首脳者が再三再四交渉しても、その度毎に益々もつれて手のつけようもなかつた難事件が、最初から腹をきめて、唯一本槍に押しした氏の誠意と情熱によつて、見事に解決されたのである。

実に偉大なるかな、熱誠の力と称すべく、氏のこの破格の出世も決して、不思議ではなかつたのである。」

これが記事の大略である。私はやはり照れて顔を赤くしていただろう。

いまこのような手柄話は、私にはどうも思い当たらないのだ。おそらく、あの恐慌時代、サラーマン激励のための記者の作文であったのかも知れない。

ところが、「事實は小説よりも奇なり」というが、今五十年前の私を回顧してみると、実は、この記事以上の不思議なことに直面するのである。

私が大川社長に仕えたのは大正十五年（昭和元年）四月から、昭和十一年、社長逝去までの、晩年のわずか十一年間だった。

しかもその中の正味八年間の出来事である。要約すると、はじめの樺太工業秘書課勤務からわずか三年、二十六歳（『キング』では三十歳とある）の若僧が、資産四千万円（現在二千倍とみて約八百億）の合名会社の支配人に抜擢され、四十五円の月給は一挙に九十円に倍額昇給したのである。

その直後の大不況期で、世間は倒産・失業・就職難の最中に、私は、関係会社とはいえ数社の重役に推挙された。ことに『キング』掲載後の昭和七年、三十歳の若さで、しかも独身の私が当時、日本一、実は東洋一、世界で十二番目の国際的大劇場として建築中の、日本劇場の常務取締役任に推挙され、その建設からさらに経営まで委されたのであった。

多士済々の大川系の中で、同族でも血族でもなんでもない私にただ一人、この短期間にこれ

ほどの寵遇を受けたということは、どう考えても異常現象だった。

世間の目には、いわゆる「破格の出世」とうつつたに相違ない。

ところが、当時の私は法華経を唯一つの武器として、社長命令のままに死闘を続けていたので、こうした奇現象にも皆目気付かなかった。

いま考えてみると、昭和一けた時代のあの超非常時の背景があったとはいえ、なんといいても、私が育英会第一回の出身者であるところから、大川社長の人づくりの執念が私に集中したのだと思う。さらには、この裏に働く主従の仏縁と、仏の加護を信ずる宗教心の結実であつたと思う。

この冒険とも思われる社長の執念は、かつて渋沢社長が、二十歳の職工大川青年に会社の運命を背負わせて、単身渡米させた時の心情と、一脈相通ずるものがあるような気がする。この時大川青年は、渋沢社長の心境をどこまで理解していたか分からないが、弱冠二十代の私に對する大川社長のこれらの行為は、「獅子は我が子を千仞の谷底にけ落とす」というが、無意識の中に、私への偉大な信頼と冒険の交錯、そして大いなる神仏への期待があつたと思うのである。

私の結婚の親代わり

私の結婚についても、大川社長に世話になっていた。

私は大川社長の重要な仕事をあずかり、しかも世界的大恐慌という、未曾有の時期に遭遇して、悪戦苦闘していたので、結婚など考える暇もなかった。同時にまたその頃は、男は三十歳を過ぎなければ女房は貰わないというのが一般に常識でもあったような気がする。

やがて、大恐慌もおさまって、ほっとひと息ついた昭和七、八年頃、私の社会的立場上、同族のなかでも、結婚のことを心配してくれるようになった。

その一番大きな原因は、あの日本劇場の関係であったようだ。

日本劇場は、その頃日本一の劇場として、開業以来大変な話題となり、人気を集めていた。その経営も、世間的にはとても華やかに見え、色々と誘惑もある仕事であったわけだ。

だが、その実、*「足に暇なき水鳥」*の譬えのように、裏側の現実はなかなか厳しいものであった。映画のほうは、試写室というものがあり、次の映画は前もって試写ができる。しかし、アトラクションとして出すレビューやショーは、切りかえの都度、その日の興行が終わった後、夜中に翌日からの新しい出し物の稽古があり、それに立ち合わなければならぬのだから面倒

であった。

その稽古は、深夜の一時・二時という時間にやるわけだから、私たち幹部は、家に帰ってられない。ことに家族持ちは、夜中に帰っては家庭でも迷惑するだろうということになって、前にも書いたが近くの新橋のある待合を臨時に借り、稽古のある晩は、みんなでそこに合宿をした。

待合というのは、宴会のあと小グループで二次会を催す所で、風呂もあり食事の世話もしてくれるので、所帯持ちは家庭を悩まさないですみ、また緊急の打ち合わせの会議も開けるといふ便利さがあったのだが、やはり場所が場所だけに、世間からみるとなにか大変華美、遊蕩に見えたらしく、またねたみもあって、そこで私たちが遊んでいるように吹聴されたい。

とくに大川関係の長老たちの間に、独身者の池田に日本劇場のような「水商売」を、何時までもさせることは、結局、彼のためにならないのではないかと危惧する声もあった。

「いい加減で、池田を劇場商売から、足を洗わさんといけないぞ」

ちょうどその頃、東宝の小林社長の急襲で、大川社長が日劇の身売りを決意し、そのために私の責任も軽くなった。

私はすでに三十歳を越えたので、そろそろ身をかためようかと考えていた。その頃である。講談社の大衆向けの雑誌『キング』に、独身者の私について「昭和出世十人男」と銘うった、

ゴシップのような記事が載ったのである。

すると、早速、名門からの縁談が舞い込んで来るようになった。ところが、不思議なことに、それらの家庭はみな立派には立派なのだが、どれもみな片親がいなかったか、娘しかいないとか、結局、私とその家の相談相手にならなければならぬような話ばかりであった。

たまたま、友人の紹介で知った娘がいた。それは街の漬物屋の娘で、両親も健在だった。しかも同郷の出身で、私の両親とも話が合いそうであった。ことに父親は、羽織袴に威儀を正し、日本劇場へ私を見に来たという。そんな堅いよき古風さを守る人であった。

結局、その娘と結婚することに決めた。この選択には、大川社長も、大変よろこんで、「よし、わしが結婚式のこと、全部してやるよ」

と機嫌よくいって、結婚式や披露宴については、準備万端すべて、社長命令で運んでくれた。媒妁人を引き受けてくれたのは、大川社長の実弟で、田中家を継いだ田中栄八郎社長である。この人は、大川社長を語る場合に、忘れることのできない人である。当時は「大日本人造肥料」の社長であった。

大川社長のほとんどの会社にかかわっていた。二人の性格は、夫婦のような組み合わせであった。大川社長は、何事であっても、自ら先頭に立ち、隘路を切り開いて創造していくという剛毅な性格の人だった。それに対して、田中社長は、大川社長の通った後を何かとつくろった

り、調整したりしていくという、円満な性格の人である。兄弟だけでも、仕事の上でも、社会的にも良い女房役という性格の持ち主だった。

大川社長のあとに続くものは、ときには息切れしたり、抵抗を感じたりしたときもあっただろうが、そんなとき、田中社長の非常に人情味のある取りなしによって、救われたこともたくさんあったように私は聞いている。大川社長の成功の裏には、この二人の「性格的コンビ」とでもいうべき、よき協力があつたことはまちがいない。これは、ひとつの美談であるとともに、非常に重要な要素だと思うのである。

この田中栄八郎社長が、私に向かつて、

「わたしが仲人をやってあげるけど、わたしの家内は、君も知るように病身だから、大川鉄雄夫人を、女房役にするがいいだろうね」

「ありがとうございます。どうぞよろしく」

かくして、出雲大社の結婚式から、工業クラブの披露宴まで、全部大川社長と相談のうえ準備してくれたのである。

さて、披露宴はこうして工業クラブで行われたが、招かれた人々は、私のお客というよりも、全部、大川社長や田中社長のお客様であり、当時の有名人や各関係会社の社長、重役が大勢集まってくれたのである。あたかも自分の息子の結婚披露のようであり、おそらく社長は、

大川合名支配人の結婚式として、世話をやいてくれたに違いない。

私の田舎者の両親たちは、本当に感謝、感激の有様で、涙を流して喜んでくれたのはむろんである。本来なら私が、大川・田中両社長を正客として招くのが本筋であったのに、逆に両社長が、世話役を勤めるといふ誠に行き届いた思いやりを戴いた。しかもこのような、私の結婚にまでも、両社長の名コンビの麗しさが現れ、その温情あふれる二人の人柄に、合掌せずにはいられない私だった。

こうして結ばれた私達夫婦であったから、私達は両社長のご恩に報いるためにも、円満な家庭を築きあげねば、と誓い合ったのである。

酒悦の顧問となる

昭和十一年、妻の家では一月に弟が、五月には父が亡くなった。ともに最愛の肉親であった。この年の二月、例の二・二六事件と呼ばれる皇道派将校によるクーデターが起こっていた。

前日の夜半からの雪で、朝から一面の銀世界のなかを私は出勤したが、確か午前十時頃からはなんとなく社内がざわついてきた。噂を聞いてみると、朝のうちに新聞の号外が出て、数名の陸軍青年将校が、元老や重臣を暗殺したというのである。やがて「東京全滅」とか「戦争」とか様々な話が飛び交い、仕事どころではなくなった。

帰宅してから急いで夕刊を見たが、噂の事件はどこにも出ていない。だが、どうも気になったのでラジオを付けっ放しにして置いた。すると午後七時過ぎ、東京警備司令部から発表があった。

「……本日午後三時、第一師団管下戦時警備を下命せらる」

そして、治安は維持されているから、市民は各自の業に従事せらるべし、といった内容で、具体的には何事も分からなかった。

二十七日朝刊を開いてみて、初めて関連の記事が出ていた。

「二月二十六日、午後八時十五分、陸軍省発表。本日午前五時ごろ一部青年将校等は左記個所を襲撃せり。

首相官邸、岡田首相即死。斎藤内大臣私邸、内大臣即死」

などの大きな活字が目飛び込んで来た。大変な事件ということは分かったが、クーデターの成否はさっぱり分からなかった。新聞には岡田首相即死と出ていたが、実際に殺されたのは、秘書官の松尾伝蔵大佐だということも、後日判明したことだった。

そのうち次第に分かってきたが、反乱軍は一千四百人に及び、蹶起の趣意はロンドン条約問題や真崎教育総監更迭にみられる統帥権侵犯や、三月事件など、国体破壊の元兇である元老・重臣や軍閥ら君側の奸臣を斬除することにあつた。

——五月死去した家内の父は「酒悦」という福神漬の店を經營していたが、先に長男・次男を失い、今その跡継ぎはまだ中学生の三男であり、母の懇請黙し難く少々この店のことを考え手伝うことにした。

私は優秀な人材を迎えるには、今までの徒弟制度を止めて会社組織にすべきだと考え、株式会社「酒悦」として新発足させた。母親を社長、私の義弟を専務にしようとした。

しかし家内の母親は私を呼んで、

「自分は会社というものをやるにしては何も分からないから、どうかあなたが、代わって社

長をやってくれませんか」

というのである。

私はすでに大川合名の仕事をあずかり、その外の役員も兼ねているので、独断でこの社長を引き受ける訳にはいかない。

そこでこの事情を遠慮がちに大川社長に話した。叱られるかなと思ったが案に相違した。

「ああ、そうか。それは結構なことじゃないか。けれど、お前にはその仕事は出来ないよ」

私はまた遠慮がちにたずねた。

「名義だけの社長と考えてるんですが、やはり私には無理でしょうか」

社長はどうだったのか。

「うん、商売は無理だ。それではわしも手伝ってやろう」

こういって、私の社長就任を承知し、大川社長が顧問になってくれた。そしておまけに新会社の酒悦福神漬の看板まで書いてくれた。大川社長とはそんな人であった。私は名前だけの社長だったが、私がプライベートの仕事をする場合でも、大川社長は何のためらいもなしに賛成してくれた。

のみならず、手伝ってやろうということで、益・暮に社長宅に贈られてくる佃煮のようなものがあると、すぐに私を呼んだ。

「これは玉木屋の佃煮だ。こういう風に美しく煮てあるよ。それにこういう箱詰めにしてある。味を調べてみよう」

社長はいちいち私に見せて指導するのだ。そのようなありがたい親切心から、仕事熱心に私を指導してくれた。人を分けへだてせず、ただその人のため、ひいては世のためになることから、あくまで自分の知識をそこに傾けて指導していくのだ。

これが大川社長の人柄であり、その人物が、七十余の会社に関与するに至った原因だと、私は思うのである。

——二月二十七日午前三時戒厳令公布、二十八日午前五時には原隊復帰の奉勅命令が出た。陸軍は約二万四千の兵力を反乱部隊の周辺に配置した。二十九日朝以来、戒厳司令部は戦闘態勢をとりながら、ラジオ放送その他で特に下士官・兵の帰順を説得した結果、反乱軍は孤立し、午後二時頃には大部分の下士官・兵が帰営した。

この時のラジオ放送、「兵に告ぐ」

「今からでも、決して遅くないから、ただちに抵抗をやめて、軍旗のもとに復帰するようにせよ」

後年、有名な「今からでも遅くはない」の言葉はこうして流行語になった。会社など遅刻しそうな時に使ったものだ。暗い世相の中で、こういうものを冗談にしてしまう神経の凶太さは

日本人独特のものだろうか。

反乱軍将校は陸軍刑務所に収容され、七月五日判決、十二日に香田清貞以下十五人が死刑になった。こうして騒ぎはおさまったが、このクーデターは近代日本の中では最大のものである。

——そしてこの年末には、私は大川社長を失っていた。
私にとって昭和十一年という年は、不幸な年であった。

第七章

わが胸に大川平三郎は生きる

社長の家憲づくり

大川社長が製紙工場の見学と実習のため、アメリカに渡航したのは明治十二年で、当時アメリカは建国百年に当たっていた。

文明開化の世の中になったとはいえ、三越の前身三井呉服店で雇人に鬻まを切らせたり、最後の斬首が行われたりしたのもこの年だった。古着商殺しで悪名高い高橋お伝の首を、七世山田浅右衛門の三男、吉亮が斬ったのがそれである。

だが、アメリカはいちばん油の乗っていた時代で、あらゆる産業が台頭してきた隆盛期だった。国家として世界のナンバーワンを目指す、勤勉努力と合理化の実行者による、フロンティア魂の競い合いであった。大川社長はそのアメリカを眺め、ものの思考法に大きな影響を受けたのだろうと私は思っている。

社長から、「一銭を笑うものは一銭に泣く」という譬え話に関連して、自らの財閥論を聞かせてもらったことがある。

社長が晩年、湯河原で病氣静養中に、同族の将来のため家憲を作ろうとしたことがある。

その時、私を呼んで次のように話した。

「財閥が財閥ゆえに嫌われるのは、結局、財閥としての心の置き方の問題なのだ。財を集めるということは、国家的に大きな事業をする場合、大きな力になるんだ。

だからそうした方面に尽力するのはよいが、他人の仕事まで侵略するから憎まれ者にされるんだよ。財閥になったということは、そこに時代の流れとか、社会の恩恵があったからだよ。それを忘れてはいけない。

自分が今日思いがけない四千万（現在額として約一千億円）もの大財産を作り得たのは、第一に渋沢先生を始め諸先輩のお陰であり、又、日本が富国強兵の国是のもとに経済勃興を強力に助成した時流に乗ったためだ。しかもその時流に棹さして、自分は国のため家のため全身全霊を傾けて船を漕いだ。そこに神仏の加護があり今日の結果となったのである。

だから時代の流れと自分の船を漕ぐ努力とが相乗効果となって、自分でも思ってみなかつた財産が自然に出来上がったんだな。

その原因と歴史を忘れてはいけない。従って同族は今後、合名の資産は預り物と見て、一切手をつけてはならない。その果実だけを利用しなさい。その果実の一部で生活しなさいと教えたのだ」

「わしは家族の将来のため、家憲を作ろうと思ってるんだ。君、家憲の参考になるようなものを集めてくれないか」

「はい、承知しました。早速手配致します」

そこで私は三井・岩崎・住友などの財閥を訪ね歩き、事情を話して家憲を写し取って、社長の病床に持参した。

その中には旧三井家に残され、尊重されていた有名な「宗竺居士大遺訓」という家憲もあった。この人は三井家の家祖といわれ、京都に呉服店越後屋を開き、「越後屋千両」といわれる財産家になる人である。為替という信用制度を遠隔地取引に実施させ、三井コンツェルンを作り上げた人で、その名は三井高利というが、その高利の遺訓を、長男高平がまとめて制定した有名なものであった。

「一、一族は相互に親しみあい助けあうべし、もし一族相争うときは、一族滅亡の因となるべし」

に始まる三十条の家憲である。

ところで「財閥」というものを一口にいうとどうなるだろうか。すなわち財閥とは、日本独特のコンツェルン、つまり巨大な資本によって支配され、統制されている企業群であって、日本の場合には、その巨大な資本が三井や三菱のように一家・一族の手に握られているもの。そういういたらよいだろうか。

しかし財閥という言葉は、漢字の熟語には違いないが、多くの熟語のように中国から渡って

来たものではなく、日本で明治時代に作られた言葉である。それも初めは、学術上の言葉ではなく、しかもこの言葉が最初に使われ出した頃は、いまの財閥とはかなり違った意味を持っていたという。

財閥という言葉が使われ出したのは、明治二十年代末か、三十年代初めの頃と思われるが、この言葉の起こりは「甲州財閥」というような所から始まった。その頃、甲州出身の実業家だった若尾逸平・小野金六といった人々が、東京電灯会社の株を買い占め、経営権を手中に握って、明治三十二年十二月、若尾逸平の幕僚の一人佐竹作太郎を社長に据えた。それ以来、東京電灯の経営は長期間、甲州出身の実業家の手に握られていたが、若尾・小野といった「甲州閥」の東京支配が世間の目につき、甲州閥とか、甲州財閥という言葉が広く世に使われるようになったのである。

そして大阪では、近江銀行や、江商株式会社を作った江州出身の実業家らに、甲州ではなく、「江州財閥」の名が付けられ、名古屋では愛知銀行を中心とした実業家らに「清州財閥」の名が付けられて「財閥」という言葉が世の中に一般化し、流行語のように使われ始めた。

しかし正式な言葉として三井財閥・三菱財閥というように「財閥」なる言葉が使われるようになったのは大正時代の後半、日本に資本主義体制が確立された以後のことである。

それまでの明治時代には「富豪」とか、三井・三菱の「金権」とかいわれ、大正時代には

「三井王国」「三菱王国」という言葉が盛んに使われて、財閥という言葉は、大正の後半まで殆ど使われていなかったようだ。

なお昭和年代になって、国際的に「ユダヤ財閥」があり、中国・上海に本拠を置く浙江省出身の資本家たちを「浙江財閥」と呼ぶようになったが、これは日本人の発明した言葉を中国が逆輸入したものと思われる。

また三井・三菱・住友等がコンツェルンの形式を構成するようになったのは、日露戦争と第一次世界大戦を狭む、前後二十年ばかりの間のことである。

明治三十一年当時の内閣は大隈内閣であるが「板隈」とも「隈板」とも呼ばれた大隈重信・板垣退助の合同内閣であった。時の文部大臣の尾崎行雄は大日本教育茶話会の席上で演説をして、次のような意味のことを語った。

「仮に日本に共和政府ありという夢を見たとき仮定してごらん下さい。三井・三菱はその大統領の候補となるでしょう」

この一言は、朝野の大問題となり、尾崎文相はこの演説の責任を負って、辞職しなくてはならない羽目になった。有名な話である。

尾崎は演説で、日本が共和国になったらよろしいと語ったわけでもなく、また三井・三菱が大統領になればよろしいと語ってもいない。尾崎は、世人の黄金崇拜の思想を非難するため、

もし日本に共和制が制定されたら、黄金崇拜の日本人は三井・三菱を大統領にいただくかも知れないと皮肉ったのだが、その皮肉が通じなかった。そして尾崎が共和制を「礼讃した」と曲解され、猛烈な非難を浴びて、かねて内閣打倒を目指していた反対政党から、尾崎を辞任させる口実に使われたわけである。

だが、この尾崎の演説の一節は、三井・三菱という富豪がいかに大きな政治勢力を持っているかを証拠立てるにもなるわけである。

このころ、すでに大川社長には七十数社の関係会社があり、一見、大川合名を中心にした財閥のように見えたが、社長はいわゆる財閥を形成しようとはしなかった。

当時の財閥は、社会的使命を忘れて、物欲中心に資本主義的支配権を拡張し、やがて政治と癒着して、それを支配するに至る——というので社会的に強い非難の的でもあった。

昭和の初めから敗戦に至る昭和史の根底には、三井・三菱両財閥の政争、そして「財閥と軍閥」の政権争奪戦ともいべき内憂があった。

思えば、日本資本主義導入のパイオニアであった渋沢栄一も、日本工業化のチャンピオンであった大川社長も、財閥を作ろうと思えば作れたわけなのに、それをあえて行わなかったのは、その育ちと教養、すなわち両者の道徳と事業の合一主義に立つ国家的良心がそれを許さなかったのであろうと、私には思われる。

人間の欲望には限りがない。金持がどれほど財産を増やしても、さらにお金の欲求は際限なくひろがる。権力にしても全く同様で、一部政治家の現状を見ても、驚くばかりの権力欲のかたまりであり、目にあまるものがある。

こうした現在を考え、昔を振り返ると、どうも私には、昔の人間の方が自制力があり物欲には恬淡としていたように思われる。昔は物欲万能の世の中ではなかった。日本の伝統文化が潜在的に生きていたということの証明者として、道徳の洪沢、宗教の大川両者が存在した。

くだいようだが、私は、欧米の個人主義や拝金主義に溺れ、仁義の薄くなった現在の様相へ警鐘を鳴らしたい。再び宗教道徳の必要を強調せずにはいられない。

後継者は養子に

私が最初に入社した時「樺太工業」の幹部は、大川社長の長男・大川鉄雄が取締役工務部長、次男・大川義雄が、取締役営業部長であった。

大川社長には、この二人の息子のほか、娘が二人いた。次第に家庭の事情が分かってくると、この長男の鉄雄は、実は養子であった。大川社長は結婚してしばらくの間、子供が出来なかつた。そこで、夫人の姉の婚家先、尾高家の次男を養子に迎えた。これが鉄雄であった。その尾高家は、大川社長の母親の実家だから、尾高家の当主は、大川社長の従兄に当たるのである。

さて、鉄雄を養子に迎えた二年後に義雄が生まれ、続いて娘が二人生まれた。社長は四人の子持ちになった。貰い子すると実子が授かるという、世間にはよく例のあることだ。その息子二人が、そろって会社の役員になり、技術と営業を担当した。まさに理想的体制であった。

昭和四年は、私が大川合名支配人を命ぜられたときである。

将来の大川合名の後継者について、私はある疑問を持っていた。

というのは、その頃、大川社長の部下のなかにも、養子の鉄雄支持者、実子の義雄支持者とが、なんとなく二派に分かれた。つまり養子派、実子派の派閥があったようだ。

もつともその派閥は、会社経営の将来性に対する、技術系と営業系との対立であったのかも
しれない。

鉄雄は、早稲田の理工科の出身で、外遊もして腕を磨いた。技術の方面では、非常にすぐれた人であり、また地味な人である。何をやっても天才的で、本業以外に、囲碁でも、ピアノでも、ビリヤードでも、一流の達人であった。

後年には、古銭の収集家としても、専門の域に達していたようである。このようにどちらかというところ、独りで楽しむこと、の好きな性格のようであった。

そしてこの鉄雄は、長男ではあるが、社長の実子がいるので、多少遠慮勝ちであったと思うのである。

一方、義雄は慶応義塾の出身で、どちらかといえば社交性が強い人であり、競馬事業に興味を持ち、青森県の八戸に牧場を買って、競走馬をそこでまず養成する。飼育から出発するといふ徹底ぶりの競馬であった。

義雄が、大川社長の実の息子ということで、競馬方面の取り巻き連中も多く、本業以外の出費もふえ、その「つけ」が父親の方に回ってくる。そうしたことから、ひと頃は「大川社長も憤慨したこともあったが、側近の人々がなだめたものであった。」

「あなたの実子じゃありませんか、少々の道楽は許してあげたらどうです」

しかし、大川社長の悩みであったことは確かである。

義雄は、戯作者的才能もあって、小唄の作詞家でもあり、芝居物などは、河上溪介というペンネームでその作品が残っている。ビジネスマンであったが、このように文才もあった。あるいは大川社長のなかに、そういう血があったのかも知れない。

話は余談になるが、親の血をひいたか、義雄の子が、大川慶次郎という、現在、競馬界の有名人になって、マスコミでも大変な人気者になっているという。

とにかく、性格的には、まったく対照的な「兄弟」であった。

大川社長に仕えている私としては、将来この二人がどうなるかと、気になるのは当然である。そこで、ある日思いきって社長に聞いた。

「将来、大川合名の後継者にはだれがなるんですか。二人のお子さんのうち、どちらの方を選ばれるんですか」

「それは、鉄雄が跡取りだよ」

社長は目をつぶったまま、きっぱり答えていたのである。

「実はな、おれが尾高家から鉄雄を養子にもらうとき、その実母から、『あとになってあなたに子供が出来ても、鉄雄は跡取りだということをはっきり約束してください。そうでなければ、私は鉄雄をあげません』」

そういわれて、わしはきっぱり跡取りにするよと約束したんだ。だからその約束をわしは、ちゃんと守るんだ。男の約束だよ」

「分かりました。それでは、その方針でよろしいんですね」

ということになって、私はそれ以来、二人を比較することなく、大川社長の方針を中心にして行動することにした。次期理事長は、大川鉄雄と考えて、そのつもりで勤めを続けてきたのである。

そんなわけで、社内には派閥のようなものが多少はあったけれど、大川社長は毅然としていた。

鉄雄は、養父に対して大変行儀のよい、きちんとした勤め方をしていた。

一方、義雄は、どちらかといえば「甘えん坊」のようなところがあつた。だが、大川社長にとっては、必ずしも、几帳面なほうだけがよいとは思っていなかったようだ。また、ふびんな子ほどかわいいということもある。非常にデリケートな感じを、大川社長から受けたのである。世間一般では、あれだけ功なり名を遂げれば、そんな昔の約束などどうでもいい、養子を立派に一本立ちさせたのだから、義雄を跡取りにするといっても世間に通ることで、別段気にすることではない、と思ひ勝ちだ。

だが、大川社長はそうしたけじめはきちんとつけていた。最初の約束を守り、実行したとい

うことは、道義的裏付けが社長になれば、出来ないことである。やはり、社長の人格の然らしむるところだ。

この道義に非常に忠実であったところは、渋沢栄一の家における、その姿勢によく似ているように思われた。

社長の健康

今まで大川社長の健康について語るのを忘れていた。それほど社長は健康そのものであったのである。とにかく二十時間仕事の社長である。スポーツとか運動とか、特に体をきたえる姿を私は見たことがなかった。

それについて面白い話がある。樺太に真岡工場が建設され、付属設備としてクラブが出来た時、本土を遠く離れた未開の地であり、従業員の慰安のためにもと、テニスコートの設置が要望された。社長一家の恒例の夏季渡樺を機会に、当時テニスレディーであった令嬢を先頭に立てて社長説得を敢行した。

ところが難攻不落、遂に拒絶された。これは単に従業員を遊ばせないという、エゴの考えからではなく、深い心情からであったと思う。

一つには、仕事を労働即苦痛と考える西欧式仕事観と違い、日本伝統の仕事観、つまり仕事は文字通り奉仕であり、その中に生き甲斐も楽しみもあり、それが即ち健康であるという考え方であったと思う。もう一つは、渡米当時のアメリカのスポーツ観ではなかったかと思う。建国百年のアメリカは、世界制覇を目指して事業の鬼の時代であった。そこへユダヤのこれまた

世界制覇の手段として3S政策(スポーツ、セックス、スクリーン)が浸透してきていた。スポーツは、人心を腐敗墮落させるものとして、米国はこれを恐れ、非難していたのである。こうした影響があったのではなからうか。

社長の大患いと臨終の態度

大川社長は昭和七年頃から健康を害し、湯河原に静養するようになり、時々夫人に支えられて散歩する姿を見るようになった。

いかに強気の人とはいえ、七十歳を越えてからの大不況における心労は、やはり体にこたえたのであろう。

しかし、一年位で奇蹟的に全快し、未だかつてない、といわれるほどの一世一代の豪華な快気祝賀会が帝国ホテルで開催された。私は準備で多忙を極めた。

会の始めに大川社長は挨拶した。

「幸いに健康状態も回復したので、これからも国のため、産業界のために全力を尽くしますから、よろしくお願ひします」

もちろん満場の人々の拍手を浴びた。私は社長の元氣そうな姿と声に胸が一杯になった。

会場に舞台をしつらえて、六代目菊五郎や松本幸四郎を始め当代の名優を招き「三番叟」などの踊りで祝賀パーティーが繰りひろげられた。この快気祝は大川社長の再生の活躍を示すものとして、当時大評判になったものである。ところがそれから一年余の後、再び病魔におそわ

れたのだ。私の結婚式にあんなに元気で万事世話をしてくれたあの社長が、めずらしく自宅に床についた。

私はなんとしても、社長の病気を治したい一念から、毎朝自分の家で水垢離をとり、仏様に病氣平癒の願をかけ、社長宅を訪問してまた仏前で一心に法華經をあげた。

だが、家族の人々からは、私は狂信者のように見られ、むしろ迷惑に思われていたようにさえ感じられた。しかし私は祈願を続けていた。大川家の家族は父親の宗教心を知らずか、無信仰のようであった。

大川社長には主治医が付いていたが、例によって合理主義者の社長は、

「人間の体には自然治療力がある。病気を治すのは医者でも薬でもない。自分自身だ」

との信念から、自ら技術者になって、自分の体をあたかも自家用車を調べるような態度で研究していたようである。たとえば毎日の大便を漉し器にかけさせ、その結果を聞いて主治医に報告したりした。

だが、病気はなかなか良くなるので、立会診断をさせたところ、主治医の診断に大きな間違いがあったことが分かった。それは何か決定的な間違いであったようで、あたかも社長が技師長を叱るように、社長は主治医を大喝一声叱りつけるという一幕もあった。

社長は、自分の体を自分一人のためのものとは思わず、まだまだ国のための大切な体と思っ

ていたからこそ、誤診が許せなかったのではないかと思われるのである。大川社長が大声で人を叱ったのは、十一年間の勤務の間、これが初めてである。

それ以来、社長は主治医とあまり言葉を交わさなくなった。だからといって、悲嘆にくれるのでもなく、もっぱら沈思黙考している様子だった。

日増しに衰退する社長の姿を見るにつけ、私の非力を恥じると共に、もはや慰めの言葉も口からは出なかった。

——おそらくこの頃すでに死を観念し、覚悟を決めたように私には思われたのである。

その死の日が遂に来た。

しかし社長は、実に死に対して大胆な態度だった。その日、私は病床の社長の手を握りしめた。頼もしい、ごつい、大きな手であった。私は慰めの言葉も出ず、ただ無念と悲嘆に齒をくいしぼるばかりだった。知らぬ間に私の目から涙がこぼれたのか、社長は大患いの身であるのに、周囲にいた家族に向かって、

「おいっ、お前たちよく見なさい。池田の涙はただの涙ではないよ」

それは強い声であった。家族はみな一様にはっとした。

私は、その声とその言葉を今でもはっきり覚えてる。

本当に、私の仏に祈る切ない心を知ってくれたのだ。

私はただただ心で合掌した。そして方に一つの奇蹟を、み仏に祈るより他はなかった。

大川社長は最後まで、病苦を一言も、医師にも家族にも私にも訴えることなく、従容として瞑目した。みごとに大往生であった。時は昭和十一年も押しつまった十二月三十日。あすは大晦日という日であった。

私はこの闘病から臨終までの態度に、大川社長の心の深奥にある生きた宗教心、教養の深さを知らされた。十年前、樺太真岡工場の宿舍の風呂場で、

「お前の信仰は未だ本物じゃないよ」

といわれた教訓をふと思ひ出し、ただ胸がつまるばかりであった。あのとき、私は若気の至りで、社長に向かって本多師から学んだ宗教論を滔々と述べたが、今恥ずかしい思いがする。社長は黙って聞いていてくれたのである。

この昭和十一年は、一月に妻の弟が中学卒業の直前に死去、五月には妻の父が死去、そして十二月にはわが大恩人の大川社長の死去。そして、社会的には二・二六事件と、別章で幾度も触れたが全くこの年は私には苦しい暗い疲れ果てた年であった。

ただ私の救いは、信仰的な家庭と、そして大川社長の死によって一段と裏打ちされた生きる法華経があった。経を口ずさむことで勇気が湧いた。

——とにかく大川社長の死去は、私の生涯の一大事件であり、死をもって示された最後の一

大教訓であった。ここで私はあえていいたい。

「大川社長は生きている。わが胸の内に、そして法華経に包まれて生きている」
それ故に、私はこの書物にも、大川社長の盛大な葬儀や告別式のことには、一言も触れないことにした。

最高の退職記念

大川社長が七十七歳のときである。みんなで喜寿の祝いをした。

そのとき一番最初に「在」の字の色紙を書いて、私にくれた。

私はそれが大変嬉しかったので、掛軸にした。それを箱に入れて持って行ったら、その箱のふたの裏にまた、いわゆる箱書をしてくれた。大変ありがたい言葉が書かれている。

昭和十一年桜塘七十七回ノ誕辰ヲ迎フ

近者病癒テ更ニ業界ニ活躍セントス 朋友相諮リテ祝典ヲ挙クルノ企アリ 親近者来リテ在字ノ揮毫ヲ需ムルモノ多シ 池田新一君ハ桜塘ノ家ニ在リテ最重要ノ任務ヲ掌ルノ人 需ニ応シテ第一ニ揮毫セル作品ハ拙ナレトモ即是矣

大川平三郎識 印

大川社長が故人となつて数年後のことである。

私が大川合名を辞することになったとき、私は父親にいった。

「お父さん、十五年間大川先生にお仕えして、あなたへお土産になるようなものは、何もなくて、申し訳ありません」

すると、すぐ父が手をふって、

「いや何も私はいらないよ。お前の戴いた、大川先生の在の字の軸の、箱書に書かれてある、あの大川先生の言葉で、わしは充分だよ。あれは金に換えられない大きな退職金だよ」

こう答えてくれた。私は親父もやはり偉いと思った。

大川社長の篤く部下を思う、私への気持ちを実に尊くあらわれた文章で、私はいまでも時折床の間に飾って、大川社長の在りし日を偲ぶのである。

私の辞任

昭和十五年の一月二日、正月休みを利用して、かねて招請を受けていた、友人八木沼北支宣撫班長はじめ、私達が推薦した宣撫班員の慰問をかねて、満州国視察を執行した。前戦で北支軍の世話になったが、帰路山海関に新たに日中衝突が起こって、空路の遅延となり、帰国が予定より一週間程延びてしまった。この帰国の遅延による無断欠勤が理事会の問題となり、やがて私への非難となったという。

しかしその源は、むしろ社長没後一周忌頃から始まっていた。一周忌の後、同族の中で遺産分配を主張する者があって、結局同族会(理事会)もその事を承認決定してしまった。もちろん支配人である私には、一言も相談はなかった。

社長没後は後継者の鉄雄が代表者になったが、とかく養子の立場から遠慮がちだったし、同族内にも色々複雑な家庭事情があり、遺産分配論は押し切られたようだ。これは大川社長が最も嫌ったことではあったが。

「あの狂信的な池田がいては、大川合名にとってはまずいなあ」

そんな話も出たとか、私の耳に入ったが、社長在世の頃は、合名の仕事は社長と私と直接話

し合って行っていたし、大川家別宅のことなど一切私が社長から指示されていたので、私には私なりの立場があった。しかし、没後それが同族にはあまり好ましいことではなかった。とにかく社長の没後一年にして、早くも遺訓が無視されたのは、私には堪えられなかった。

その頃から私は退社を決意するに至った。しかし三年間はお礼奉公を、と万事こらえていた。従って、この度の満州行き事件はそのきっかけとなったにすぎない。そこで私は、

「先代の遺訓を守る自信がなくなったので、この際辞職をさせていただきます」

このような趣旨で辞表を提出した。この辞表内容が、またまた同族内の問題となったそうだが、これもすべて社長の偉大さに対する敬慕の情であったのである。

論語に「君子二君に仕えず」という名句がある。私も齡三十八歳にして大川家と別れ、二度目の主人を持たなかったが、これも大川社長が偉かったからだ。思えば、大川社長も三十九歳の時に、唯一人の主人であった、渋沢社長と別れて以来、二度の勤めはしなかった。

これも渋沢栄一が万人に勝れていたことと、本人の実力の故であろう。そういえば渋沢栄一自身、数奇な運命で徳川慶喜を主人に持ち、後に明治新政府の要職に迎えられたが、やがてこれを辞任して民間に下り、独自の道を歩んで、結局二君に仕えることをしなかった。

これは論語の実践であったのであろうか。

私が辞任してから五年後の、敗戦による財閥解体、天皇の人間宣言など、社会の変転を眺め

ていると、歴史の皮肉を感じるのだ。

大川家先代亡き後の財産処理はどうすればよかったのか、私には色々考えさせられるが、所詮財産とはあくまで流動的なもの、はかないものと思われてならない。

人間の幸福の問題は、結局心の在り方にあるうと思われる。現在の世相を見ると、ますます拝金主義が支配的に傾き、渋沢・大川両者の主張を思うと、切ないものがある。

奇しき主従の祈り

大川合名があゝの昭和の大不況突破に演じた冒険劇は、一面、また大いなる宗教劇でもあったことは、先に述べた。大川社長は大川一座の座頭であり、シナリオライターであり、しかも自らプロデューサーでもあった。

池田が大川一座に入れられた直後、舞台は時間で幕が開かれた。ところが社長は他の舞台が忙しく、こちらの舞台には顔を出せないという。残る座員は新米の池田一人。彼は舞台(実社会)経験もなく、指導も受けていないし、舞台稽古もしていない。そこへ座頭である大川社長から強制命令で、

「今が一座の運命にかかるところだ。お前一人で舞台を何とか持たせろ」と。正にぶつつけ本番の出演。これが池田二十六歳の初舞台であった。

ところが、これが実は大川社長と大川合名の命運を賭けた、やり直しのきかない死活の実戦舞台であったのである。

絶体絶命のなか、無力無縁の故に池田が掴んだ一本の藁、それは学生時代に本多日生師から学んだ法華経の法力であり、仏の加護であった。

一方池田を踊らせたプロデューサー大川社長は、我が子を千仞の谷底にけ落とす親獅子のよ
うに、孤立無援の部下にも大川合名の運命にも一顧だに与えず、また国家的諫言（金解禁尚早
論）の挫折をも怨まず、一切を天命に任せて、もっぱら国家と事業の安泰を神仏に祈っていた。
これはまさに、国難に対処し一身一族を顧みなかった忠臣「楠木正成」の心境にも似ている。

社長の宗教心こそは、環境から芽ばえ、西欧文化の宗教性の欠如によって逆に激発され、長
い人生体験によって自覚された結論であり、自身の人格の結晶であった。

従って、社長の祈りは、単なる窮余の一策である他力本願ではない。もつと次元の高い、
「天は自ら助くるものを助く」——の自他合力の宗教であった。常日頃はこれを口にせず、ま
た動作にも表さないが、一旦緩急あれば自ら人事を尽くしつつ、そこに天命、つまり神仏に祈
るという社長の「信仰」であったと思う。

このことは、難局突破の後に初めて私に漏らされたことで、あるいは家族も気付かなかった
ことであろう。

この死活の決戦場に、場面をへだてて戦いながら、主従が期せずして、その支援を神仏の力
に求めていたというのだ。

この不思議な主従の一致は、単なる偶然とは思えない、何か深い因縁を感じさせるものがあ
る。思えば難局突破の決戦は社長の生涯七十年の総決算であり、この祈りの姿勢にこそ、正に

一見理性的で豪気の人に見えた社長の真の人柄、「人情の人大川」の実像を見せられたものと思う。実はこれこそ、いわゆる宗教的「さとり」の姿であり、社長の真実の「出世」であったというべきであろう。

一方「役者」としての池田は、この初陣にこの神助を得て九死に一生の生還をし、しかもこの実践によってはじめて「実践の宗教」を体験し、この体験が終生の一大収穫となったのである。

もし昭和の初めに約束された、大川社長と本多日生猥下との会見が実現していたら、大川社長の上に更に偉大な事実が展開したであろうと、一面誠に残念に思われるが、あるいはこれが奇しくも、両者に育てられた私に残された使命であったのかも知れない。

今日なお、それを果たし得なかった私の非力を、誠に申し訳なく思う次第である。

第八章 大川平三郎の今日的意義

渋沢秀雄の『明治を耕した話』という着想に触発されて、私なりに大川平三郎の今日的意義を考えてみたいと思う。

明治維新はまだ終わっていない

降る雪や 明治は遠く なりにけり

今年、明治百十五年、中村草田男のこの俳句はいつ作られたか知らないが、今静かに、明治維新以来の日本の歴史をひるがえって考えてみると、明治は遠くなっても渋沢・大川両者が真に待望し命がけで耕した本当の維新、真の尊皇攘夷はまだ終わっていないと思う。

世にこの戦後を、第二の明治維新と呼ぶ人もある。「強兵」に代わり「富国」によって経済的独立と国防の達成を果たしたからであろう。

ある識者はこういう。この百三十年間に、日本は米国から三度の開国を迫られてきた。

第一の開国は、アメリカのペリーの黒船による、日本近代化の強制であり、その真のねらいは日本の植民地化であった。

第二の開国は、第二次世界大戦敗戦後の日本の軍備・集団性の破壊に、個人主義・民主主義

化とキリスト教文化の強要であり、これは日本の欧米化による精神的植民地化の狙いであった。第三の開国は、日本の国内市場開放の強制であり、敗戦後三十五年間で米国に次ぐ経済大国としてよみがえった日本の強力な輸出攻勢に対し、対日赤字の膨大化・景気後退・失業者増大に悩む米国が、その原因をすべて日本に帰し、自国の世界的権威の失墜を恐れ、日本国内市場の開放を迫って、日本の富国を叩こうとしていることである。

今これを大観すると、明治維新の旗印は尊皇討幕・尊皇攘夷であり、尊皇討幕は一応完遂したが、尊皇攘夷は米国の強要に屈して尊皇開国に転換し、欧米文化の吸収と日本の近代化を積極的に推進した。

その具体的な国策として富国と強兵の二国是を採用し、世を挙げて文明開化に酔ったかに見えたが、実はこの開国も富国強兵の実現による、欧米列強の日本植民地化の野望を防ごうとする尊皇攘夷の変形であり、積極的な国防政策であったのである。

従ってこの国是のうち、尊皇強兵が優先したことは当然である。天皇は大元帥となり、全皇族が軍籍に属し、国民皆兵の挙国的軍事体制が確立した。そして、日清・日露・第一次世界大戦に連勝の成果を挙げ、世界最強の軍事国家に成長して、アジアの盟主を自認するに至った。西欧植民地追放による、大東亜共栄圏建設を理想に掲げるが、やがてその勇み足により、自ら友邦内に植民地建設の自己矛盾を冒し、これが第二次大戦への誘因となる。

一方、経済的近代化即ち尊皇富国は、国防の第二線と見なされ、維新担当の人材の多くは軍官におもむいた。この担い手は、多く維新の動乱期の一旗組であり、渋沢・大川両者の憂国の信念と警世の主張を、非現実的な理想主義として過小評価し、世をあげて欧米崇拜・拜金主義・利己主義の汚染から、没道義的財閥の発生と政治への癒着へ向かってゆく。昭和初期に入るや、軍拡と近代化によるインフレ、国際収支の恒常的赤字、その解消策としての緊縮政策と金解禁、さらに世界大恐慌の追い打ちによる大不況と軍縮、これに対する軍部の反抗から日中事変勃発、そして太平洋戦争即ち第二次世界大戦と続いて、結局敗戦となる。

かくして、無条件降伏により天皇制存続のみを認められ、軍国日本の潰滅、皇族華族の特権階級廃止、財閥解体、殊に日本伝統文化の解体と、西欧民主主義が強制された。

しかるに戦後日本は、廃墟の中から不死鳥の如く復興し、僅か三十余年で米国に次ぐ経済大国に躍進して、維新の国は「富国」を達成した。ところが、これまた世界の脅威と見られ、あたかも経済戦争の如き様相を呈し、再び日本打倒が叫ばれるようになる。換言すれば維新の尊皇攘夷は今尚完了していないのである。

日本の敗戦について、興味ある物語を紹介する。

第二次世界大戦が終わった直後、祖国日本の運命について、南米ブラジルの日系人の間に、日本は神国であるから決して負けないという「勝ち組」と、否、現実に日本は無条件降伏し、

天皇の終戦詔勅がラジオで放送されたとする「負け組」が生まれ、対立が起こって流血の争いにまで発展し、未だ結着がっていない。

新聞の報道によると、最近勝ち組のリーダーが出身地の沖縄に帰って来たとき、日本のある作家がその人を訪ねて、日本が負けたことを熱心に説得したという。

しかし彼は表面は納得したようだが、腹の底では決して承服せず、日本には天皇制が存続しているし、世界の中で最も繁栄しているのではないか、それでいて、何故に日本は負けたといえるのか、と思っているとの記事だった。

この話はきわめて興味深い。武士道精神で育てられた明治の日本人にとっては、戦争に負ければ「国破れて山河あり」で、主君と共に一族郎党が城を枕に討死し、その国は滅亡する。従って日本が負ければ、天皇はじめ一億玉砕のはずである。ところが天皇制は無事存続し、国民は繁栄している。この現実を見ては、祖国が負けたとは思えなかったであろう。

又日本が受諾した「無条件降伏」は、世界の歴史上まったく例のないことで、これが行われたのは数世紀前、西欧先進国が植民地開拓のため、原住人を征服した時だけだったという。現に枢軸国である独・伊には強制せず、日本に対してのみであった。従って今度の無条件降伏の強制は、日本人を原始的未開人として扱った結果であろう。

当時の欧米先進国は、日本を中国の属国か、未開の野蛮国として、排日・毎日の人種的偏見

を持って見ていたし、今度の敗戦処理に当たって、ソ連のスターリンは天皇戦犯処刑を、米国のルーズベルトは天皇制廃止を主張したという。

しかるに連合軍総司令官マッカーサー元帥は、天皇制を許可した。但しそれは天皇制尊重の故ではなく、日本の歴史と、今次太平洋戦争における日本軍の玉砕の事実から見て、天皇制廃止には、一億玉砕の抵抗を覚悟せねばならず、結局これが中止を本国に建言せざるを得なかつたという。しかも彼は、この玉砕を、日本人の美德や忠誠心とは見ず、むしろ封建的野蛮性として、日本の精神年齢を十二歳と評価したのである。

こうした西欧のアジア観に対し、極東裁判における印度のパール判事の証言は、誠に意味深長である。

「敗戦日本に無条件降伏を強いるのは、戦勝国の一方的論理である。日本に戦争の全責任を負わせる理由はない。論ぜらるべきは、敗戦国に対する同情憐憫ではなくて、正義の所在はいずれに在るかを問うべきである」——ちなみに印度は長い英国の植民地から、戦後ようやく独立を勝ち得た国である。そして、極東裁判は国際司法上の問題裁判として、戦後三十八年の今日なお世論に問われようとしている。

この重大な危機に直面しながら、一方に天皇制は存続し、日本は生き残った。

この奇蹟は日本国体の真価と、残された使命のせいではあるまいか。

祖国を忘れた日本人

世界的強兵と富国を実現する偉大な能力を持つ日本民族が、なにゆえ、開国百年の今日もなお世界の理解と信頼を得られず、そして常に嫉妬とひんしゆくを買い、その成果が認められないのであろうか。

それは、自らの伝統文化を捨て、宗教性を忘れた日本民族が、無宗教の民族、即ち野蛮人と見なされているからである。

ある新聞は日米貿易摩擦で、またまたそのとばっちりを受けているという在米日系人の声を伝えて、次のように報じている。

「われわれは米国民として他民族に劣らぬ愛国心を持ち、米國に忠誠を誓っている。それにもかかわらず、戦時中は日本の真珠湾攻撃をきっかけに日系は全部財産没収の上抑留された。今度の貿易摩擦でも日本人と同一視され、非難ひんしゆくの眼を向けられている。これはわれわれが日系米人ではなく在米日本人と見なされ、いまだに移民当時の人種的偏見にさらされ、ジャップと軽視されている証拠である。

しかし戦前戦後の日本の成果を見ると、祖国日本は何か偉大な国と思われるのであるが、わ

れわれは先祖から、日本の誇るべき真の文化や歴史について、深く聞かされていないため、彼等を説得し理解させ、軽蔑感をなくさせることが出来ない。それにはわれわれは一日も早く祖国日本の真の文化を知らねばならないと気付き、今日日本のルーツ探し運動を展開しようとしている」――さらに在米日系人の生懸について左の如く記している。

「二世は、明治維新開国当時の欧米崇拜熱に冒されて移民したが、言葉が不自由なために自らを卑下して、都会を避け集団を組んで、農地開拓に従事した。従って先住米市民からは奴隷視され、軽視された。

二世は漸次都市に進出したが、概ね独立業種を選び、進んで市民組織に参加しなかったようだ。しかし三世・四世は、既に日本語も忘れ、幼時より先住市民と融合し、その組織に奉仕するようになった。しかもその中で、学童を始めとして各所に日系人の優秀性が認められ、戦時中の日系部隊の偉勲と共に高く評価されてきている。にもかかわらずいままなお対日関係のこじれが、必ず在米日系人に波及してくる」

ところが肝心の本国日本人の殆どが、自国の本当の文化、即ち高い宗教性を持つ、神話の生きている国であることを知らない。ことに戦後は、米国の占領政策により強制された西欧民主主義とその教育に洗脳されて、日本の伝統文化はますます忘れられ、現代日本人の発想はむしろ在日米人と化した観がある。

また数年前、息子の留学中の知人であるアメリカの銀行家老夫妻が、世界漫遊の旅をして帰途日本に立ち寄ったとき、こう語ったことがある。

「ヨーロッパは何と窮屈なことよ。日本に来てほっとしました」

私は彼等が京都・奈良・日光等の日本の古典的な文化に触れて、心の安らぎを得られたのだろうと思った。ところがよく聞いてみると全く違っていた。

「日本に来たら、都市の姿も人の心も、本国アメリカへ帰ったような、アットホームなものを感じた」

という意味だった。私は深い失望を感じると同時に、今日の日本人の文化が、宗教的自主性を失って、いかにアメリカナイズされてしまったかを、教えられたような気がしたのである。

また雑誌『自由民主』五十七年五月号の「ミッテラン仏大統領と日本の科学者江崎博士対談」で、ミッテラン大統領は初の訪日の心構えとして、

「日本の今日の経済的発展は、日本の長い伝統と文化を知らなければ、理解することは出来ない。自分は極力日本の庶民生活の中に入り、日本文化のルーツを探るつもりだ」といっている。

さすが文化の国フランスの、そして哲学者大統領の着眼の鋭さに驚歎すると共に、逆に伝統文化を忘れた、現代日本人の恥部に触れられたような感じがしたのである。

日本文化の源流

さて、それでは忘れられた真の日本伝統文化とは何であろうか。

歴史的には、聖徳太子以来法華經中心の神儒仏三教融合の文化であり、これに基づく十七条憲法によって、日本は護持され、内憂外患は克服されてきた。

第一条「和を以て貴しとなす」は、内政外交の基調であり、儒教の徳目。第三条「詔を承けては必ず謹め」は、神国日本の天皇の尊厳であり、神道の規範。そして第二条の「篤く三宝を敬へ、三宝とは仏法僧なり」とは、第一条の大和の心も、第三条の承詔必謹の心も、三宝帰依の宗教心によって裏打ちされ、培養強化されることを示されたものである。殊に太子はこの三教を束ねる法華經を、「万善同歸まんぜんどうきの教」として、一切人類の善法善徳を総合歸一する元基と感得され、更にこれが日本建国の神々の魂であり、万世一系の血脈を支えた法統であると、自覚されたのである。

では、この法華經に感応された太子の素心はどこから来たのであろうか。

それは一つには同時代の作である古事記神話の、イザナギ、イザナミ二神国生みの条に、その失敗(実は試行錯誤)を正す啓示者として、高天原の天津神が迎えた「フトマニ(太占)」(フ

トは仏、マニは如意宝珠」と、二つには天照大神岩戸隠れの危機に、思兼の神によって祀られた神体、それを象徴する三種神器、殊に神鏡である。神鏡は、大神自ら「この鏡を見ること吾を見るが如くせよ」と仰せられたが、大和即ち正義の基準であり、宇宙生命を同根とする法華経と、異名同体の天津神の法脈、従って天孫民族の魂である。ちなみに大聖釈尊もまたこの法華経を指して「この経を見るのを吾を見るが如くせよ」と遺訓されている。鏡と経との冥合、ここに法華経に感応された太子の素心があったと拝察される。さらにこの三教融合こそ大和即世界正義の具現である。外には実に東洋文化の融合、従って東洋民族平和共存の外交的基盤とし、内には蘇我・物部の対立を排して、仏神の和合即ち、本地(仏)垂迹(神)の一体観、神仏習合の協力観を顕示して、宗教性を統一し、国民精神安定の基範とされたのである。

維新の文化政策の失敗と廃仏毀釈

明治維新の為政者は、明治のはじめ神仏分離令を公布して、神話に発し聖徳太子により示された、三教融合の日本文化の体制を破壊し、神道一教(世にこれを廃仏毀釈という)を独尊として、仏教を分離追放した。仏教の初門である儒教は、当然根無し草となって宙に浮いてしまった。

ここに三教の鼎立は崩れて、一本足の神道文化となり、神社は国家の保護のもと、官幣大・中社の位階が付せられ、神職は神官として保証された。この神官の中には、仏教の破壊追放に積極的に協力した者もあつた由である。またこれ以後、この為政者に追従してか、皇族を始め軍人・官公吏の多くは、太子以来の仏教信仰を捨てて神教に改宗し、国民皆学の今日もお日本文化に対する無学ぶりを続けている。殊に「フトマニ」(太占)即ち法華経と離れ、神話の宗教性と断絶したことは維新の大失態であつた。

なぜならば日本の文化は、元来天与のものであり、神々により伝えられ皇室によって培われ、なかならずく聖徳太子により、この文化を中心に東洋文化を摂取融合して、立憲国家を創設されたのである。もし明治維新が尊皇を狭義に解し、単に天皇家の祖先を祭るが故に神道一本を国

教としたとするならば、これは一部国学者の偏見に惑わされた、維新要路の文化的不明を示すものである。これは聖徳太子の法勲を無にして、蘇我・物部の飛鳥時代に逆行するものであり、実に尊皇の本義即ち神話の精神、天皇の大御心に反し、ひいては日本をして仏戒を破る、いわゆる「謗法の国」とする恐るべき政策であったというべきであり、これはかえって神道自身の、そして神話の象徴たる天皇制そのものの存在を危くする暴挙であったというべきである。

もっともこれは、幕政七百年の積弊の罪でもあったと思われる。キリシタンや一向宗の反乱に懲りた幕府は宗派と寺と檀家を固定化し、その移動を規制し、寺を役場や学校など行政の末端組織とし、他方僧侶を官僧として身分を保証し、専ら宗派別の宗教儀式のみを担当させ、寺子屋の教育は読み書き算盤の初歩的な生活知識のみで、高等な宗教教育はむしろタブーとされた。従って仏教は、単に祖先崇拜の慣習的な家の宗教と化し、形骸化されてしまったのである。これはあたかもソ連の宗教政策の如く、覇権の幕政にとっては一面利点であったろうが、他面個人の信仰の自由を奪い、宗教的自覚、ひいては愛国心の喚起を妨げた。従って当時の無学な庶民の多くは、大勢順応、此土穢土、西方浄土、他力易行の念仏宗に移った。この自主性なき厭世思想は、神国再建に死闘する勤皇思想とは相容れず、むしろその妨害として、玉石を選ばず全仏教を切り捨てたのかも知れない。

維新の主動力となった松下村塾にしても、また渋沢栄一を生んだ尾高村塾にしても、国教と

して許された儒教教育が中心であり、しかもその徒弟は藩校に行けない下級士族や、農村の子弟であったといわれる。おそらくその出身である新政府の要人も真の宗教を知らず、従って日本文化の実体を理解し得なかったのであろう。しかしこれらは「廃仏毀釈」の免罪符とはならない。むしろ幕政以上の悪政であった。

後代維新の志士は、実は第二流の人物であり、あの尊皇倒幕の成功である大政奉還も、薩長・土肥の武力ではなく、実は徳川慶喜の自主的な行動、即ち水戸に流れる日本文化と、勤皇精神によるものだと言われるわけも、ここにあるのであろう。

ところが、この大失態は、維新成功の声に隠れて遂に気付かれず、従ってその反省も修復もなされなかった。そしてその因果は、実に明治百年の今日にまで及んでいると思われる。例えば関東大震災の天災を始めとして、昭和初期の各種の国難、やがて戦争、原爆被災、敗戦、無条件降伏。そして維新が残した一本足の文化、神道も追放され、遂に日本の文化体系は全滅、皇族を始め維新勲功の華族の追放、さらには天皇の人間宣言など、日本の国体に及ぼす応報は敵しかつた。しかもそれは戦後勝ち得た「富国」の打倒にまでも及んでいる。

日本の天佑と未達成の使命

本来日本の国体は天与の文化体系と天皇制の冥合一体の上であり、この文化は万世一系を保持し、また皇統はこの文化を護持し、あざなえる繩の如く相互扶助のうえに進展してきたのである。この三教融合つまり三本の文化体系が、前記のように明治維新で一本足とされ、その因果は遂に敗戦となり、一本足の文化もへし折られて全壊し、文化的支柱を失った国体は半身不随の危機に晒された。ところが不思議なことに国体の半身である天皇制だけが奇跡的に残り、この天皇制存続の故に、経済大国を実現したのである。

これは実に一大天佑であり、神風であったと私は考える。そしてこの天佑は(文化的失態を冒した為政者とその後継者には、うかがい知れない)皇祖皇宗の歴代天皇が自ら護持された文化性(まつりごと)による深厚の徳力と、護法護国に身命を捧げた先聖の法勲によるところであり、その意味するところは、日本国体のこの文化の重要性とこれを果たすべき一大使命のあることを示す天(仏神)の計らいであったと信ずる。この天与のチャンス逃さず、国民は過去の失態を反省し、速やかに日本伝統文化を修復して皇統の支えとし、速やかに日本国体の活性化を図り、東洋文化同様、今や終末期にさしかかる西洋文化を速やかに摂取融合して、これに汚

染された世界を救済せよ、との天命である。そしてこれこそは明治維新の最終の目標であったのである。

もしこれらに気付かず、この文化的不明を続けるならば、今時敗戦の大犠牲を再び繰り返すことになるであろう。

それは日本の伝統文化即ち「フトマニ」と法華経が、実は本来天与の「人類の文化」であり、「世界平和の支え」であるからである。

渋沢、大川両者から、維新の文化政策についての意見を私は聞かなかったし、また未曾有の敗戦までは、両者も予想しなかったであろうが、しかし両者の発想は、維新の文化的失態の影響と、西欧近代化の強制のはざまの中に累起する国難に、皇国の前途を憂慮した叫びであったに違いない。

しかもあの半世紀余にわたる、渋沢栄一の儒教的警鐘、大川平三郎の西欧文化に対する宗教的批判の警告が、期せずして維新で崩壊し、修復を忘れた三教融合の文化体系を補完し、さらに進んで西欧文化を咀嚼融合してわが文化体系とし、東西文明融合の理想実現を期待する発想であったのである。一見経済人と見えた両者からかかる愛国的発想の出たことは、おそらく伝統的日本文化の潜在意識から出たものであり、経済人である前に神話の中の宗教的日本人であった証拠である。

戦勝国の応報と戦後の世界

自らの伝統文化体系を破壊した明治維新が、こと志と違い後に建国以来初めての敗戦という因果応報を受けたのと同様に、敗戦を機に日本の文化体系を全滅させ、西欧民主主義を強制した戦勝国の側にも、その応報が必然した。それは正法である法華経に対して、外道である西歐物質文化及びバイブル教国が、法華経文化の国日本を倒した下克上による。

しかし日本には天佑が現れた。それは天皇制の存続と戦後経済の飛躍である。これは天皇の上には日本の神話と伝統文化法華経が生きており、皇統の「万世一系」、神国の「天壤無窮」が真実であったからである。そしてこの戦勝国の応報は、逆に日本の伝統文化は全世界の力を以てしても破壊されないし、また破壊してはいけない、人類の平和と共栄をもたらす世界共有の文化であることの証明となったのである。

戦後三十五年の世界を見ると、科学の進歩によって地球はますます狭隘化し、一角の波紋はたちまち全地球に及ぶ宇宙時代が出現した。その結果各民族国家は世界の実情を知り、今日まで二世紀にわたって世界を風靡した西歐物質主義や民主主義は、その実体が暴露され、大川平三郎の批判のように、宗教性を欠くが故にその威信は地に落ち、各所に亀裂を生じ、世界の民

族は各自の文化、ことにその中核である宗教に目ざめ、大きくはユダヤ教・キリスト教・マホメット教・共産教及びその分派が、互いに猜疑・排他・抗争して譲らず、あたかも宗教戦争の如き様相を呈してきている。

この文化的・宗教的対立による世界の醜態を拾ってみよう。

一、連合国であった米・ソの対立と軍拡競争、核保有のソ連優位に対する米の焦り、宇宙開発の戦力化(東西問題・宗教問題)。

二、一枚岩のソ連圏の国際的分裂、中国の離脱、西欧共産党のナショナル化、ソ連の農業不作と食糧難。

三、ソ連軍のアフガニスタン進駐、ポーランド革命政権の救援(宗教的恐怖心)、日本北方領土の接収。

四、米圏の西欧・アジア・アフリカ植民地の独立と離反、ベトナム戦の失敗(民族自決)。

五、ユダヤ・イスラエル共和国の誕生と、中東アラブ民族との対立(宗教問題)。

六、中近東油田のアラブ国有化と、アラブ民族の宗教的団結(民族自決)。

七、二回の石油ショック、日本製品の欧米輸出と米国のインフレ高金利、世界経済の混乱と同時不況、失業増大。

八、イラン革命と王制滅亡、米大使館人質事件、イラン・イラク戦争、ソ連のレバノン進攻、

英領フォーク島戦争など。——枚挙にいとまなしである。

たまたま、最近の読売新聞「編集手帖」によると、八十一年度戦略核弾頭数は米九千個、ソ連七千個、世界各国核兵器貯蔵拡大に費やした金額は約一千億ドル(二十三兆円)、同時進行中の戦争地域は世界十一か所。戦死者はレバノン八千人、イラン・イラク戦争十万人以上、アフガンでソ連兵死傷一万五千人。七六年から七九年までの間に百万の人口が消えた。

第二回国連軍縮特別総会の最後に「平和祈念黙禱」があつたが、拍手はばらばらだったという。果たして、世界の相互不信は拡散されたのであろうか。

それに引きかえ、敗戦国日本は独り経済的繁栄と、社会的安定を続けており、今や日本は一方で世界のナンバーワンと賞讃され、日本に学べの声と共に日本研究は世界的ブームといわれるが、反面では、先進国は過去の栄光と誇りからむしろ嫉妬心を燃やし、日本を物真似上手・仕事の虫・エコノミックアニマル・うさぎ小屋の住人などと蔑視している。

アメリカは、対ソ軍備の劣勢や、ベトナム戦敗退後の、後進十三諸国の独立による指導力の相対的低下の焦りと、それに加えて、かつて指導した日本の雪崩的商品輸出による、対日貿易収支の大赤字と失業者増等で不況に陥ったが、このアメリカの不況は世界の不況を呼び、この世界の同時不況の元凶は日本であると見做されて、日本は今や世界敵視的となった。

貿易摩擦はますます激化して、保護貿易論まで現れ、さては日本経済のアキレス腱である、

石油資源の封鎖による日本経済の打倒をほのめかして、こんどは日本国内市場の「無条件降伏」ならぬ「無条件開放」を強要している。

たまたま執筆中の現在、米国における日本の産業スパイ事件の報道が新聞を賑わしているが、これとてもその真相は、日本を警戒し軽視抑圧せんとする計画的畏であり、正にストレス的狂乱である。もっともこれは、いまだ真の日本を知ろうとせず、一方、知ることを怠っている日本との相互の醜態ではある。

昭和三十一年、私が日本生産性本部のチームに参加し渡米した時、そのスケジュールのなかに米人家庭の訪問があった。当時まだ日本は米国から救援物資を貰っている時であった。その米人の家族と次の様な対話がなされた。家族の一人がこういった。

「日本には戦後宗教がないそうだが、どうやって社会生活が営まれているのか」
日本の一行は、こもこも次のように答えた。

「そんなことはないですよ。日本には寺も神社もたくさんあります」
しかし彼らはそれでは納得しない。

「日本の神社というのはフェスティバル(お祭り)の場所、また寺はフュネラルセレモニー(葬式)の場所ではないか。そういう姿は真の宗教ではない」

こう批判されて一同啞然としたのである。

「アメリカにはまだ広いフロンティアがあるから、日本人をどんどんよこさない。ただし『よい日本人』をですよ」

さらにこういわれて、私は考えてみた。彼等のいうよい日本人とは結局、宗教心のある道義的な日本人という意味であり、アメリカ人が宗教や信仰をいかに重視しているか、又無宗教者をいかに軽蔑しているかを知らされた。

考えてみれば、宗教とは本質的には個人的な問題であり、しかも多種民族の米国にとって、宗教は歴史的にもアメリカの独立と統一の一つの柱である。彼等から見れば、家族主義で、家の宗教はあっても個人の信仰を持たず、結婚式は教会、子供の誕生祝は神社、そして葬式は寺、というような多神教的な生活態度の日本人は、無宗教者と映ったのであろう。

もともと日本人の宗教性は、古来大乘一実の国といわれているように、本質的には「フトマニ」即ち法華経的であり、西欧の唯一神教に対して、多神教的ではなくむしろ統一神教的なのである。また、古来純一無雑の国といわれ、天孫民族の文化性より同化された単一民族であるためか、個人と同様に、家族集団も、社会国家集団も、また神の国も、一個相似の生命体と観て、個人が集団と一体化して対立矛盾を感じない。むしろ集団生命の中に埋没溶解するところに安心安住を見いだしたようである。

また死の問題でも、肉体は土に還るが人格は死なない。古来神話の中にも、隠れ神はあって

も神の死はない。即ち死は、神話の昔から「お隠れ」であり、幽明の住居を異にするだけである。従って神話の神を始め、祖先は、生前同様に子孫とその生活を共にしている、と信じられている。従って信仰の対象である神仏も、集団の中心である父母・主長・天皇と重なり、それへの忠誠が宗教であると錯覚されて、ここに個人的信仰の曖昧さが生じ、誤解を招く原因があると思われる。維新後の唯一の国教として残った神道は、その典型である。神道が真の宗教であるためには、建国の祖神自身が信仰により神となった、その信仰の対象である「フトマニ」、**「神鏡」**即ち**法華経**を仰ぐ**姿勢**そのものを「祭りごと」として庶民に示すことであり、これこそ真の本地垂迹である。この構造を逸した神道は、単なる祖先崇拜の道徳であり、やがてはその威力を失うに至るであらう。

宗教時代と世界維新

二十一世紀は宗教の時代ともいわれる。

波瀾の二十世紀も余すところ僅か二十年足らず、宗教的時代の黎明は果たして何方いずかからであろうか。

さて私の体験の宗教実践の法華経も、遠く関東大震災を縁として、本多・大川両者の指導のもと、いわゆる宗教経済合一主義を以て遂に六十年を貫いてきた。思えば洪沢・大川両者は、道義経済思想の「事業は国のもの」という考えから、経済人でありながら財閥的大成を望まず、むしろその背景である儒教や仏教精神を貫いた人である。こうした意味において、私も両者の精神面を引き継いできた一人であると自負している。

科学の進歩は、世界を小さくして、人類は一家となり、各民族は隣組化した。今まで世界を風靡した西欧文化も、東の共産主義も、けっきょく弱肉強食・優勝劣敗の力の霸道であり、欺瞞の文化であることが暴露され、所詮人の心の扉を開き、世界に平和をもたらす大和道ではなかったことが明らかになった。真の救済は、世界稀有の文化国家としての、日本の存在を示すと共に、この文化が世界のものであり、その淵源もまた世界の教えである法華経であることを

示し、各民族自らの伝統文化即ちその宗教を曾て聖徳太子が神・儒・仏、三教を融合した如く、法華經により和合せざる以外にないと思つたのである。

数千年前、印度から東に流れた仏教は、地上の大木の如く幾多の受難を経つつも、正法を統一推進の頂点として、体系的に繁栄を維持してきた。

しかし西に流れた宗教は、恰も地下根の如く同一バイブルを基本としながら、多数の宗教・宗派に細分化して対立抗争し、やがてその信を失墜し、木根たる宗教よりも、むしろ大地が評価された。そして物質文明が生まれ、その下積みあるいは、手先として、地上樹たる東流の仏教文化を破壊して今日に至った。これは、東西両宗教が本来同根一樹であることの因縁を知らず、しかも地下根は、己が理想の天国が我が地上の一樹にあることに気付かなかつたためである。

今や物質文明の行詰りに世界の終末が叫ばれ、私の思うところでは、人類は諸手を上げて東方の光を仰がんと欲しているようだ。その光とは、取りも直さず日本に留まる東流の正法、法華經であり、西流の宗教に背骨を与え、これを融合統一し、体系化し、一体化することによって、世界平和の設計図が完成されると私は信じているのである。

大川平三郎が西欧文化の中に宗教性の欠如を見て、そこに日本伝統の宗教性、実は法華經を据え、これを融合摂取したことは、真の維新の目的であり日本近代化の典型であった。今やこ

の日本文化により画竜点睛された西欧文化を世界に還元する時期であり、これこそは二十一世紀の日本の使命である。このように考えてくると大川平三郎はまさに「日本の維新」の実践者であるばかりでなく、実に「世界維新」の先駆者であったというべきである。その愛国の魂は渋沢栄一と共にいまなお日本の行手を見守っている。

昭和の初期、駐日英国大使であったエリオットは、欧米生まれに見る仏教研究家だったそうだが、ある著書で、

「歴史の中で世界人類に最も多く読まれた本は何か。それはバイブルであることは何人も知っている。では第二番目に読まれた本は何か。それは法華経である。が、それを知っている者は極めて少ない」

と語っている。この英国人エリオットの心中に私は世界維新の可能性を見る心地がする。と同時に法華経の国、日本人にして、これを知らぬということは、遠く祖先に対し、また広く世界に向かって大いなる恥辱であるといわねばならない。

世界は脱工業化より、脱経済時代になりつつある。しかし脱経済人になるには経済万能の現実社会を超越しなければならず、それには宗教の力を借りねばならない。まさしく二十一世紀は宗教の時代である。

世界の二大宗教の一つを支えるバイブルが、物質主義に冒された今、残る一方の法華経こそ、

二十一世紀の人類にふさわしい精神ということが出来る。

今や時代の流れは、バイブルから法華經へと移行しているのである。しかし、国民哲学の文明時代は、従来のように宗派にこだわり、僧侶に追隨する時代ではない。国民の一人ひとりが日本の国体と釈尊の本旨に帰り、宗教の要である『法華經』を正しく理解することが、日本の発展のため、延いては世界の発展のために最も肝要である。

終わりに、二十一世紀を迎えるに当たり、仏教ならびに法華經の神髓である『法華經如來^{じゆりやうほん}壽量品』をここに掲げて、広く有縁の諸賢^{しよけん}に対し理解の資料とする。

○妙法蓮華經如來壽量品第十六

我れ佛を得てよりこのかた。經たる所の諸
の劫數。無量百千萬億載阿僧祇なり。常に法
を説いて。無數億の衆生を教化して佛道に
入らしむ。爾よりこのかた無量劫なり衆生
を度せんが爲の故に。方便して涅槃を現す。
而も實には滅度せず常に此に住して法を

説く。我れ常に此に住すれども諸の神通力を以て顛倒の衆生をして近しといへども而も見えざらしむ衆は我が滅度を見て廣く舍利を供養し咸くみな戀慕を懷いて渴仰の心を生ず衆生既に信伏し質直にして意柔輒に一心に佛を見たまつらんと欲して自ら身命を惜まず時に我れ及び衆僧

俱ともに靈鷲山りやうじゆせんに出いづ。我われ時ときに衆生しゆじやうに語かたる常つねに此こゝにあつて滅めつせず。方便ほうべん力を以もつての故ゆゑに。滅めつ不ふ滅めつありと現げんず。餘國よこくに衆生しゆじやうの恭敬くぎやうし信しん樂げうするものあれば。我われまた彼かの中なかに於おいて爲ために無上むじやうの法ほふを説とく。汝等なんだちこれを聞きかずして。但ただ我われ滅度めつどすとおもへり。我われ諸もろくの衆生しゆじやうを見みれば。苦海くかいに没もつ在ざいせり。かるがゆゑに爲ため

に身を現げんぜずして。それをして渴かつ仰がうを生しやうぜ
 しむ。その心戀こゝろれん慕ぼするに因よつて乃すなはち出いでて
 爲ために法ほふを説とく。神通じんづう力りき是かくの如ごとし。阿僧あそう祇劫ぎこふに
 おいて常つねに靈鷲りやうじゆ山せんおよび餘よの諸もろくの住處ぢうしよに
 あり。衆生しゆじやうこふ劫こふつきて大火だいくわに燒やかるると見みる
 ときも我わが此この土どは安穩あんのんにして天人てんにん常つねに充じゆう
 満まんせり。園林えんりん諸もろくの堂閣だうかく種種しゆじゆの寶たからを以もつて莊嚴しやうごん

せり。寶樹花果多くして衆生の遊樂する所
なり。諸天天鼓を撃て。常に衆の伎樂を作し。
曼陀羅華を雨して佛及び大衆に散ず。我が
淨土は毀れざるに。而も衆は焼けつきて。憂
怖諸の苦惱。是の如き悉く充滿せりと見る。
是の諸の罪の衆生は。惡業の因縁を以て阿
僧祇劫を過ぐれども。三寶の名を聞かず。諸

のあらゆる功徳を修し。柔和質直なるものは。則ち皆我身ここにあつて。法を説くと見
 る。或る時は此の衆の爲に。佛壽無量なりと
 説く。久くあつて乃し佛を見たてまつる者
 には。爲に佛には。値ひ難しと説く。我智力か
 くの如し。慧光照すこと無量にして。壽命無
 數劫なり。久く業を修して得る所なり。汝等

智あらん者。此に於て疑ひを生ずること勿
れ。當に断じて永く盡きせしむべし。佛語は
實にして虚しからず。醫の善き方便を以て、
狂子を治せんが爲の故に。實には在ども。而
も死すと言ふに。能く虚妄を説くもの無き
がごとく。我も亦これ世の父。諸の苦患を救
ふ者なり。凡夫の顛倒せるを爲て。實には在

れども而も滅すと言ふ常に我を見るを以て
 の故に而も憍恣の心を生じ放逸にして
 五欲に著し惡道の中に墮ちなん我れ常に
 衆生の道を行じ道を行ぜざるを知つて度
 すべき所に随つて爲に種種の法を説く毎
 に自らこの念を作す何を以てか衆生をし
 て無上道に入り速に佛身を成就すること

を得せしめんと。

又法華經に曰く

譬喩品第三

「今この三界は皆是れ我が有なり、その中の衆生は悉く是れ吾が子なり、而も今この処は諸の患難多し、唯我れ一人のみ、能く救護を為す」

法師功德品第一九

「諸の所説の法、其の義趣に随つて、皆実相と相違背せじ、若し俗間の經書（教育）、治世の語言（政治）、資生の業（産業）等を説かんも皆正法（法華經）に順ぜん」

年 譜

1865	1864	1863	1862	1861	1860年	年次
元年 慶応	元年 元治	3年 文久	2年 文久	元年 文久	元年 万延	渋沢栄一
御用談所調方出役	一橋家の家臣となり一橋慶喜と対面			二十二歳江戸へ遊学		
		両親と共に群馬県前橋に移る			十月二十五日大川修三同みち子の次男として埼玉県川越の三芳野村に出生	大川平三郎
						池田新一
幕府諸藩に長州再征伐を発令	佐久間象山暗殺	徳川慶喜入京	四月二十三日島津久光、有馬新七以下数名を伏見寺田屋に斬殺	ロシア軍艦ボサドニツク対馬に来航	木村喜毅、勝麟太郎ら軍艦感臨丸で品川より出航	内外事項

年 譜

1879	1877	1875	1872	1871	1869	1868	1867
12明治 年	10明治 年	8明治 年	5明治 年	4明治 年	2明治 年	明治 元年	慶応 3年
		第一国立銀行頭取		父市郎右衛門死去六十 三歳	明治新政府に仕官、商 法会所を設立、大蔵省 租税正	二十九歳フランスより 帰国	二十八歳徳川昭武に従 いフランスへ渡航
二十歳七月アメリカへ 留学	十八歳抄紙方長	王子製紙会社図引工と なり次いで職工	十三歳渋沢家へ書生と なり壬申塾に通い、の ち東京帝大の前身の大 学南校に移る	祖父平兵衛死去七十歳			
グラント將軍訪日	西南戦争	三菱汽船米国航路開始	大陽曆を採用、明治五 年十二月三日を六年一 月一日と改正の旨布告	廃藩置県行われる	會計官を廃止し大蔵省 を設置	江戸を東京と改称	パリで万国博覧会開催

1893	1890	1887	1885	1884	1883	1882	1881	1880
明治 23年	明治 20年	明治 18年	明治 17年	明治 16年	明治 15年	明治 14年	明治 13年	明治 12年
				婚、商工会議所会頭	妻千代死去四十二歳		に帆船会社設立	四十一歳益田孝等と共に
三十四歳王子製紙専務	婚 渋沢家の四女照子と結	奥に出張 二十八歳山林視察、工場選定の為静岡県の山	材パルプ術を伝える 九月欧州より帰国、木	究の為渡欧 二十五歳欧米製紙術研		賞金を受ける 吸気器発明により百円	心得 浅野セメント副支配人	改良 帰国、糊剤反抄紙法を
服部金太郎時計製造開	商法公布	始 東京手形交換所業務開	第一次伊藤内閣成立	官吏恩給令制定	叙勲条例制定	日本銀行開業	警視庁を東京に設置	一円紙幣発行

年 譜

1903	1901	1900	1899	1898	1896	1894	26年
36年 明治	34年 明治	33年 明治	32年 明治	31年 明治	29年 明治	27年 明治	26年
				五十八歳王子製紙辞任			
経営、九州製紙社長	札幌ビール常務取締役 に就任上海に渡る		再度札幌ビール監査役 上海華章造紙公司、総 監督	職、東洋硝子取締役、 札幌ビールを辞任、四 日市製紙専務取締役	三回目の洋行アメリカ へ渡る(30年5月帰国)	札幌ビール監査役	取締役に就任
埼玉県に出生	一月三十一日池田与五 郎同美弥の長男として						
	第八回衆議院総選挙	日本興業銀行法公布	台湾銀行開業	閣成立	第二次松方内閣成立	日清戦争	始、抄紙会社、王子製 紙と改称

1914	1913	1912	1909	1908	1907	1906
大正 3年	大正 2年	大正 元年	明治 42年	明治 41年	明治 40年	明治 39年
中国旅行	七十三歳中国興業会社 を設立		六十九歳癌研究所副総 裁、「渡米実業団」団長 として渡米			
樺太工業社長、東京湾 埋立専務取締役、仁寿 生命保険取締役	廠父修三死去	日出紡織設立、相談役、 日本鋼管設立、取締役	五十歳東洋汽船副社長 として渡米	木曾興業会長	磐城採炭取締役	四十七歳日本醋酸取締 役、中央製紙社長
			浦和六辻小学校に入学			
七月第一次世界大戦勃 発、第二次大隈内閣成 立	憲政擁護運動にて日比 谷に暴動起こり暴徒は 各新聞社を襲う	七月三十日明治天皇崩 御、皇太子嘉仁親王殿 下(のちの大正天皇) 即位元号大正となる	伊藤博文ハルピン駅に て暗殺	万国無線電信条約実施 により無線通信開始	樺太庁官制公布	南満州鉄道(株)設立、西 園寺内閣成立

1918 大正 7年	1917 大正 6年	1916 大正 5年	1915 大正 4年
			日米親善のため渡米
米価騰貴の際救済のため一万円寄附をもって紺綬褒章受章、樺太汽船社長、東洋興業相談役、日本フェルト取締役、東京板紙取締役	日本加工製紙取締役、大阪ホテル取締役、服部製作所取締役、緑川電力社長、大島製鋼所社長	京都殖産相談役、東海鋼業社長、東京金網相談役、北海道興業社長、日本コンクリート工業取締役、八代製紙社長、大日本自転車社長	浅野スレート副社長、城東電気軌道取締役
三月 三月県立浦和中学校入学			三月県立埼玉師範附属分校高等科入学
原内閣成立	日本工業倶楽部創立	ローマ法王特使来訪、寺内内閣成立	京都にて大正天皇即位大礼挙行

1922 大正 11年	1921 大正 10年	1920 大正 9年	1919 大正 8年
	<p>八十二歳日米関係委員 会代表として渡米</p>		
<p>六十三歳製紙事業尽瘁 により緑綬褒章受章、 熊本電気取締役、西武 鉄道取締役、共同パ ル取締役、静岡電気鉄 道社長</p>	<p>熊本電気軌道取締役、 石綿スレート相談役、 大栄商会相談役</p>	<p>武州銀行頭取、静岡電 力社長、武州貯蓄銀行 頭取、東京地下鉄道取 締役、聯合紙器相談 役、京浜運河取締役、 朝鮮森林鉄道社長</p>	<p>帝国人造肥料取締役、 鴨緑江製紙社長、上毛 製紙社長、大日本電力 取締役</p>
<p>加藤内閣成立</p>	<p>首相原敬東京駅にて暗 殺、高橋是清内閣成立</p>	<p>第一回国勢調査人口七 千百万人</p>	<p>西園寺公望らをパリ講 和会議全権委員に任命</p>

1927	1926	1925	1924	1923
昭和 2年	昭和 元年	大正 14年	大正 13年	大正 12年
長 日本国際児童親善会会	講道館後援会評議員、 日本放送協会顧問	渡米、日本無線電信会 社設立委員長、製鉄鋼 調査委員	東京女学館館長、日仏 会館理事長、文政審議 会委員、浅草寺観音会 顧問	大震災善後会副会長
粕川水電相談役、北電 興業取締役、照子夫人	上毛電気鉄道社長、日 本ヒューム管取締役、 朝鮮土地改良取締役、 武州瓦斯相談役	大川育英会理事長（私 財寄附）、金福鉄路公 司取締役、上毛電力社 長、六十六歳撰政宮殿 下真岡工場御台臨	浅野スレート相談役、 鶴見臨港鉄道取締役、 石川島飛行機製作所相 談役、鹿兒島電気相談 役、大同洋紙店相談役	朝鮮鉄道取締役、樺太 鉄道取締役、伏木板紙 顧問、帝都復興審議会 委員、六十三歳
	二十四歳三月東京商大 卒業、樺太工業に入社 秘書課勤務	四月より大川育英会の 給費を受ける 東京商大にて仏教研究 会（講師本多日生上人 に入会）		三月東京商大附屬専門 部入学、矢作栄蔵博士 を訪問
金融恐慌にて銀行休業 続出、田中内閣成立	十二月二十五日大正天 皇崩御、皇太子裕仁親 王殿下即位元号昭和と なる	普通選挙法成立、NH Kラジオ放送開始	清浦内閣成立	九月一日関東大震災

1932	1931	1930	1929	1928	
7年 昭和	6年 昭和	5年 昭和	4年 昭和	3年 昭和	
	十一月十一日死去九十歳	伊藤博文公伝記編纂会館顧問、海外植民学校顧問他	東京市方面事業後援会顧問、中央盲人福祉協会会長等	大礼記念国産振興東京博覧会顧問、少年団日本連盟顧問、交通協会相談役他	
			七十歳勲三等瑞宝章叙勲 貴族院議員として金解禁反対論建白	日本航空輸送取締役、伊香保ケーブル鉄道相談役、貴族院議員に勅選	死去五十五歳
三十歳日本劇場常務取締役、十二月日本劇場建設完了	三月本多日生上人遷化伊香保ケーブル鉄道取締役		八月二回目の樺太随行十月大川合名会社的主事(支配人)二十七歳	八月大川社長樺太視察旅行に随行 金解禁反対論のための資料収集に当たる	
二月井上準之助、三月團琢磨暗殺、五・一五事件にて犬養首相暗殺、日劇オーブン	金輸出再禁止、満州事変勃発、犬養内閣成立	一月金解禁実施、首相浜口遭難重傷	世界恐慌起こる、浜口内閣成立	張作霖爆死事件	

年 譜

1938	1937	1936	1935	1934	1933
13 昭和	12 昭和	11 昭和	10 昭和	9 昭和	8 昭和
		十二月三十日死去七十八歳	壽土地相談役、台湾興業会長、鉄鋼証券社長、台湾証券社長 満州国建国功労章受章	昭和六年―九年事変の功により旭日中綬章受章、上毛森林土地社長、東満州人絹バルブ社長	七十四歳三大製紙会社合併、台湾紙業相談役、大病に罹る
一月統一団講演に「本の芸術的意匠」と題	同心会を統一団同心会と改称し会長に就任、四月榎繁田醬油取締役	一月義弟死去、五月義父死去、酒悦商店を株式会社に改組三十四歳	酒悦商店の上野広小路新店舗建設	日劇を辞任、九月熊本電気軌道監査役、東京倉庫運輸監査役、十一月堀江福子と結婚三十二歳	
国家総動員法公布	第一次近衛内閣成立、日華事変	二・二六事件	貴族院で美濃部達吉の天皇機関説問題化する	満州国帝政実施、岡田内閣成立	製紙三社合併

1943	1942	1941	1940	1939
18 昭和 年 和	17 昭和 年 和	16 昭和 年 和	15 昭和 年 和	14 昭和 年 和
和賀上人より授戒、父母に披露	法華経の弘宣、東条首相に建白書と戦時宣布の許可申請却下される		三十八歳満州北支視察旅行、二月大川合名会社退社、四月東京漬物協議会理事長並びに全国漬物工業協議会理事長、十一月「黎明の原理」刊行宮中献納	班銓衡委員 去、六月北支派遣宣撫 して講演、四月義母死去、
煙草大幅値上げ、連合艦隊司令長官山本五十二	大詔奉戴日設定、マニラ占領、ビルマ占領	太平洋戦争	七月第二次近衛内閣成立	平沼内閣成立、ノモンハン事件、阿部内閣成立

1945		1944	
20年	昭和	19年	昭和
場・自家と堀江家全焼	統一団本部・酒悦道	申請許可される	統一団本尊等疎開を委託される、鈴木首相に建白書と街頭宣教許可
結の詔勅発布	鈴木内閣成立、戦争終	風特攻隊初出撃	職、小磯内閣成立、神
			六戦死、アッツ島日本 守備隊玉砕
			アメリカ空軍北九州に 初空襲、東条内閣総辞



著者略歴

池田新一（いけだしんいち）

明治 36 年埼玉県に生まれる。

大正 14 年大川育英会（大川平三郎理事長）
の給費を受ける。

大正 15 年東京商大卒業。

大正 15 年卒業と同時に樺太工業㈱入社、
大川平三郎に公私にわたり師事。

昭和 4 年大川合名会社支配人に就任。

伊香保ケーブル鉄道㈱、東京倉庫運輸㈱、熊本電気軌道㈱、
日本劇場、㈱酒税等役員を歴任。

昭和 18 年和賀義見上人より授戒得度し「義新」の名をうける。

昭和 40 年山梨学院大学教授

(財)大平奨学会理事長、桜影会会長、(財)統一団常任理事、
(宗)立正同親会会長。

東京倉庫運輸㈱、東運グループ各社社長、日本倉庫協会常任
理事。東京倉庫協会理事、㈱繁田醤油取締役。

国際ロータリークラブ会員。

著書「黎明の原理」、訳書「飢えなき生活」。

平成 4 年死去 法名 壽應院日新大徳 享年 90 歳

大川平三郎と私

昭和五十八年八月八日第一刷発行
昭和五十八年十一月一日第二刷発行
平成七年三月十六日第三刷発行

著者 池田新一

発行所 東京倉庫運輸株式会社

〒108 東京都港区海岸三十五番一〇
電話〇三(三四五三)八二六一番

桜影会
大平奨学会

印刷所 大日本法令印刷株式会社